常磐自動車道遺跡調査報告63

荒井遺跡（あらい）
赤柴遺跡（あかしば）

［第１分冊］

口絵１　赤柴遺跡調査区遠景（北東から）

口絵２　赤柴遺跡・荒井遺跡調査区遠景（南西から）

口絵 3　赤柴遺跡29・24・31号住居跡

口絵 4　赤柴遺跡50号住居跡と土坑群

口絵 5　赤柴遺跡出土縄文時代早期～前期の土器

口絵 6　赤柴遺跡出土縄文時代後期前葉の土器

口絵 7　赤柴遺跡出土縄文時代後期中葉の土器

口絵 8　赤柴遺跡出土平安時代の土器

序　　文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は，昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間，平成11年にいわき中央～いわき四倉間，平成14年にはいわき四倉～広野間，平成16年には広野～常磐富岡間が開通し，現在は富岡～宮城県山元間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には，先人が残した貴重な文化遺産が所在しており，周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では，常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について，開発関係機関と協議を重ね，平成５年度以降，埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成６年度から，現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成18年度から21年度に行った南相馬市の赤柴遺跡と平成20年度に行った南相馬市の荒井遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が，文化財に対する御理解を深め，地域の歴史を解明するための基礎資料となり，さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に御活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり，御協力いただいた東日本高速道路株式会社，南相馬市教育委員会，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成23年４月

福島県教育委員会
教育長　　遠　藤　俊　博

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査業務を行っております。

常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査は，平成６年度に，いわき市四倉町に所在する遺跡の調査を開始し，平成13年度をもって富岡ＩＣ予定地までの発掘調査は楢葉パーキングエリア予定地を除き終了しております。

また，平成14年度からは富岡ＩＣから相馬ＩＣ予定地間にかかる遺跡の調査を本格的に開始し，平成21年度に大熊町・南相馬市・相馬市・新地町に所在する10遺跡について調査を実施いたしました。

本報告書は，南相馬市に所在する平成20年度に実施した荒井遺跡，平成18～21年度に実施した赤柴遺跡の調査成果をまとめたものです。

荒井遺跡からは，縄文時代の低地部に立地する集落跡と，それに隣接する河川跡が調査され，縄文土器を主とする多量の遺物が確認できました。赤柴遺跡では，縄文時代の異なる時期の集落跡と，古代の集落跡を調査しました。またおびただしい量の土器・石器が出土しました。

今後，これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として，さらに地域社会を理解することや生涯学習に幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，この調査に御協力いただきました相馬市ならびに地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，埋蔵文化財の保護に対し，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年４月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　　富　田　孝　志

緒　　言

1　本書は，平成18～21年度に実施した常磐自動車道（相馬工区）遺跡調査の発掘調査報告書である。

2　本書には以下に記す遺跡調査成果を収録した。

荒井遺跡　　福島県南相馬市原町区馬場字荒井ほか　　埋蔵文化財番号　212500602

赤柴遺跡　　福島県南相馬市原町区馬場字赤柴ほか　　埋蔵文化財番号　212500193

3　本事業は，福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し，調査に係る費用は東日本高速道路株式会社が負担した。

4　福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配して調査および報告書作成にあたった。

平成18年度

副　主　幹　安田 稔　　文化財主査　佐々木慎一

文化財副主査　笠井崇吉　　嘱　　託　伊藤千洋

平成19年度

副　主　幹　吉田秀享　　文化財主査　宮田安志　　文化財副主査　阿部知己・笠井崇吉

文化財主事　三浦武司　　嘱　　託　伊藤千洋・竹田裕子

平成20年度

副　主　幹　吉田 功・吉田秀享　　文化財副主査　笠井崇吉　　嘱　　託　西澤正和

平成21年度

副　主　幹　吉田秀享　　文化財副主査　笠井崇吉　　嘱　　託　水野一夫

6　本書の執筆にあたっては，調査を担当した調査員が分担して行った。執筆分担は章・節末または文末に示した。

7　本書に掲載した自然科学分析は，次の機関に委託し付編にその結果を掲載している。

赤柴遺跡遺構出土炭化材の樹種同定・赤柴遺跡の種実同定　　株式会社 古環境研究所

赤柴遺跡の放射性炭素年代　　株式会社 加速器分析研究所

赤柴遺跡河川跡出土植物の同定・河川跡出土遺物の放射性炭素年代・

赤柴遺跡出土火山灰の分析　　株式会社 パレオ・ラボ

赤柴遺跡出土製鉄遺物の化学分析　　JFEテクノリサーチ株式会社

8　引用・参考文献は執筆者の敬称を略し，編ごとにまとめて掲載した。

9　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸機関からご協力いただいた。

南相馬市教育委員会　　東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は，以下のとおりである。

(1) 方　　位　　遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。表記がない遺構図はすべて図の真上を座標北とした。

(2) 標　　高　　水準点を基にした海抜標高で示した。

(3) 縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

(4) 土　　層　　基本土層はアルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせ，遺構内の堆積土はアルファベット小文字 ℓ と算用数字を組み合わせて表記した。
（例）基本層位－ＬⅠ・ＬⅡ…，遺構内堆積土－ ℓ １・ℓ ２…
なお，挿図の土層注記で使用した土色名は，『新版標準土色帖22版』(小山正忠・竹原秀雄編著　1999　日本色研事業株式会社発行)に基づく。

(5) ケ　　バ　　遺構内の傾斜面は「⊤⊤⊤」で表現したが，相対的に緩傾斜の部分には「⊤⊤」で表している。また,「⊤⊤」は後世の撹乱が明らかである場合に使用した。

(6) 網　　点　　挿図中の網点などの用例は，同図中に表示した。

2　本書における遺物図版の用例は，以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

(2) 番　　号　　遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は，例えば図１の１番の遺物を「図１－１」とし，写真図版中では「１－１」と示した。

(3) 注　　記　　出土グリッド，出土層位などは遺物番号の右脇に示した。

(4) 土器断面　　須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し，胎土中に繊維が混和されたものには▲を付した。

(5) 遺物計測値　　（　）内の数値は推定値，［　］内の数値は遺存値を示す。

(6) 網　　点　　挿図中の網点の用例は黒色処理を示し，それ以外は同図中に示した。

3　本書で使用した略号は，次のとおりである。

南相馬市：ＭＳＣ　　荒井遺跡：ＡＲＩ　　赤柴遺跡：ＡＳ　　竪穴住居跡：ＳＩ
掘立柱建物跡：ＳＢ　　鍛冶遺構：ＳＷｋ　　土　坑：ＳＫ　　焼土遺構：ＳＧ
集石・配石遺構：ＳＳ　　土器埋設遺構：ＳＭ　　溝　跡：ＳＤ　　性格不明遺構：ＳＸ
小穴・ピット：Ｐ　　グリッド：Ｇ　　河川跡：川

総　目　次

［第１分冊］

序　説

第１章　事業経緯と調査方法

第２章　地理的環境と歴史的環境

第１編　荒井遺跡

第１章　調査経過

第２章　遺構と遺物

第３章　ま　と　め

第２編　赤柴遺跡

第１章　調査経過と遺跡の概要

第２章　縄文・弥生時代の遺構と遺物

第３章　平安時代以降の遺構と遺物

第４章　河川跡と遺構外出土遺物

第５章　ま　と　め

［第２分冊］

付編　自然科学分析

第１章　赤柴遺跡出土炭化材の樹種同定　［株式会社 古環境研究所］

第２章　赤柴遺跡の種実同定　［株式会社 古環境研究所］

第３章　赤柴遺跡の放射性炭素年代　［株式会社 加速器分析研究所］

第４章　赤柴遺跡河川跡出土植物の同定　［株式会社 パレオ・ラボ］

第５章　赤柴遺跡河川跡出土遺物の放射性炭素年代　［株式会社 パレオ・ラボ］

第６章　赤柴遺跡出土火山灰の分析　［株式会社 パレオ・ラボ］

第７章　赤柴遺跡出土製鉄遺物の化学分析　［JFE テクノリサーチ株式会社］

写真図版　第１編　荒井遺跡

第２編　赤柴遺跡

報告書抄録

［第１分冊］本文目次

序　説

第１章　事業経緯と調査方法

第１節　事業経緯 …… 3

第２節　調査方法と出土遺物の分類 …… 11

第２章　地理的環境と歴史的環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 13

第２節　歴史的環境 …… 16

第１編　荒井遺跡

第１章　調査経過 …… 23

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層 …… 24

第２節　竪穴住居跡 …… 26

１号住居跡(26)　２号住居跡(30)　３号住居跡(32)　４号住居跡(36)

第３節　土　　坑 …… 39

１号土坑(39)　２号土坑(41)　３号土坑(42)　４号土坑(42)

第４節　土器埋設遺構・溝跡・性格不明遺構 …… 44

１号土器埋設遺構(45)　１号溝跡(45)　１号性格不明遺構(46)

第５節　河 川 跡 …… 47

１号河川跡(48)　２号河川跡(50)　３号河川跡(78)

第６節　遺構外出土遺物 …… 82

第３章　ま　と　め …… 88

第２編　赤柴遺跡

第１章　調査経過と遺跡の概要

第１節　調査経過 …… 91

第２節　遺跡の概要と基本土層 …… 96

第２章　縄文・弥生時代の遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡 …… 107

１号住居跡(107)　２号住居跡(110)　３号住居跡(114)　４号住居跡(118)　５号住居跡(121)

６号住居跡(125)　８号住居跡(129)　11号住居跡(131)　14号住居跡(136)　15号住居跡(141)

17号住居跡(143)　19号住居跡(147)　23号住居跡(152)　24号住居跡(157)　25号住居跡(165)
26号住居跡(167)　27号住居跡(169)　28号住居跡(172)　29号住居跡(175)　30号住居跡(182)
31号住居跡(188)　32号住居跡(192)　34号住居跡(195)　35号住居跡(199)　36号住居跡(205)
37号住居跡(208)　38号住居跡(212)　39号住居跡(218)　40号住居跡(222)　42号住居跡(224)
44号住居跡(226)　45号住居跡(229)　46号住居跡(233)　48号住居跡(235)　50号住居跡(237)
51号住居跡(244)　52号住居跡(248)　53号住居跡(252)

第２節　土　　坑 ……254

６号土坑(254)　７号土坑(254)　８号土坑(255)　10号土坑(255)　15号土坑(255)　16号土坑(257)
17号土坑(257)　18号土坑(260)　30号土坑(260)　32号土坑(261)　36号土坑(262)　37号土坑(264)
38号土坑(266)　39号土坑(268)　40号土坑(269)　41号土坑(272)　42号土坑(272)　43号土坑(273)
44号土坑(273)　45号土坑(276)　46号土坑(276)　47号土坑(276)　48号土坑(278)　49号土坑(278)
50号土坑(279)　52号土坑(280)　53号土坑(283)　55号土坑(283)　56号土坑(283)　58号土坑(285)
59号土坑(285)　60号土坑(286)　64号土坑(286)　65号土坑(286)　67号土坑(288)　68号土坑(288)
69号土坑(288)　70号土坑(290)　71号土坑(291)　72号土坑(291)　73号土坑(291)　75号土坑(293)
77号土坑(293)　80号土坑(296)　81号土坑(296)　85号土坑(298)　87号土坑(298)　88号土坑(298)
89号土坑(300)　90号土坑(300)　91号土坑(302)　92号土坑(302)　93号土坑(304)　94号土坑(304)
96号土坑(304)　98号土坑(306)　99号土坑(306)　100号土坑(306)　101号土坑(308)　104号土坑(308)
105号土坑(309)　106号土坑(309)　107号土坑(309)　108号土坑(311)　110号土坑(311)　111号土坑(313)
112号土坑(313)　113号土坑(315)　114号土坑(316)　116号土坑(316)　117号土坑(316)　118号土坑(317)
119号土坑(317)　120号土坑(319)　121号土坑(319)　122号土坑(321)　123号土坑(321)　126号土坑(323)
127号土坑(324)　128号土坑(324)　129号土坑(325)　131号土坑(326)　132号土坑(327)

第３節　焼土遺構 ……327

１号焼土遺構(327)　２号焼土遺構(328)　３号焼土遺構(328)　４号焼土遺構(328)　５号焼土遺構(328)
６号焼土遺構(330)　７号焼土遺構(330)　８号焼土遺構(330)　９号焼土遺構(330)　10号焼土遺構(331)
11号焼土遺構(331)　12号焼土遺構(331)　13号焼土遺構(331)　14号焼土遺構(332)　15号焼土遺構(333)

第４節　集石・配石遺構 ……333

１号集石遺構(333)　２号集石遺構(335)　３号集石遺構(335)　４号集石遺構(337)　５号配石遺構(338)

第５節　土器埋設遺構 ……339

１号土器埋設遺構(339)　２号土器埋設遺構(341)　３号土器埋設遺構(342)　４号土器埋設遺構(342)

第６節　性格不明遺構 ……344

５号性格不明遺構(344)　６号性格不明遺構(347)　７号性格不明遺構(348)　８号性格不明遺構(351)
９号性格不明遺構(355)　10号性格不明遺構(357)　11号性格不明遺構(359)　12号性格不明遺構(360)
13号性格不明遺構(362)　14号性格不明遺構(363)　15号性格不明遺構(365)　16号性格不明遺構(367)
18号性格不明遺構(367)　19号性格不明遺構(368)　23号性格不明遺構(369)　24号性格不明遺構(371)

25号性格不明遺構(374) 26号性格不明遺構(376) 27号性格不明遺構(379) 28号性格不明遺構(380)
29号性格不明遺構(386) 32号性格不明遺構(386) 34号性格不明遺構(389) 35号性格不明遺構(391)
第３章　平安時代以降の遺構と遺物
第１節　竪穴住居跡と掘立柱建物跡 ……393
７号住居跡(393)　９号住居跡(397)　10号住居跡(400)　12号住居跡(402)　13号住居跡(407)
16号住居跡(408)　18号住居跡(412)　20号住居跡(414)　21号住居跡(419)　22号住居跡(424)
33号住居跡(428)　41号住居跡(430)　43号住居跡(435)　47号住居跡(438)　49号住居跡(443)
１号建物跡(445)
第２節　鍛冶遺構 ……446
２号鍛冶遺構(446)　３号鍛冶遺構(450)　４号鍛冶遺構(453)
第３節　土　　坑 ……454
１号土坑(454)　２号土坑(455)　３号土坑(455)　４号土坑(456)　５号土坑(456)　９号土坑(456)
11号土坑(458)　12号土坑(458)　13号土坑(459)　14号土坑(459)　19号土坑(459)　20号土坑(461)
21号土坑(461)　22号土坑(462)　23号土坑(463)　24号土坑(463)　25号土坑(463)　26号土坑(465)
27号土坑(465)　28号土坑(465)　29号土坑(466)　31号土坑(466)　33号土坑(466)　34号土坑(468)
35号土坑(468)　51号土坑(470)　54号土坑(470)　57号土坑(470)　61号土坑(471)　62号土坑(471)
63号土坑(471)　66号土坑(473)　74号土坑(473)　76号土坑(475)　78号土坑(475)　79号土坑(476)
82号土坑(476)　83号土坑(476)　84号土坑(478)　86号土坑(478)　95号土坑(479)　97号土坑(479)
102号土坑(480) 103号土坑(481) 109号土坑(481) 115号土坑(481) 124号土坑(483)
125号土坑(483) 130号土坑(485)
第４節　溝　　跡 ……485
１号溝跡(485)　２号溝跡(486)　３号溝跡(488)　４号溝跡(489)　５号溝跡(491)　６号溝跡(495)
７号溝跡(496)　８号溝跡(498)　９号溝跡(498)　10号溝跡(499)
第５節　性格不明遺構 ……501
１号性格不明遺構(501) ２号性格不明遺構(502) ３号性格不明遺構(504) ４号性格不明遺構(506)
17号性格不明遺構(507) 20号性格不明遺構(508) 21号性格不明遺構(511) 22号性格不明遺構(511)
30号性格不明遺構(512) 31号性格不明遺構(514) 33号性格不明遺構(514)
第４章　河川跡と遺構外出土遺物
第１節　河 川 跡 ……516
１号河川跡(516)　２号河川跡(517)　３号河川跡(520)　４号河川跡(521)　５号河川跡(528)
第２節　遺構外出土遺物 ……531
遺物の分布状況(531)　土　　器(534)　土 製 品(587)　石器・石製品(590)
第３章　ま　と　め ……607
遺物について（607） 遺構について（612） 太平洋戦争関連の遺構と遺物について（615）

挿図・表目次

序　説

［挿図］

図１　常磐自動車道位置図……３
図２　地形分類図……15
図３　周辺の遺跡位置図……19

［ 表 ］

表１　四倉ＩＣ以北常磐自動車道関連市町村別発掘調査遺跡数……４
表２　荒井遺跡・赤柴遺跡周辺の遺跡……20

第１編　荒井遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図……23
図２　遺構配置図・基本土層……25
図３　１号住居跡……27
図４　１号住居跡出土遺物……29
図５　２号住居跡，出土遺物……30
図６　３号住居跡……33
図７　３号住居跡炉，出土遺物（１）……34
図８　３号住居跡出土遺物（２）……35
図９　４号住居跡……37
図10　４号住居跡炉，出土遺物……38
図11　１号土坑，出土遺物……40
図12　２～４号土坑，出土遺物……43
図13　１号土器埋設遺構，出土遺物……44
図14　１号溝跡，出土遺物……46
図15　１号性格不明遺構，出土遺物……47
図16　１号河川跡，出土遺物……49
図17　２号河川跡……51
図18　２号河川跡遺物出土状況（１）……52
図19　２号河川跡遺物出土状況（２）……53
図20　２号河川跡遺物出土状況（３）……54
図21　２号河川跡出土縄文土器（１）……55
図22　２号河川跡出土縄文土器（２）……56
図23　２号河川跡出土縄文土器（３）……58
図24　２号河川跡出土縄文土器（４）……59
図25　２号河川跡出土縄文土器（５）……61
図26　２号河川跡出土縄文土器（６）……62
図27　２号河川跡出土縄文土器（７）……63
図28　２号河川跡出土縄文土器（８）……64
図29　２号河川跡出土縄文土器（９）……66
図30　２号河川跡出土縄文土器(10)……68
図31　２号河川跡出土縄文土器(11)……69
図32　２号河川跡出土縄文土器(12)……70
図33　２号河川跡出土縄文土器(13)……71
図34　２号河川跡出土縄文土器(14)……72
図35　２号河川跡出土縄文土器(15)……74
図36　２号河川跡出土縄文土器(16)……75
図37　２号河川跡出土石器（１）……77
図38　２号河川跡出土石器（２）……78
図39　３号河川跡……79
図40　３号河川跡出土縄文土器……80
図41　３号河川跡出土石器……81
図42　遺構外出土土器分布状況……82
図43　遺構外出土縄文土器（１）……84
図44　遺構外出土縄文土器（２）……85
図45　遺構外出土石器……86

第２編　赤柴遺跡

［挿図］

図１　調査区位置図……92
図２　グリッド配置図……93
図３　遺構配置・基本土層位置図　北調査区……98
図４　遺構配置・基本土層位置図　南調査区……99
図５　南調査区遺構集中部配置図……100
図６　北調査区縄文時代早期後葉～前期初頭の集落……101
図７　南調査区縄文時代後期前葉の集落……102
図８　南調査区縄文時代後期中葉の集落……103
図９　基本土層（１）……104
図10　基本土層（２）……105
図11　１号住居跡……108
図12　１号住居跡出土遺物……109
図13　２号住居跡……111
図14　２号住居跡出土遺物……113
図15　３号住居跡……114
図16　３号住居跡出土遺物（１）……116
図17　３号住居跡出土遺物（２）……117
図18　４号住居跡……119
図19　４号住居跡出土遺物……120
図20　５号住居跡……122
図21　５号住居跡出土遺物（１）……124
図22　５号住居跡出土遺物（２）……125
図23　６号住居跡……126
図24　６号住居跡出土遺物（１）……127
図25　６号住居跡出土遺物（２）……128
図26　８号住居跡，出土遺物……130
図27　11号住居跡……132
図28　11号住居跡出土遺物（１）……135
図29　11号住居跡出土遺物（２）……136
図30　14号住居跡……137
図31　14号住居跡出土遺物（１）……139
図32　14号住居跡出土遺物（２）……140
図33　15号住居跡……141
図34　15号住居跡出土遺物……143
図35　17号住居跡……144
図36　17号住居跡出土遺物……146
図37　19号住居跡……148
図38　19号住居跡炉，出土遺物（１）……150
図39　19号住居跡出土遺物（２）……152
図40　23号住居跡……154
図41　23号住居跡出土遺物（１）……155
図42　23号住居跡出土遺物（２）……156
図43　24号住居跡（１）……158
図44　24号住居跡（２）……159
図45　24号住居跡出土遺物（１）……162
図46　24号住居跡出土遺物（２）……163
図47　24号住居跡出土遺物（３）……164
図48　25号住居跡……166
図49　26号住居跡……168
図50　26号住居跡出土遺物……169
図51　27号住居跡……170
図52　27号住居跡出土遺物……171
図53　28号住居跡……173
図54　28号住居跡出土遺物……174
図55　29号住居跡……176
図56　29号住居跡炉……177
図57　29号住居跡出土遺物（１）……179
図58　29号住居跡出土遺物（２）……180
図59　29号住居跡出土遺物（３）……181
図60　30号住居跡……183
図61　30号住居跡炉……184
図62　30号住居跡出土遺物（１）……186
図63　30号住居跡出土遺物（２）……187
図64　31号住居跡……189
図65　31号住居跡炉……190
図66　31号住居跡出土遺物……191
図67　32号住居跡……193
図68　32号住居跡出土遺物……194
図69　34号住居跡……196
図70　34号住居跡炉，出土遺物……197
図71　35号住居跡……200
図72　35号住居跡炉……201
図73　35号住居跡出土遺物（１）……203

図74　35号住居跡出土遺物（２）……204
図75　36号住居跡 ……206
図76　36号住居跡出土遺物 ……207
図77　37号住居跡 ……209
図78　37号住居跡出土遺物（１）……210
図79　37号住居跡出土遺物（２）……211
図80　38号住居跡 ……213
図81　38号住居跡出土遺物（１）……215
図82　38号住居跡出土遺物（２）……216
図83　38号住居跡出土遺物（３）……217
図84　38号住居跡出土遺物（４）……218
図85　39号住居跡 ……219
図86　39号住居跡炉 ……220
図87　39号住居跡出土遺物 ……221
図88　40号住居跡，出土遺物 ……223
図89　42号住居跡 ……225
図90　42号住居跡炉，出土遺物 ……226
図91　44号住居跡 ……227
図92　44号住居跡出土遺物 ……228
図93　45号住居跡 ……230
図94　45号住居跡出土遺物 ……232
図95　46号住居跡，出土遺物 ……234
図96　48号住居跡，出土遺物 ……236
図97　50号住居跡（１）……238
図98　50号住居跡（２）……239
図99　50号住居跡遺物出土状況 ……240
図100 50号住居跡出土遺物（１）……242
図101 50号住居跡出土遺物（２）……243
図102 51号住居跡 ……245
図103 51号住居跡出土遺物（１）……246
図104 51号住居跡出土遺物（２）……247
図105 52号住居跡 ……249
図106 52号住居跡出土遺物 ……251
図107 53号住居跡 ……252
図108 53号住居跡出土遺物 ……253
図109 ６～８・10・15・16号土坑 ……256
図110 10・15・16号土坑出土遺物 ……257
図111 17号土坑，出土遺物 ……258
図112 18号土坑，出土遺物 ……259
図113 30号土坑，出土遺物 ……261
図114 32号土坑 ……262
図115 32号土坑出土遺物 ……263
図116 36号土坑，出土遺物 ……264
図117 37号土坑，出土遺物 ……265
図118 38号土坑，出土遺物（１）……266
図119 38号土坑出土遺物（２）……267
図120 39号土坑，出土遺物 ……268
図121 40号土坑，遺物出土状況 ……269
図122 40号土坑出土遺物（１）……270
図123 40号土坑出土遺物（２）……271
図124 41～44号土坑 ……274
図125 41～44号土坑出土遺物 ……275
図126 45～48号土坑，出土遺物 ……277
図127 49号土坑，出土遺物 ……279
図128 50号土坑 ……280
図129 50号土坑出土遺物 ……281
図130 52・53号土坑，出土遺物 ……282
図131 55・56・58号土坑，出土遺物 ……284
図132 59・60・64・65号土坑，出土遺物 ……287
図133 67～69号土坑，出土遺物 ……289
図134 70・71号土坑，出土遺物 ……290
図135 72・73号土坑，出土遺物 ……292
図136 75号土坑，出土遺物 ……294
図137 77号土坑，出土遺物 ……295
図138 80・81号土坑，出土遺物 ……297
図139 85・87～89号土坑，出土遺物 ……299
図140 90・91号土坑，出土遺物 ……301
図141 92・93号土坑，出土遺物 ……303
図142 94・96・98・99号土坑，出土遺物 ……305
図143 100号土坑，出土遺物……307
図144 101・104・105・106・107号土坑，
出土遺物 ……310
図145 108号土坑，出土遺物……312
図146 110～114・116号土坑……314
図147 110～114号土坑出土遺物 ……315
図148 117～120号土坑，出土遺物 ……318
図149 121号土坑，出土遺物……320
図150 123号土坑，出土遺物……322
図151 122・126・127号土坑，出土遺物……323
図152 128号土坑，出土遺物……325
図153 129・131・132号土坑，出土遺物……326
図154 １～６号焼土遺構 ……329

図155 ７～15号焼土遺構 ……332
図156 １号集石遺構，出土遺物 ……334
図157 ２・３号集石遺構，出土遺物 ……336
図158 ４号配石遺構，出土遺物 ……337
図159 ５号配石遺構，出土遺物 ……339
図160 １号土器埋設遺構，出土遺物 ……340
図161 ２～４号土器埋設遺構，出土遺物 ……343
図162 ５号性格不明遺構 ……345
図163 ５号性格不明遺構出土遺物 ……346
図164 ６号性格不明遺構，出土遺物 ……347
図165 ７号性格不明遺構 ……349
図166 ７号性格不明遺構出土遺物 ……351
図167 ８号性格不明遺構 ……352
図168 ８号性格不明遺構出土遺物 ……354
図169 ９号性格不明遺構，出土遺物 ……356
図170 10号性格不明遺構，出土遺物 ……358
図171 11号性格不明遺構 ……359
図172 12号性格不明遺構 ……360
図173 12号性格不明遺構出土遺物 ……361
図174 13号性格不明遺構，出土遺物 ……363
図175 14号性格不明遺構，出土遺物 ……364
図176 15号性格不明遺構，出土遺物 ……366
図177 16・18・19号性格不明遺構，出土遺物 …368
図178 23号性格不明遺構 ……369
図179 23号性格不明遺構出土遺物 ……370
図180 24号性格不明遺構 ……372
図181 24号性格不明遺構出土遺物 ……373
図182 25号性格不明遺構，出土遺物 ……375
図183 26号性格不明遺構 ……377
図184 26号性格不明遺構出土遺物 ……378
図185 27号性格不明遺構 ……379
図186 28号性格不明遺構 ……381
図187 28号性格不明遺構出土遺物（１） ……382
図188 28号性格不明遺構出土遺物（２） ……383
図189 28号性格不明遺構出土遺物（３） ……385
図190 29号性格不明遺構，出土遺物 ……387
図191 32号性格不明遺構，出土遺物 ……388
図192 34号性格不明遺構，出土遺物 ……390
図193 35号性格不明遺構，出土遺物 ……392
図194 ７号住居跡 ……394
図195 ７号住居跡カマド ……395
図196 ７号住居跡出土遺物 ……396
図197 ９号住居跡 ……398
図198 ９号住居跡出土遺物 ……399
図199 10号住居跡，出土遺物（１） ……401
図200 10号住居跡出土遺物（２） ……402
図201 12号住居跡 ……403
図202 12号住居跡カマド ……404
図203 12号住居跡出土遺物 ……406
図204 13号住居跡 ……407
図205 16号住居跡 ……410
図206 16号住居跡カマド ……411
図207 16号住居跡出土遺物 ……412
図208 18号住居跡，出土遺物 ……413
図209 20号住居跡 ……415
図210 20号住居跡カマド ……416
図211 20号住居跡出土遺物 ……418
図212 21号住居跡 ……420
図213 21号住居跡カマド ……421
図214 21号住居跡出土遺物（１） ……422
図215 21号住居跡出土遺物（２） ……423
図216 21号住居跡出土遺物（３） ……424
図217 22号住居跡 ……425
図218 22号住居跡出土遺物 ……427
図219 33号住居跡 ……429
図220 33号住居跡出土遺物 ……430
図221 41号住居跡 ……431
図222 41号住居跡カマド ……432
図223 41号住居跡出土遺物（１） ……433
図224 41号住居跡出土遺物（２） ……434
図225 43号住居跡 ……436
図226 43号住居跡カマド，出土遺物 ……437
図227 47号住居跡 ……439
図228 47号住居跡出土遺物 ……441
図229 49号住居跡（１） ……442
図230 49号住居跡（２），出土遺物 ……443
図231 １号建物跡 ……445
図232 ２号鍛冶遺構（１） ……447
図233 ２号鍛冶遺構（２） ……448
図234 ２号鍛冶遺構出土遺物 ……449
図235 ３号鍛冶遺構（１） ……451
図236 ３号鍛冶遺構（２），出土遺物 ……452

図237　４号鍛冶遺構 ……454
図238　１～５号土坑，出土遺物 ……457
図239　９・11～14・19号土坑 ……460
図240　21号土坑，出土遺物 ……462
図241　20・22～26号土坑 ……464
図242　27～29・31・33号土坑 ……467
図243　34・35号土坑，出土遺物 ……469
図244　51・54・57・61・62号土坑 ……472
図245　63・66・74・76号土坑，出土遺物 ……474
図246　78・79・82号土坑，出土遺物 ……477
図247　83・84・86・95号土坑 ……479
図248　97号土坑，出土遺物 ……480
図249　102・103・109・115・124・125号土坑 …482
図250　130号土坑，出土遺物……484
図251　１号溝跡 ……486
図252　２号溝跡 ……487
図253　３号溝跡 ……488
図254　４号溝跡 ……490
図255　５号溝跡 ……492
図256　５号溝跡出土遺物（平安時代１） ……493
図257　５号溝跡出土遺物（平安時代２） ……494
図258　６号溝跡 ……496
図259　７・８号溝跡 ……497
図260　９号溝跡 ……499
図261　10号溝跡 ……500
図262　１号性格不明遺構 ……502
図263　２号性格不明遺構，出土遺物 ……503
図264　３号性格不明遺構，出土遺物 ……505
図265　４号性格不明遺構，出土遺物 ……506
図266　17号性格不明遺構 ……508
図267　20号性格不明遺構 ……509
図268　20号性格不明遺構出土遺物 ……510
図269　21・22号性格不明遺構，出土遺物 ……512
図270　30・31号性格不明遺構，出土遺物 ……513
図271　33号性格不明遺構，出土遺物 ……515
図272　１～３号河川跡 ……518
図273　１～３号河川跡出土遺物 ……519
図274　４号河川跡 ……522
図275　４号河川跡出土遺物（縄文時代１） ……523
図276　４号河川跡出土遺物（平安時代） ……524
図277　４号河川跡出土遺物（縄文時代２） ……525
図278　４号河川跡出土遺物（縄文時代３） ……526
図279　４号河川跡出土遺物（縄文時代４） ……527
図280　５号河川跡 ……529
図281　５号河川跡出土遺物 ……530
図282　縄文・弥生時代遺構外
出土遺物分布状況 ……532
図283　平安時代遺構外
出土遺物分布状況 ……533
図284　遺構外出土遺物（１） ……535
図285　遺構外出土遺物（２） ……537
図286　遺構外出土遺物（３） ……538
図287　遺構外出土遺物（４） ……540
図288　遺構外出土遺物（５） ……541
図289　遺構外出土遺物（６） ……543
図290　遺構外出土遺物（７） ……544
図291　遺構外出土遺物（８） ……546
図292　遺構外出土遺物（９） ……547
図293　遺構外出土遺物(10) ……548
図294　遺構外出土遺物(11) ……549
図295　遺構外出土遺物(12) ……550
図296　遺構外出土遺物(13) ……553
図297　遺構外出土遺物(14) ……554
図298　遺構外出土遺物(15) ……555
図299　遺構外出土遺物(16) ……556
図300　遺構外出土遺物(17) ……559
図301　遺構外出土遺物(18) ……560
図302　遺構外出土遺物(19) ……561
図303　遺構外出土遺物(20) ……562
図304　遺構外出土遺物(21) ……565
図305　遺構外出土遺物(22) ……566
図306　遺構外出土遺物(23) ……567
図307　遺構外出土遺物(24) ……568
図308　遺構外出土遺物(25) ……570
図309　遺構外出土遺物(26) ……571
図310　遺構外出土遺物(27) ……572
図311　遺構外出土遺物(28) ……575
図312　遺構外出土遺物(29) ……576
図313　遺構外出土遺物(30) ……577
図314　遺構外出土遺物(31) ……578
図315　遺構外出土遺物(32) ……580
図316　遺構外出土遺物(33) ……581

図317 遺構外出土遺物(34) ……582
図318 遺構外出土遺物(35) ……584
図319 遺構外出土遺物(36) ……585
図320 遺構外出土遺物(37) ……586
図321 遺構外出土遺物(38) ……588
図322 遺構外出土遺物(39) ……589
図323 遺構外出土遺物(40) ……591
図324 遺構外出土遺物(41) ……592
図325 遺構外出土遺物(42) ……593
図326 遺構外出土遺物(43) ……595
図327 遺構外出土遺物(44) ……596
図328 遺構外出土遺物(45) ……599
図329 遺構外出土遺物(46) ……600
図330 遺構外出土遺物(47) ……601
図331 遺構外出土遺物(48) ……602
図332 遺構外出土遺物(49) ……603
図333 遺構外出土遺物(50) ……604
図334 平安時代以降の遺構出土石器(1) ……605
図335 平安時代以降の遺構出土石器(2) ……606
図336 太平洋戦争関連の遺構と遺物 ……616

序　　説

第１章　事業経緯と調査方法

第１節　事 業 経 緯

１．事業概要と平成18年度までの事業経緯

常磐自動車道は，埼玉県三郷市の三郷インターチェンジ(以下ＩＣと略す)を起点とし，千葉県から茨城県，そして福島県の浜通り地方を通って，宮城県亘理郡亘理町の亘理ＩＣを終点とする高速自動車道である。このうち，三郷ＩＣ～いわき市のいわき中央ＩＣまでは昭和63年３月に供用が開始され，平成11年３月にはいわき中央ＩＣ～いわき四倉ＩＣまで，平成14年３月にはいわき四倉ＩＣ～広野ＩＣまで，平成16年４月には広野ＩＣ～富岡ＩＣまでの供用が開始されている。さらに，平成21年９月には，宮城県側の亘理ＩＣ～山元ＩＣまでの11.5㎞が開通し，残りは富岡ＩＣ～山元ＩＣまでの47㎞の区間となった。

これらの区間内に所在する埋蔵文化財については，茨城県境からいわき中央ＩＣまでの４遺跡を，昭和59・60年度に，いわき中央ＩＣ～いわき四倉ＩＣ間の埋蔵文化財に関しても，平成６年度から平成９年度にかけて10遺跡の発掘調査を，いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して発掘調査を実施した。これ以外の四倉町大野地区10遺跡の発掘調査は，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター(現，財団法人福島県文化振興事業団)に委託して実施した。

いわき四倉ＩＣ以北の路線内の埋蔵文化財については，平成９年度から福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター(現，財団法人福島県文化振興事業団)に調査を委託して実施した。平成９年度以降の市町村別発掘調査数については，表１に示したとおりである。

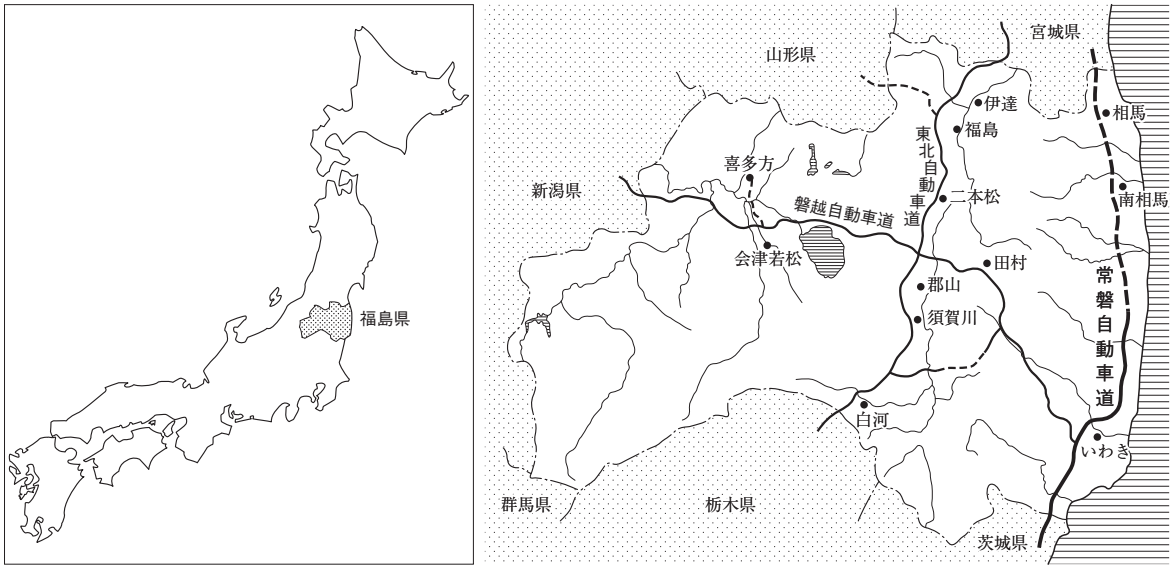


図１　常磐自動車道位置図

表１　四倉ＩＣ以北常磐自動車道関連市町村別発掘調査遺跡数

調査年度	市町村名											
	いわき市	広野町	楢葉町	富岡町	大熊町	双葉町	浪江町	南相馬市 小高区	南相馬市 原町区	南相馬市 鹿島区	相馬市	新地町
Ｈ９	5	1										
H10	4	3	3	2								
H11		4	5									
H12		1	7	5								
H13			1	5								
H14				1	2							
H15							2				2	
H16					3				2		1	
H17					3	2	2	3	1	1	1	
H18					1		6	4	4	1	2	
H19							4	6	7			
H20			1				7	5	3		1	
H21					1			1	3	1	1	3

なお，当初，富岡ＩＣまでは，日本道路公団東北支社(現，東日本高速道路株式会社東北支社)いわき工事事務所，富岡ＩＣ以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが，平成14年７月より富岡ＩＣ～浪江町までの区間についても，いわき工事事務所が管轄することとなり，相馬工事事務所は南相馬市～新地町までの区間となった。

２．平成18年度の調査経過

平成18年度の常磐自動車道(浪江～相馬)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は，福島県教育委員会との委託契約に基づき福島県文化振興事業団遺跡調査部の職員13名を配置して実施した。調査対象遺跡は，南相馬市小高区の４遺跡(荻原遺跡・大田切遺跡・大田和広畑遺跡・広谷地遺跡)と，同市原町区の４遺跡(仲山Ｂ遺跡・小池田遺跡・赤柴遺跡・原Ｂ遺跡)，同市鹿島区の１遺跡(北山下遺跡)，および相馬市の２遺跡(山岸硝庫跡・西原遺跡)の計11遺跡である。

年度前半期は，優先順の高い北山下遺跡・赤柴遺跡・原Ｂ遺跡・大田切遺跡の４遺跡を対象に実施した。いずれも４月中旬には表土除去作業を開始し，併せてプレハブ・駐車場等のヤードの整備を行った。北山下遺跡は３年目の調査となり，検出された中世の道跡が，現代まで踏襲して使用されていたことが判明した。赤柴遺跡や原Ｂ遺跡からは，主に縄文時代の集落跡が確認され，住居跡・貯蔵穴等の調査が行われた。大田切遺跡では，平安時代の木炭窯の操業に関わった工人たちの住居跡が確認された。なお，大田切遺跡や赤柴遺跡では，当初の調査指示面積が変更となり，大田切遺跡では3,800㎡の追加，赤柴遺跡でも2,900㎡の調査面積の追加となった。

５月の連休前には北山下遺跡の調査が終了し，相馬市の山岸硝庫跡の調査に移行した。原Ｂ遺跡・大田切遺跡の調査は盆前には終了し，大田和広畑遺跡と広谷地遺跡に移行した。その後，仲山Ｂ遺跡と小池田遺跡が追加となった。大田和広畑遺跡では，鍛冶炉を伴う平安時代の住居跡と縄文時代の貯蔵穴が確認され，広谷地遺跡では縄文時代の住居跡と平安時代の土坑等が調査された。

９月下旬には，赤柴遺跡と山岸硝庫跡の調査が終了し，荻原遺跡と西原遺跡の調査に移行した。西原遺跡では縄文時代の包含層と平安時代の土坑が確認され，仲山Ｂ遺跡では古代末と考えられる

精錬鍛冶炉跡が調査された。小池田遺跡は，工事計画との調整から1,000㎡の調査となったが，縄文時代の遺物が多量に出土した。

10月末には広谷地遺跡の調査が終了し，11月下旬から12月上旬にかけては，大田和広畑遺跡・西原遺跡・仲山Ｂ遺跡・小池田遺跡で調査が収束した。荻原遺跡では，縄文時代の集落跡と平安時代の製鉄関連遺構のほか，旧石器時代の石器群が出土し，12月下旬に調査が終了した。

なお，年明けの19年３月には，工事工程上の最優先箇所である小池田遺跡・広谷地遺跡の4,500㎡の表土剥ぎを実施した。

この他，平成16・17年度に発掘調査を実施した仲山Ｃ遺跡と明神遺跡を，福島県文化財調査報告書第432集『常磐自動車道遺跡調査報告42』として，同じく，平成17年度に発掘調査を実施した南相馬市の四ツ栗遺跡（２次調査）・熊平Ｂ遺跡・荻原遺跡（２次調査）を，福島県文化財調査報告書第433集『常磐自動車道遺跡調査報告43』として10月に報告書を刊行した。

３．平成19年度の調査経過

平成19年度の常磐自動車道（浪江～相馬）建設予定地に関わる遺跡発掘調査は，福島県教育委員会との委託契約に基づき福島県文化振興事業団遺跡調査部の職員17名を配置して実施した。調査対象遺跡は，南相馬市原町区に所在する小池田遺跡（２次調査）・西内遺跡・石神遺跡・戸鳥土遺跡・赤柴遺跡（２次調査）・切付遺跡・片倉遺跡の７遺跡と，同市小高区に所在する荻原遺跡（４次調査）・君ヶ沢Ｂ遺跡・大田切遺跡（２次調査）・横大道遺跡・大田和広畑遺跡（２次調査）・広谷地遺跡（２次調査）の６遺跡の計13遺跡であり，調査面積は総計51,100㎡である。

東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所（以下，相馬工事事務所と略す）との事前協議を受けて，４月より原町区小池田遺跡（2,800㎡）と赤柴遺跡（3,000㎡），小高区の大田切遺跡（500㎡）と広谷地遺跡（4,600㎡），大田和広畑遺跡（2,900㎡）の５遺跡の調査を開始した。

５月には，小池田遺跡で縄文時代前期の大型住居跡等を検出したが，５月末で調査を終了した。赤柴遺跡では，縄文時代早期の竪穴住居跡等を検出した。大田切遺跡では近世以降と思われる道跡等を検出し，５月15日には調査を終了した。広谷地遺跡では，平安時代の竪穴住居跡のほか，遺跡の中央部を南北に縦断する道跡を検出した。大田和広畑遺跡では，縄文時代中期の複式炉をもつ大型の竪穴住居跡を検出した。５月から調査を開始した小高区の横大道遺跡（4,000㎡）は，作業の安全上の問題等から２期線部分を含めて調査することで相馬工事事務所の了承を得た。

６月に入り，原町区では戸鳥土遺跡と赤柴遺跡の調査を進めた。戸鳥土遺跡では竪穴住居跡のほか，消滅したと思われた戸鳥土塚群の痕跡と思われる遺構を検出した。小高区では大田和広畑遺跡の調査終了をうけ，荻原遺跡の調査を開始することとなり，オオタカの営巣による規制から遠い北側9,100㎡から調査に着手した。また，調査も終盤となってきた広谷地遺跡では，道跡が調査区外へ続くことが確認されたため，協議の結果，新たに200㎡の調査区を拡張することとなった。

７月には原町区で戸鳥土遺跡の調査員と作業員を二手に分け，併行して切付遺跡の調査に着手し

た。小高区の横大道遺跡では，廃滓場の調査に伴い大量の鉄滓・羽口等が出土したことから，現地での洗浄と分類・計量とに多大な労力を要することとなった。

８月には連日の猛暑で調査の進捗も滞りがちとなったが，原町区では戸鳥土遺跡の調査終了後に片倉遺跡900㎡の調査を開始し，平安時代の竪穴住居跡等を検出した。小高区では荻原遺跡の隣接地でオオタカの幼鳥の巣立ちが確認されたことから，これまで作業を見合わせていた南側5,700㎡の調査に着手することとなり，広谷地遺跡の調査終了後，荻原遺跡の新たな調査区へ移行した。

９月になると原町区で切付遺跡と片倉遺跡の調査を順次終了した。当初９月から予定された原町区西内遺跡の調査は，隣接する花栽培農家への配慮から11月以降に延期されたため，代わりに石神遺跡の調査を実施することとなった。石神遺跡の調査面積は試掘調査の段階では3,100㎡とされたが，路線の一部設計変更があり実際は3,300㎡となった。赤柴遺跡では，平安時代の遺構と縄文時代後期の集落跡が重複して確認されたことから，相馬工事事務所と協議の結果，重複部1,200㎡については平安時代と縄文時代の２面の調査と積算し，調査面積に追加することとなった。

小高区では横大道遺跡の北部地区での試掘調査の結果から，さらに3,400㎡の調査区を追加し当年度の調査面積は計7,400㎡となった。荻原遺跡でも新たな試掘調査の結果から，1,500㎡の調査区を追加し，当年度に調査を実施することとなった。調査面積は合計で16,300㎡となった。

10月に入り，原町区の石神遺跡からは，縄文時代から近世にかけての遺構が検出された。また，赤柴遺跡では600㎡の調査区を追加し，当年度の調査面積は合計で7,400㎡となった。小高区では横大道遺跡で奈良時代から平安時代にかけての製鉄炉群が検出され，周囲一帯が大規模な製鉄遺跡であることが明らかとなった。また，荻原遺跡の南部地区でも，試掘調査で検出されていた廃滓場とともに製鉄炉が検出され，鋳造の鋳型も出土した。なお，横大道遺跡では，10・11月にかけて事業全体の調整から900㎡の表土剥ぎを実施したが，対象とした地区には製鉄炉・木炭窯等が密に分布し当年度中の調査終了は困難と判断したため，協議の結果，表土剥ぎまでにとどめることとなった。

11月からは原町区の西内遺跡で，当初の計画から調査面積を減じて900㎡を対象に調査を実施した。小高区では，試掘調査の結果から新たに遺跡登録となった君ヶ沢Ｂ遺跡の400㎡について，工事用道路建設の工程上，急遽調査を実施することとなった。また，荻原遺跡の調査区の一部1,500㎡について，用水路のボックス工事のため11月16日に先行して引渡しを行った。

12月になると，８日に奈良・平安時代の製鉄遺跡として新たな知見の得られた横大道遺跡の現地説明会を実施した。14日には原町区の石神遺跡と赤柴遺跡の調査を終了し，21日には小高区の荻原遺跡の調査も終了にこぎ着けることとなった。最後に残った横大道遺跡の調査では，70トンを超える鉄滓の処理に加えて製鉄炉の度重なる造り替えが確認されたため，当初予定した調査期間を大幅に延長することとなったが，工事工程との調整の結果，21日で年内の作業を終了し，１月以降に製鉄炉の補足調査を実施することにした。

なお，その後の協議の結果，製鉄炉の補足調査が次年度に持ち越しとなったことから，翌年の調査工程を考慮し，調査予定地区の一部1,800㎡について２月に先行して表土剥ぎを実施した。

このほか，平成16・17・18年度に発掘調査を実施した南相馬市の北山下遺跡・仲山Ｂ遺跡について，福島県文化財調査報告書第442集『常磐自動車道遺跡調査報告47』として，同じく平成15・18年度に発掘調査を実施した相馬市の山岸硝庫跡について，福島県文化財調査報告書第443集『常磐自動車道遺跡調査報告48』として11月に報告書を刊行した。また，平成18年度に発掘調査を実施した南相馬市の原Ｂ遺跡と平成18・19年度に発掘調査を実施した大田切遺跡ついて，福島県文化財調査報告書第441集『常磐自動車道遺跡調査報告46』として２月に報告書を刊行した。

４．平成20年度の調査経過

平成20年度の常磐自動車道（浪江～相馬）建設予定地に関わる遺跡発掘調査は，福島県教育委員会との委託契約に基づき，福島県文化振興事業団遺跡調査部の職員10名を配置して実施した。当初計画では，相馬市１遺跡（西原遺跡），南相馬市原町区５遺跡（菖蒲沢遺跡・西内遺跡・中山Ｃ遺跡・赤柴遺跡・荒井遺跡），同市小高区４遺跡（君ヶ沢Ｂ遺跡・横大道遺跡・舘越遺跡・四ツ栗遺跡）の合計10遺跡，総調査面積30,000㎡が予定された。

調査は４月初旬より開始したが，変更箇所等があり，関係機関で協議した結果，相馬市に所在する西原遺跡（２次調査），南相馬市原町区に所在する中山Ｃ遺跡・赤柴遺跡（３次調査）・荒井遺跡の３遺跡，同市小高区に所在する君ヶ沢Ｂ遺跡（２次調査）・横大道遺跡（２次調査）・舘越遺跡・大田和広畑遺跡（３次調査）・四ツ栗遺跡（３次調査）の５遺跡，計９遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は，総計で29,200㎡である。

平成20年度の調査も相馬工事事務所との事前協議を受けて，４月上旬から原町区内の中山Ｃ遺跡（1,200㎡）・荒井遺跡（1,000㎡），小高区内の君ヶ沢Ｂ遺跡（1,000㎡）・横大道遺跡（4,800㎡）の４カ所で開始した。４月下旬には，各遺跡での表土剥ぎも進捗し，中山Ｃ遺跡では木炭窯跡，荒井遺跡では遺物包含層，君ヶ沢Ｂ遺跡では土坑等が確認された。横大道遺跡からは，古代と思われる木炭窯跡が20数基検出され，さらに製鉄炉跡も確認された。

５月に入ると，荒井遺跡で調査範囲が西側に広がることが判明し，新たに400㎡が追加された。検出した遺構については順次調査が行われ，16日には，土坑５基，焼土遺構２基が確認された君ヶ沢Ｂ遺跡1,000㎡の調査が終了し，舘越遺跡（3,700㎡）の調査に移行した。また，中山Ｃ遺跡では，斜面中腹から木炭窯跡と製鉄炉跡が各１基ずつ確認され，竪穴住居跡も検出された。

６月には，中山Ｃ遺跡の竪穴住居跡が５軒となり，同一箇所で頻繁に建て替えていたことが判明した。荒井遺跡では，検出した遺物包含層が縄文時代の河川跡であったことが確認され，隣接する微高地上に同時代の竪穴住居跡も確認された。６月下旬には，横大道遺跡で保存に関する協議が開始され，遺構の調査は協議結果を待つこととなった。さらに，舘越遺跡でも木炭窯跡が多数確認され，北側斜面裾部600㎡の範囲が追加された。13日には，荒井遺跡の1,400㎡の調査が収束し，西側に隣接する赤柴遺跡の３次調査（3,500㎡）に移行した。

７月になると，中山Ｃ遺跡1,200㎡の調査が11日に終了し，本遺跡が平安時代10世紀代前半の

集落跡と10世紀代後半の製鉄炉跡，中世の木炭窯跡の複合遺跡であったことが判明した。中山Ｃ遺跡の調査終了に伴い，四ツ栗遺跡(7,500㎡)の調査が開始された。赤柴遺跡からは，縄文時代後期の竪穴住居跡や配石遺構，鍛冶炉跡や土坑等が確認された。舘越遺跡で検出された木炭窯跡は，全長13ｍほどと東北でも最大級の長さを誇る古代の木炭窯跡であることが判明した。

８月には，赤柴遺跡で当初予定していた調査区南西端部にあるコンクリート擁壁の撤去が次年度に変更となり，当年度調査面積が減じることとなった。四ツ栗遺跡では木炭焼成土坑が40基ほど確認され，舘越遺跡では木炭窯跡が確認面から２ｍほどの深さで，かつ10ｍほどの長さになるため調査が難航していた。横大道遺跡は保存協議中であるため，現地作業は鉄滓の分類等に終始した。

９月に入ると，18日に赤柴遺跡3,100㎡の調査が終了し，新たに相馬市西原遺跡5,200㎡の調査に移行した。舘越遺跡では連日の木炭窯跡の調査に追われ，製鉄炉跡の調査も同時に行われた。29日には四ツ栗遺跡7,500㎡の３次調査が終了し，木炭焼成土坑，溝跡，竪穴状遺構等が確認され，古代の製炭遺跡であることが判明した。

10月には，当年度の調査の収束に向け，南相馬市原町区の西内遺跡・菖蒲沢遺跡の調査前の条件整備が急がれたが，両遺跡とも整わず，当年度の調査は事実上不可能となった。相馬市西原遺跡では，土坑50基ほどが確認され，縄文時代早･前期と古代の複合遺跡であることが判明した。また，10月下旬には，新たに君ヶ沢Ｂ遺跡2,500㎡の調査が追加され，27日より開始した。

11月に入ると，15日に舘越遺跡の現地説明会が開催され，264名の参加を得た。君ヶ沢遺跡では大規模な伏せ焼き法による木炭焼成遺構が確認され，西原遺跡では近世の建物跡も確認された。

12月には，新たに大田和広畑遺跡100㎡の調査も行われたが，各遺跡の調査が収束に向かった。大田和広畑遺跡では土坑１基を確認し，３日に調査を終了した。この他，11日には君ヶ沢Ｂ遺跡，12日には西原遺跡で調査が終了し，19日に舘越遺跡と横大道遺跡の調査が終了した。保存協議中の横大道遺跡では，木炭窯跡等の遺構が集中して検出された以外の範囲，2,900㎡が調査終了となり，年明けに保存協議中の遺構群の養生を行うこととなった。

年が明けた１月14日から，舘越遺跡出土鉄滓の分類作業と発掘器材の整理，プレハブ等の撤去作業を行い，22日から横大道遺跡の遺構群の養生を行い，１月30日に全ての現地作業を終了した。

その他，平成18・19年度に発掘調査を実施した南相馬市の小池田遺跡(１次・２次調査)・戸鳥土遺跡・切付遺跡・片倉遺跡について，福島県文化財調査報告書第450集『常磐自動車道遺跡調査報告51』として，平成18･19年度に発掘調査を実施した南相馬市の広谷地遺跡と石神遺跡について，福島県文化財調査報告書第451集『常磐自動車道遺跡調査報告52』として11月に報告書を刊行した。

５．平成21年度の調査経過

平成21年度の常磐自動車道(浪江～相馬)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は，福島県教育委員会との委託契約に基づき福島県文化振興事業団遺跡調査部の職員７名を配置して実施した。当初計画では，新地町３遺跡(赤柴前遺跡・鴻ノ巣遺跡・白子下Ｃ遺跡)，相馬市２遺跡(払川遺跡・宿仙

木Ａ遺跡），南相馬市鹿島区１遺跡（椴木沢Ｂ遺跡），同市原町区３遺跡（西内遺跡・菖蒲沢遺跡・赤柴遺跡），同市小高区１遺跡（横大道遺跡）の合計10遺跡，総調査面積23,000㎡が予定された。

調査は４月初旬より開始したが，調査の進捗に伴い変更等があり，関係機関で協議した結果，新地町に所在する赤柴前遺跡（１次調査）・鴻ノ巣遺跡・白子下Ｃ遺跡の３遺跡，相馬市に所在する宿仙木Ａ遺跡（２次調査），南相馬市鹿島区に所在する椴木沢Ｂ遺跡，同市原町区に所在する西内遺跡（２次調査）・菖蒲沢遺跡・赤柴遺跡（４次調査）の３遺跡，同市小高区に所在する横大道遺跡（３次調査）の計９遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は，総計で23,300㎡である。

当年度の調査は，相馬工事事務所との事前協議を受けて，４月上旬から南相馬市原町区内の赤柴遺跡（600㎡）を皮切りに，中旬には小高区の横大道遺跡（800㎡），鹿島区内の椴木沢Ｂ遺跡（2,800㎡）の２カ所でも開始した。４月下旬には，赤柴遺跡では河川跡，椴木沢Ｂ遺跡では製鉄炉跡や木炭焼成土坑等が確認された。横大道遺跡では，南側の調査区で工事掘削ラインが確定し，このラインより西側にある製鉄炉跡や木炭窯跡の調査を行った。

５月に入ると，横大道遺跡で北区の調査700㎡が追加され，調査面積が計1,500㎡となった。北区では土坑３基と溝跡１条が確認された。５月下旬には，椴木沢Ｂ遺跡で製鉄炉跡２基，廃滓場跡１カ所，土坑６基が検出され，赤柴遺跡では平安時代と縄文時代の溝跡や河川跡の調査が行われた。また，横大道遺跡では，北区の調査が終了し，22日に当該地区の現地引渡しを行った。

６月になると，３日に赤柴遺跡の調査が終了したため，現地引渡しを行い，同時に，新地町鴻ノ巣遺跡（3,000㎡）・赤柴前遺跡（1,000㎡）の表土剥ぎを開始した。また，椴木沢Ｂ遺跡では，２基の製鉄炉跡が，それぞれ上下に重複していることが判明し，確認できた製鉄炉跡が５基になった。この他，鍛冶炉跡２基，土坑11基等が確認され，古代末の製鉄遺跡の様相が徐々に明らかとなった。

６月中旬から下旬にかけては，雨天のため作業ができない日々もあったが，鴻ノ巣遺跡・赤柴前遺跡では，木炭焼成土坑等が確認され，検出遺構の調査に従事した。さらに新地町白子下Ｃ遺跡（4,100㎡）でも調査を開始し，近世から近代にかけての道跡の測量を行った。横大道遺跡では，１基の製鉄炉跡から炉壁が倒壊した状態で確認されたため，これの採り上げ作業を行った。また，木炭窯跡も20基以上が検出され，主に作業場跡のみの調査であったが，これらの調査が行われた。

７月には，常磐自動車道いわき工区側の調査が終了したため，新たに調査員を増員し，南相馬市原町区西内遺跡（3,400㎡）の調査も開始した。このため，調査班は新地町で２班，南相馬市鹿島区で１班，原町区で１班，小高区で１班の計５班を，調査員８人で実施することとなった。中旬には，鴻ノ巣遺跡・赤柴前遺跡で遺構検出作業がほぼ終了し，検出した土坑11基の調査が順次行われた。白子下Ｃ遺跡では，近世から近代の道跡１条のほか，平安時代の竪穴住居跡６軒，土坑１基等が確認され，西内遺跡でも平安時代の竪穴住居跡１軒が確認された。18日には横大道遺跡で現地説明会が行われ，小雨が降るなか109名の参加を得た。椴木沢Ｂ遺跡では，製鉄炉跡以外に掘立柱建物跡が３棟，柱列跡が２列確認され，廃滓場も厚く堆積していることが判明し，調査は困難を極めた。

８月になると，西内遺跡の北側調査区に隣接した箇所であらたに木炭窯が発見され，この部分の

調査面積600㎡が追加となり，西内遺跡の調査面積は4,000㎡となった。鴻ノ巣遺跡や赤柴前遺跡では，盆前には調査が終了し，器材等の撤収後，20日に現地引渡しを行った。８月下旬には，横大道遺跡で空撮を行い，さらに，県教育委員会と南相馬市教育委員会，事業団とが協議を行い，主に調査区東側を対象とした横大道遺跡の範囲確認調査が開始された。また，椴木沢Ｂ遺跡の廃滓場の調査も収束に向かい，28日には器材等を撤収し調査が終了したため，31日に現地引渡しを行った。

９月になり，西内遺跡の調査と平行して菖蒲沢遺跡（1,100㎡）の調査も開始した。菖蒲沢遺跡では木炭窯跡が確認され，西内遺跡でも木炭窯が３基となった。白子下Ｃ遺跡では，７軒の竪穴住居跡のうち，３軒が住居内鍛冶炉を有したり，カマドの造り替え等も認められる特徴があり，12日には現地説明会を開催した。あいにくの降雨のため参加人数は少なかったが，30名を超える人数が遺跡を見学した。９月末には，白子下Ｃ遺跡で空撮を行い，横大道遺跡でも，遺構の調査は収束に向かった。菖蒲沢遺跡では，木炭窯跡のほか，平安時代の竪穴住居跡も確認され，住居跡内から土師器や，酸化焔で焼成された須恵器が大量に出土した。

10月に入ると，横大道遺跡では，遺構の調査がほぼ終了し，出土した大量の鉄滓の分類作業に追われた。また，当年度の調査区東側部分の取り扱いについて関係機関で協議し，13日から遺跡の養生作業を開始した。10月13日には，白子下Ｃ遺跡の調査が終了したため，現地引渡しを行い，当年度最後の調査遺跡である相馬市宿仙木Ａ遺跡（4,900㎡）の調査を10月15日から開始した。この段階で当年度の調査面積は23,000㎡となり，相馬市払川遺跡（800㎡）の調査は次年度以降となった。10月下旬には，西内遺跡や菖蒲沢遺跡で空撮を行い，地形測量等の作業を行った。

11月になると，６日に西内遺跡・菖蒲沢遺跡の調査が終了し，11日に現地引渡しを行った。横大道遺跡でも遺跡の養生作業が収束に向かい，調査区東側の本遺跡の範囲確認調査もほぼ終了した。16日には３年に及ぶ横大道遺跡のすべての調査が終了し，20日に現地引渡しを行った。宿仙木Ａ遺跡では，縄文時代や平安時代の竪穴住居跡が検出され，遺物包含層や鍛冶炉跡等も確認された。また，調査区北側では埋没した河川跡が確認され，これの除去作業を重機を使って行った。

12月に入ると，調査は宿仙木Ａ遺跡のみとなり，検出した遺構の調査が順調に進んだ。８日には空撮を行い，中旬には発掘器材の整理作業も行われ，器材の搬出作業も行った。18日にはすべての調査が終了したため，現地の引渡しを行った。

年が明けた１月中旬には，横大道遺跡の北区で追加調査が計画され，関係機関の協議を経て，２月上旬に300㎡の追加調査を行うこととなった。調査は２月８～10日に行われ，10日に現地引渡しを行った。これにより，当年度の調査は９遺跡，調査面積は23,300㎡となった。

この他，平成18～20年度に発掘調査を実施した南相馬市小高区の四ツ栗遺跡（３次調査）・大田和広畑遺跡について，福島県文化財調査報告書第458集『常磐自動車道遺跡調査報告55』として11月に報告書を刊行した。同じく，平成18～20年度に発掘調査を実施した南相馬市小高区の荻原遺跡（３・４次調査）・君ヶ沢Ｂ遺跡について，福島県文化財調査報告書第467集『常磐自動車道遺跡調査報告59』として，平成23年３月に報告書を刊行した。（吉　田）

第２節　調査方法と出土遺物の分類

１．調 査 方 法

今回の調査で用いた測量座標は，世界測地系に基づく国土座標Ⅸ系の座標である。本報告書ではこの座標をメートル単位の座標値として表記した。現地においては測量会社に委託して，既知点から算出したメッシュ測量点の打設および簡易水準点の移動を行い，調査区内の測量基準点とした。また，調査区内における遺構・遺物のおおまかな位置を示すために，調査範囲の北西隅を原点とする５ｍ単位の方眼をグリッドとして設定した。なお，先述のメッシュ測量点はこのグリッドに一致させた形で設定している。グリッドの呼称には，北から南に１・２…と算用数字を，西から東にＡ・Ｂ…とアルファベットを用い，これを組み合わせてＡ１・Ｂ２と呼称するのを基本とし，赤柴遺跡では北西隅のＡ１グリッドから南東隅のＴ66グリッドまで設定した(第２編第１章図２参照)。荒井遺跡では当初予定していた調査範囲の西側に調査範囲が拡張したため，Ａ列の西側にグリッドが設定されることとなり，アルファベット最後の２文字Ｙ・Ｚを加えて，Ｙ３～Ｈ13までグリッドを設定した(第１編第２章図２参照)。また，赤柴遺跡のＨ62グリッドは，荒井遺跡のＹ３グリッドと同じ位置にあるグリッドである。

調査区内堆積土の掘削は，現表土には重機を用いた。それ以外の堆積土および遺構内堆積土の掘削は基本的に人力により，唐鍬・草削り・移植ゴテ・剣先スコップ等を用いて行った。ただし，土量が多く，遺物を確認できない堆積土については，試掘を実施し，遺構・遺物がないことを確認した後，調査員立ち会いのもと，重機による慎重な掘削を行った。遺構の掘り込みにあたっては，調査区内の基本土層とどのような関係にあるかに留意し，可能な限り断面図に記録した。

竪穴住居跡等の大型遺構は土層観察用ベルトを残した４分割法を基本とし，遺存状態の悪いものは２分割法を用いた。土坑は，半截２分割法，溝跡は適宜土層観察用ベルトを残して調査した。

遺物は，遺構およびグリッド単位，一部ドット単位で採り上げを行い，出土層位を記録した。遺構の記録は，平面図と土層断面図の作成を原則とし，平面図については，先述したメッシュ測量点を基点としたトータルステーションを使用して測量し，ＣＡＤソフトを介して作図し，現場で結線した。断面図については，遺構内に移動した簡易水準点を基に作図した。各遺構および土層の図化に際しては，1/20の縮尺を原則としたが，遺構の規模・性格に合わせて1/10・1/100の縮尺も適宜使用した。また，遺跡基底面の地形図は1/400の縮尺で作成した。

土層の記載方法は，基本土層については，ローマ数字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを用い，さらに細分が必要な場合はアルファベットの小文字ａ・ｂ・ｃを付して区分し，遺構内堆積土については基本土層と区別するため算用数字１・２・３で表記した。

写真は35㎜判のモノクロームとリバーサルフィルムを使用するともに，補助的にデジタルカメラを用い，同一被写体で撮影を行った。

これらの調査記録および出土遺物については，報告書刊行後に当事業団の定める基準に従って整理を行い，福島県教育委員会へ移管した後，福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。

２．出土遺物の分類

荒井遺跡・赤柴遺跡から出土した土器類については，下記のような大まかな時期分類を行って報告する。また挿図中には，該当する分類番号を１点ごとに略表記し，おおよその該当する時代・時期を示した。表記法はⅠ群１類土器であれば「Ⅰ－１」のように表している。

Ⅰ群　縄文時代早期の土器

１類　押型・沈線文系土器(日計式・三戸式・田戸下層式等)

２類　条痕文系土器(鵜ヶ島台式・茅山下層式等条痕文を地文とするもの)

３類　縄文条痕土器(梨木畑式・北前式等の縄文と条痕文を地文に併用するもの)

４類　撚糸文系土器群(大畑Ｇ式等の撚糸文を地文に使用するもの)

５類　後葉～末葉の土器と判断したが，１～４類に特定できないもの。

Ⅱ群　縄文時代前期の土器

１類　初頭の土器群(花積下層式等)

２類　前葉の土器群(大木１式・関山２式・大木２ａ式等)

３類　中葉の土器群(大木３～５式・浮島式等)

Ⅲ群　縄文時代中期の土器

Ⅳ群　縄文時代後期の土器

１類　前葉の土器群(綱取Ⅰ・Ⅱ式・堀ノ内１・２式・三十稲場式等)

２類　中葉の土器群(加曾利Ｂ２・３式等)

３類　後葉の土器群(新地式等)

４類　後期の土器と判断したが，型式名が特定できないもの

Ⅴ群　縄文時代晩期の土器

Ⅵ群　弥生時代の土器

Ⅶ群　平安時代の土師器・須恵器

陶磁器類については，近世以降の所産であるため，掲載していない。

石器については，特別な群・類名は設定せず，計測値と石質を表記した。掲載にあたり，縄文時代の遺構内出土のものについては，剥片や特徴の不明瞭な欠損品等を除き，可能な限り図示し，遺構外出土遺物および平安時代以降の遺構から出土したものについては，遺存状態の良いものを選別した。なお，石材の名称については，外部委託したパリノ・サーベイ株式会社の鑑定結果を表記している。このため，流紋岩と呼ぶ石材は流紋岩質溶結凝灰岩，粘板岩は頁岩(粘板岩)と表記した。

(笠　井)

第２章　地理的環境と歴史的環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

１．遺跡の位置

福島県は東北地方南部，太平洋側に位置し，県土の総面積は13,782㎢で，北海道，岩手県に続き全国３番目の面積を有する。県土の約８割は山地で占められ，県内は，西端の越後山脈，中央の奥羽山脈，東部の阿武隈高地が平行して南北に連なり，地理的・文化的に県土を３地域に区分している。一般に奥羽山脈以西を雪深く肥沃な「会津地方」，奥羽山脈と阿武隈高地に挟まれた人口の密集する盆地が数珠繋ぎに連なる地域を「中通り地方」，阿武隈高地と太平洋に挟まれた気候の穏やかな海岸地帯を「浜通り地方」と呼んでいる。今回報告する荒井遺跡・赤柴遺跡は，浜通り地方北部の南相馬市に所在する。行政区分では荒井遺跡が南相馬市原町区馬場字荒井，赤柴遺跡が馬場字赤柴および荒井にあたり，ＪＲ常磐線原の町駅から南西へ約4.5㎞，相馬野馬追の主要会場である野馬追祭場からは西へ2.6㎞ほどの位置にある。遺跡の東方200ｍには浜通り北部の山際を南北に結ぶ幹線道路である県道34号線が走っている。

２．遺跡周辺の地形

浜通り地方の地形は，大きく阿武隈高地・河岸段丘を含む丘陵地帯・海岸低地帯の３つに区分できる。阿武隈高地は東西50㎞，南北200㎞の規模を有し，標高500～700ｍのなだらかな平坦面を残す隆起準平原であると考えられている。阿武隈高地の分水嶺には，霊山(825ｍ)，花塚山(919ｍ)，日山(1057ｍ)，大滝根山(1192ｍ)等の山々が残丘状に散在している。

阿武隈高地の東縁には，双葉断層(岩沼－久ノ浜構造線)が北北西から南南東方向へ縦断している。この断層は，断層の東側に対して断層西側が相対的に高まり，断層東側が北へ，断層西側が南へずれた，左横ずれ逆断層とされている。浜通り地方中部以南では，この断層が形成する断層崖が，阿武隈高地と丘陵地帯・低地帯との境をなしているが，浜通り地方北部では，双葉断層に沿って断層崖が発達していない。浜通り地方北部では，双葉断層から分岐して，より東側を縦走する相馬断層が，阿武隈高地と丘陵地帯との境界となっている。

南相馬市原町区を流れる河川は，新田川とその支流にあたる水無川が北部を，太田川が南部をそれぞれ東流している。これらの河川の勾配は山間部では急傾斜で，両岸のそそりたった渓谷を形成するが，双葉断層の東側に入ると傾斜が緩やかになり，両岸に細い沖積平野を形成する。南相馬市域では，これらの河川とその支流に平行するように標高50～100ｍの東西方向に細長い丘陵が発達し，これらの丘陵の一部は海岸にまで達し，比高差10～30ｍほどの海蝕崖となっている。新田川・

太田川の中・下流域には，低位・中位・高位の河岸段丘がよく発達し，平坦な台地を形成している。

荒井・赤柴の両遺跡もこうした段丘面上に立地しており，赤柴遺跡は中位Ⅱ段丘面，荒井遺跡は中位第Ⅲ段丘面の西縁に位置する現在の笹部川の原形となる河川により形成された南北方向に細長い沖積地上に所在する。

３．遺跡周辺の地質

非グリーンタフ地域にあたる浜通り地方は，双葉断層を境として二つの地域に区分される。双葉断層西側の阿武隈高地では，花崗岩類が広く分布し，その東縁近くには古生層が発達する。一方双葉断層東側の丘陵地帯には，中生代，新生代の地層が丘陵を形成し，それらが侵食されて段丘地形や谷底平野を形成している。

南相馬市周辺で最も古い地層とされる松ヶ平変成岩類は，古生代デボン紀以前に形成されたと考えられている変成岩類で，新田川上流の原町区高の倉地区および真野川中流の飯舘村松ヶ平から鹿島区上栃窪に至る地域に分布する。主に泥質～珪質片岩からなり，これらに砂質片岩，緑色片岩，角閃岩が小規模な分布を見せる。これらの変成岩は縄文時代においては主に打製・磨製石斧等の石器石材として使用されている。

次に続く，古生代デボン紀から二畳紀にかけて形成された相馬古生層が，新田川上中流域に分布している。いずれも海成層で，頁岩(粘板岩)・砂岩・礫岩等の主に堆積岩からなる。このうち，頁岩(粘板岩)は，縄文時代においては石鏃や石斧等に，弥生時代においては石庖丁や石鍬等の石材として使用されている。

中生代の地層としては，ジュラ紀後期から白亜紀前期に形成された相馬中村層群がある。本層群は，相馬市初野付近を北限，原町区馬場付近を南限とし，双葉断層に沿って幅２～４kmほどの細長い分布を見せる。主に砂岩・頁岩等の堆積岩からなり，一部に石灰岩や石炭薄層を含んでいる。また，原町区高の倉地区の北方地域には，白亜紀前期の火山岩類である高倉層が小規模な分布を見せる。ここで産出される火山岩は，主に安山岩・流紋岩・デイサイトである。高倉層堆積以後の白亜紀前期には，浜通り地方西部は造山活動が活発になり，花崗岩・閃緑岩に代表される深成岩が貫入した。この貫入に伴い，周辺の相馬古生層や相馬中村層の境界付近では接触変成作用が生じ，ホルンフェルス・結晶片岩・角閃岩等の変成岩が発達する。なお，接触変成帯の一部はスカルン鉱床を伴い，磁鉄鉱やチタン鉄鉱等の鉱物を産出する。

続く新生代の地層は，新第三紀および第四紀に堆積したものである。新第三紀の最下部は，中新世前期に堆積した塩手層である。塩手層は，河川堆積物・浅海成堆積物・湖成堆積物で構成され，主に礫岩・砂岩・シルト岩等の堆積岩からなる。双葉断層西部では谷を埋めるように分布し，東部では新田川および水無川の中流域に堆積している。本層には，堆積物中に精緻な流紋岩質溶結凝灰岩層を含み，赤柴遺跡で多量に出土するこの種の石材の供給源となっていた可能性がある。この他新第三紀中新世の地層としては，天明山層および霊山層があり，双葉断層西側に分布する。両層と

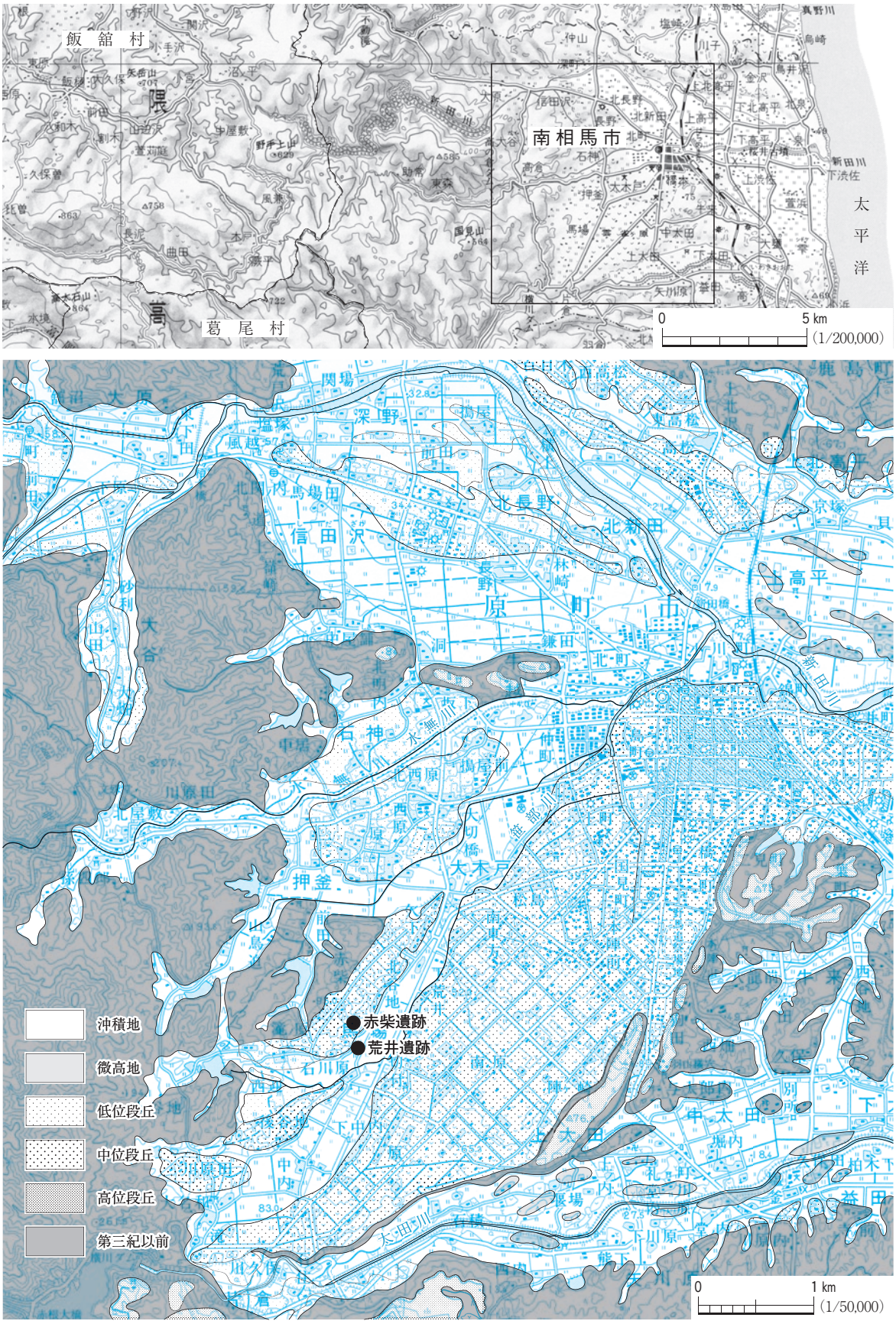

飯　舘　村
南相馬市
太
平
洋
葛　尾　村
0
5 km
(1/200,000)
沖積地
微高地
低位段丘
中位段丘
高位段丘
第三紀以前
赤柴遺跡
荒井遺跡
0
1 km
(1/50,000)

図２　地形分類図

もに溶岩流が凝固した玄武岩を主とするもので，輝石安山岩や流紋岩を含む。次の新第三紀鮮新世の地層としては，仙台層群があり，下位より亀山層，竜ノ口層，向山層，大年寺層の４層に区分されている。竜の口層・大年寺層は海成堆積物，向山層は河川・ラグーン堆積物とされる。仙台層群の各層は，主に半固結の泥岩(シルト岩)・砂岩・凝灰岩からなり，層中に多くの火山灰層を介在する。本地域では大年寺層が丘陵および段丘面の基盤層となっている場合が多い。

第四紀更新世の地層は，南相馬市域では真野川・上真野川・新田川・水無川に沿って分布する段丘堆積物および沖積層がある。本地域の段丘は，古いものから，高位Ⅰ・高位Ⅱ・中位Ⅰ・中位Ⅱ・中位Ⅲ・低位Ⅰ・低位Ⅱ段丘に区分されている。高位段丘の堆積物は風化礫を主体とし，間にラミナ状の砂層を挟んでおり，上位に風化火山灰質土壌もしくは，シルト・砂層をのせる。中位段丘堆積物は風化していない礫を主体とし，上位に砂礫層と風化火山灰質土壌をのせる。赤柴遺跡のＬＶ・Ⅳはこの砂礫層と風化火山灰質土壌に対応すると考えられる。低位段丘の堆積物はシルトが介在する淘汰の悪い砂礫層からなり，その上位に粘土質の砂層をのせている。沖積層は各河川に沿って分布している。シルト層・砂礫層・泥炭層からなり，軟弱地盤であることが多い。　　（笠　井）

第２節　歴史的環境

南相馬市は，合併前の旧一市二町の頃より，戦後に行われた各種機関の発掘調査のほか，近年では原町火力発電所や常磐自動車道建設等に関連した発掘調査件数が年々増加している。これら開発に伴う遺跡発掘調査により得られた知見は，当地域の歴史像をより鮮明なものとしている。以下本節では，常磐自動車道建設予定地内に所在する荒井遺跡(１)・赤柴遺跡(２)の両遺跡を今回報告するにあたって，これまで積み重ねられてきた知見を踏まえ，当地域の歴史的推移を時期ごとに分けて概観したい。なお，遺跡名の(　)内にある番号は，図３および表２に一致する。

旧石器時代

南相馬市の原町区内において，遺跡台帳を紐解くだけで旧石器時代の散布地を10数カ所確認することができる。その遺跡分布を見ると，塩崎丘陵北縁部のほか，橋本町Ａ遺跡(18)や橋本町Ｂ遺跡(19)，陣ヶ崎Ａ遺跡(24)等が立地する雲雀ヶ原台地と，畦原Ａ遺跡(34)および畦原Ｃ遺跡(35)が立地する畦原台地上で散布が確認されている。近年，畦原台地の南側に位置する小高区内の荻原遺跡(36)において，ブロックや製品が確認され，荒井遺跡の南側に位置する切付遺跡(23)で彫器が出土し，赤柴遺跡でも，ナイフ形石器が出土していることから，今後も発掘調査による資料の増加が期待される。

縄文時代

縄文時代に入ると当該区域の遺跡数は飛躍的に増加する。草創期に属する資料は，隣接する飯舘村の岩下向Ａ遺跡において当該期に属するとされる竪穴遺構と土器が確認されているが，両遺跡周辺での様相は依然として不明である。早期の遺跡としては，早期中葉の遺物が出土した上ノ内遺跡

(26)・小高区の君ヶ沢Ｂ遺跡(37)があり，君ヶ沢Ｂ遺跡では竪穴状遺構が調査され，赤柴遺跡でも押型文系・沈線文系の土器片が出土している。早期後葉～前期初頭にかけては，赤柴遺跡で集落が営まれる時期であるが，原遺跡(28)・原Ｂ遺跡(29)，太田川以南の八重米坂Ａ遺跡(33)・羽山Ｂ遺跡(32)・荻原遺跡，水無川以北の石神遺跡(15)・仲山Ｂ遺跡(４)・仲山Ｃ遺跡(３)等で早期末葉から前期前葉の集落跡が確認されており，この時期の遺跡は阿武隈高地東縁部付近で調査例が増え，近年資料の蓄積が進んでいる。前期の遺跡では，赤柴遺跡に隣接する滝ノ原遺跡(21)で竪穴状遺構が確認されているほか，前期前葉から中葉にかけての集落跡が，小池田遺跡(５)で確認されている。中期に入ると，原Ｂ遺跡で中期前葉の集落が調査されており，塩ヶ崎丘陵の南縁部の高松Ｂ遺跡(９)・植松Ａ遺跡(10)等で集落跡が確認されるほか，滝ノ原遺跡・原町西町遺跡(17)で中期後葉の複式炉を伴う住居跡が確認されている。後期は，荒井遺跡・赤柴遺跡で主体となる時期であるが，当該地域においては，次の晩期と合わせて確認された遺跡数の少ない時期である。赤柴遺跡の北1.5㎞の丘陵上に位置する前田遺跡(20)は後期に属する集落跡と考えられており，横川ダム湖底に沈んでいる羽山遺跡(31)において後期から晩期の土器や土偶が採集されている。これまで遺跡の分布が希薄であった河川流域の低地部で遺跡の存在が確認され始めており，原町西町遺跡では，後期前葉の住居跡と後・晩期の包含層等が見つかっている。なお，小高区で確認されている貝塚は，原町区および鹿島区にかけては確認されていない。

弥生・古墳時代

弥生時代の遺跡は全体的な傾向として，赤柴遺跡・荒井遺跡の立地する市域の西側に比較して，市域の東側に遺跡が集中する。これは古墳時代における古墳や集落の分布においても引き続き見られる現象であり，西側では小池田遺跡等にわずかに遺物の散布が確認される程度である。周辺地域を見渡しても，弥生時代中期初頭に関しては資料数が少なく，当地域における様相は未だ不明瞭である。中期中葉に入ると鹿島区の塩ヶ崎丘陵上に天神沢遺跡・八幡林遺跡が，雲雀ヶ原台地上に桜井Ａ遺跡･高見町Ａ遺跡，大甕丘陵南縁部に位置する川内廻Ｂ遺跡等遺跡数が南北に広く展開する。中期後葉に入ると遺跡数がさらに増加し，中でも前述の天神沢遺跡においては，石庖丁や大陸系磨製石器が多く生産されていることが確認され，同丘陵の東縁部においても小規模な集落遺跡が確認されている。その他，桜井Ａ遺跡等で同時期の土器棺墓が発見されている。また桜井遺跡は弥生時代中期末葉の桜井式土器の標識遺跡として知られている。赤柴遺跡ではこの時期の所産と考えられる住居跡が１軒だけ見つかっている。後期の遺跡としては，桜井遺跡に隣接する高見町Ａ遺跡で十王台式期の集落が営まれ，赤柴遺跡や君ヶ沢Ｂ遺跡でも遺物の出土がみられる。当地域における弥生時代後期の遺跡数も決して多くはないが，前期古墳の存在を考慮すると今後沖積地から当該時期の遺跡が発見されていく可能性がある。

古墳時代には，雲雀ヶ原台地北縁部に全長約75ｍの桜井古墳を最大とした桜井古墳群が築かれる。桜井古墳群は上渋佐支群と高見町支群の２つの支群に分けられ，前者は桜井古墳を含めた前期を中心に古墳が築かれていく。反対に高見町支群においては後期の大規模群集墳が形成され，時代

を下るごとに墓域が移り変わることが見て取れる。この他，鹿島区の塩崎丘陵周辺では大規模な真野古墳群が形成され，南の大甕丘陵上には装飾壁画をもつことで有名な羽山横穴群(25)や水無川北岸の城下横穴墓群(13)等，多数の横穴古墳墓群が築かれている。

奈良・平安時代

大化の改新後，奈良・平安時代にかけて，当地域は陸奥国行方郡となるが，その中核となるのが郡衙跡に比定される泉官衙遺跡である。この遺跡はかつて礎石や古瓦，炭化米等が出土したことから泉廃寺跡と呼ばれてきたが，その後の調査により，郡庁院・正倉院・郡寺等の関連施設をもつ郡衙跡であることが確認された。出土した木簡から，当郡衙は８世紀前半には成立していたものと考えられ，その初現は７世紀後半，廃絶は10世紀頃と考えられている。また，宮城県の多賀城跡から出土した漆紙文書には，宝亀11(780)年の「行方軍団」の記載があり，その所在比定地として植松廃寺跡(11)が考えられている。ほかにも官衙に関連が深い瓦を生産した窯跡として，泉官衙遺跡に供給した京塚沢瓦窯跡，植松廃寺跡に供給した入道廻瓦窯跡(８)が確認されている。赤柴遺跡の同一丘陵上に立地する滝ノ原窯跡(22)では長頸瓶を焼いた平安時代の須恵器窯が確認されている。またこの時期は，海浜部の丘陵地帯を中心に大規模な鉄生産が行われており，塩崎丘陵突端の金沢地区では100基を越える製鉄炉跡のほか，木炭窯，鍛冶遺構等が複数調査されている。製鉄・鍛冶関連の遺跡は，鹿島区の大廻地区・割田地区遺跡群等で多くの遺構が調査されたほか，近年では，原町区の丘陵地帯に位置する仲山Ｂ遺跡や中山Ｃ遺跡(14)で小規模な製鉄関連遺構が調査され，小高区の荻原遺跡では鋳型を含む製鉄遺構，横大道遺跡から８世紀にさかのぼる環状盛土を伴う製鉄遺構，隣接する舘越遺跡では大規模な木炭窯跡群が調査されている。その他，常磐自動車道関連で調査された，菖蒲沢遺跡(６)・西内遺跡(７)・石神遺跡(15)・戸鳥土遺跡(16)・片倉遺跡(30)で，平安時代の住居跡および集落跡が確認されている。この時期，赤柴遺跡でも集落が営まれ，鍛冶遺構も見つかっている。

中世以降

律令体制が崩壊し，源頼朝の奥州征伐が終わると，当地域は千葉常胤に所領として与えられ，建武２(1336)年に常種の子孫である相馬光胤が小高区小四郎内に小高城を築き，ここに移り住んで以後300年，相馬氏の本拠とした。南北朝時代の相馬氏は，北朝側に加担し支配地を広げ，戦国時代には伊達氏の内部抗争に関わり有力大名としての地位を固めた。この時期の遺跡としては，別所館跡(27)等相馬家臣団や地侍の居所であった城館跡が多く認められる。赤柴遺跡の北約３㎞には，慶長年間の短期間であるが相馬氏の本城ともなった牛越城跡(12)が築かれる。

近世は，豊臣秀吉の奥州仕置き以後，宇多・行方・標葉郡の48,700石の所領が確定し，引き続き相馬氏が近世大名として当該地域を統治した。相馬中村藩政下では，参勤交代により浜街道が整備され，原町市街地の母体となる原の町宿が形成されるとともに，雲雀ヶ原台地を囲むように巡る野馬土手(38)が築かれる。この土手は，相馬中村藩が野馬追の神事を行うために放った野馬が増殖し，近隣の農作物に被害を与え始めたことから，寛文６(1666)年に３代藩主相馬忠胤により数年の

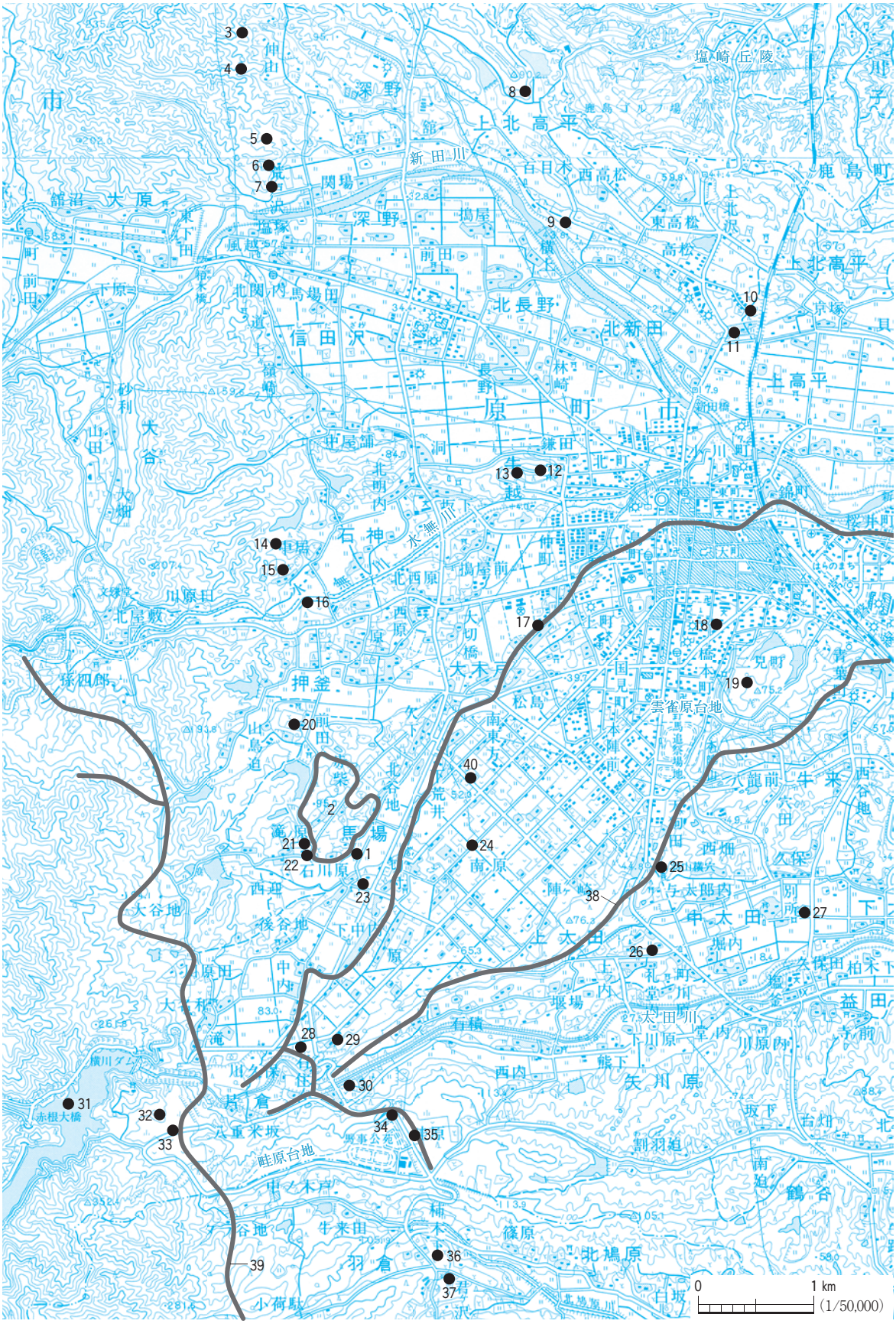


図３　周辺の遺跡位置図（原町）

表２　荒井遺跡・赤柴遺跡周辺の遺跡（南相馬市）

番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	荒井	原町区馬場字荒井	集落跡	縄
2	赤柴	原町区馬場字赤柴・荒井	集落跡	縄・平
3	仲山C	原町区深野字仲山	集落跡	縄・奈・世
4	仲山B	原町区深野字仲山	集落跡	縄・平・中
5	小池田	原町区深野字小池田	集落跡	縄・平
6	菖蒲沢	原町区深野字菖蒲沢	窯跡	平
7	西内	原町区深野字西内	集落跡	縄・平
8	入道廻瓦窯跡	原町区上北高平字入道廻	窯跡	奈・平
9	高松B	原町区上北高平字高松	集落跡	縄・平
10	植松A	原町区上北高平字植松	集落跡	縄
11	植松廃寺跡	原町区上北高平字植松	官衙関連	奈・平
12	牛越城跡	原町区牛越字館	城館跡	中
13	城下横穴群	原町区牛越字城下	古墳	古
14	中山C	原町区石神字中山	集落跡	平・中
15	石神	原町区石神字石神	集落	縄・平・中
16	戸鳥土	原町区押釜字戸鳥土	集落・塚	縄・平・世
17	原町西町	原町区西町三丁目	集落跡	縄・弥・世
18	橋本町A	原町区橋本町	散布地	旧
19	橋本町B	原町区橋本町	散布地	旧
20	前田	原町区押釜字前田	散布地	縄
21	滝ノ原	原町区馬場字滝ノ原	散布地	縄
22	滝ノ原窯跡	原町区馬場字滝ノ原	窯跡	平
23	切付	原町区馬場字切付	集落跡	縄・世・代
24	陣ヶ崎A	原町区上太田字陣ヶ崎	散布地	旧
25	羽山横穴群	原町区中太田字天狗田	古墳	古
26	上ノ内	原町区上太田字上ノ内	散布地	縄
27	別所館跡	原町区中太田字舘越	城館跡	中
28	原	原町区馬場字原	集落跡	縄
29	原B	原町区馬場字原	集落跡	縄
30	片倉	原町区片倉字片倉	集落跡	平
31	羽山	原町区片倉字羽山	散布地	縄
32	羽山B	原町区片倉字羽山	散布地	縄
33	八重米坂A	原町区片倉字八重米坂	散布地	縄
34	畦原A	原町区片倉字畦原	散布地	旧・縄・平
35	畦原C	原町区片倉字畦原	散布地	旧・縄
36	荻原	小高区羽倉字荻原	集落跡	旧・縄・平
37	君ヶ沢B	小高区羽倉字君ヶ沢	集落跡	縄・平
38	野馬土手	原町区地内	土塁	世
39	菖蒲沢野馬土手	小高区羽倉地内	土塁	世
40	原町飛行場跡地	原町区地内	軍事施設	代

時代略記（旧：旧石器　縄：縄文　弥：弥生　古：古墳　奈：奈良　平：平安　中：中世　世：近世　代：近代）
※原町飛行場跡地は遺跡登録外

歳月をかけて構築されている。雲雀ヶ原台地を囲むもの以外にも，阿武隈丘陵に沿って南北に延びる土手も確認されている。この南北に延びる土手を，原町区域内では野馬土手と共通呼称をしているが，小高区内では菖蒲沢野馬土手(39)と呼ばれている。

近代に入ると，荒井遺跡・赤柴遺跡に隣接する雲雀ヶ原台地上に陸軍の飛行場が誘致されることになり，昭和15(1940)年熊谷陸軍飛行学校原町文教場が開場している。以後各地の陸軍飛行学校の分教場となり，戦況が悪化していく中，最終的には陸軍特別攻撃隊の訓練基地として運用された。現在では，荒井遺跡の東方200ｍの位置に，当時の陸軍航空隊の門柱や格納庫の壁や基礎の一部，航空神社(雲雀ヶ原神社)が残り，当時の面影をわずかながら残している。赤柴遺跡で確認された防空壕もこの飛行場に関連する可能性が高い。　（西　澤）

引用・参考文献

西　徹　2001　『図説　相馬・双葉の歴史』
(財)福島県文化振興事業団　2007　「仲山Ｂ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告47』
(財)福島県文化振興事業団　2008　「原Ｂ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告46』
(財)福島県文化振興事業団　2008　「小池田遺跡（１・２次調査）・戸鳥土遺跡・切付遺跡・片倉遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告51』
(財)福島県文化振興事業団　2010　「荻原遺跡（３・４次調査）・君ヶ沢Ｂ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告59』
原町市教育委員会　2005　『原町市内遺跡発掘調査報告書10　平成16年度試掘』
南相馬市教育委員会　2010　『野馬土手(原町区西町地区)・原町西町遺跡』

第１編　荒井（あらい）遺跡

遺跡記号　ＭＳＣ－ＡＲＩ
所　在　地　南相馬市原町区馬場字荒井ほか
時代・種類　縄文時代の集落・河川跡
調査期間　平成20年４月14日～６月18日
調　査　員　吉田　功・吉田秀享・笠井崇吉
西澤正和

第１章　調 査 経 過

荒井遺跡は，平成18年度に遺跡推定地とされた場所であり，平成19年８月に実施された試掘調査により縄文時代後期の遺構・遺物の存在が確認できたことから，新たに「荒井遺跡」として登録された。常磐自動車道建設工事に伴い，工区内の1,000㎡について発掘調査が必要となり，平成20年４月に福島県教育委員会から委託を受けた財団法人福島県文化振興事業団が発掘調査を実施した。

調査は４月14日から開始した。現地連絡所プレハブ・仮設トイレを隣接する赤柴遺跡に設置し，重機を導入しての表土除去作業を開始した。表土除去作業が終了した同月17日からは，作業員30名ほどを導入し，器材搬入・整理，発掘現場環境の整備を行った後に，遺構検出作業を開始した。遺構検出は，排土置き場のある西側から東側に向かい，５月上旬までかけて実施した。この遺構検出作業で，調査区東側で縄文時代後期の住居跡・土坑・土器埋設遺構等を確認したほか，試掘調査で縄文時代後期の遺物包含層とされていたものが，河川跡に伴うものであることが判明した。また，この遺物包含層が調査範囲の南側に続くことが確認されたことから，福島県教育委員会と協議の末，調査範囲を400㎡拡張することとし，調査面積が1,400㎡となった。住居跡等の遺構の精査および河川跡の掘り下げは，５月上旬から遺構検出と平行して行った。５月中旬から６月上旬にかけては天候不順な日が多く，調査範囲の標高が周囲の水田よりも低いことから，調査区内は何度も水没した。このため，排水溝を整備して遺跡内の排水を図った。５月下旬には遺構精査および記録も進み，地形測量，調査完了の写真撮影を経て，６月13日には作業が終了した。その後，器材および作業員を赤柴遺跡へ移動させた。６月18日には，東日本高速道路株式会社へ現地の引渡しを行い，荒井遺跡の現地での調査は終了した。

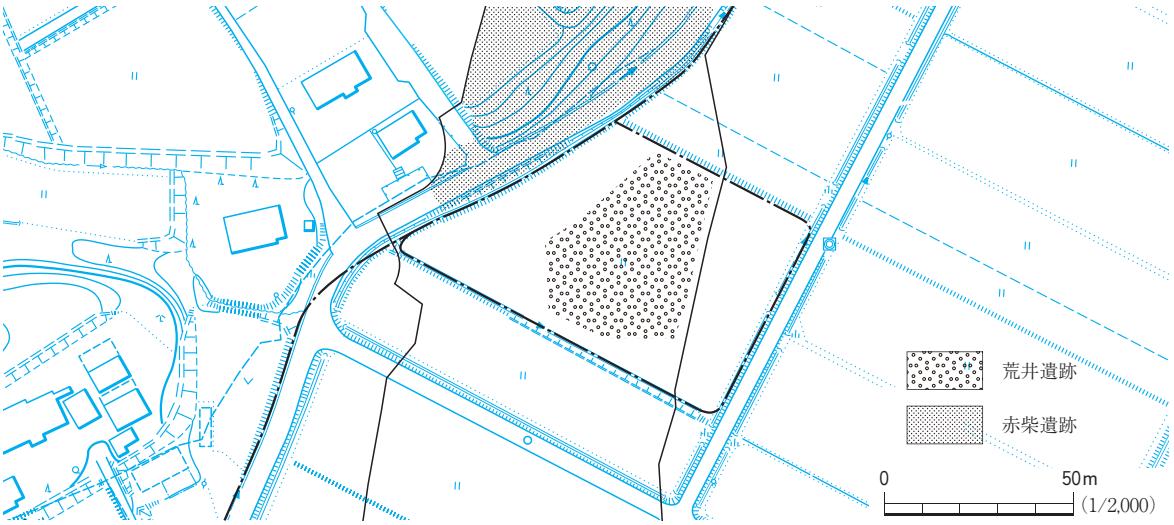


図１　調査区位置図

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図２，写真１～３）

今回の調査で検出した遺構は，竪穴住居跡４軒，土坑４基，土器埋設遺構１基，溝跡１条，性格不明遺構１基と河川跡３カ所である。各遺構は，調査区東部の微高地上に住居跡・土坑・土器埋設遺構・溝跡が南北方向に並び，調査区中央には河川跡があり，調査区西側の微高地上に性格不明遺構が立地している。荒井遺跡周辺は基盤となる段丘面が広く，沖積地化しており，現在の笹部川の元となる河川が絶えず流路を変更しながら概ね北流していたようで，南北方向に走る河川跡と，その間の南北方向に細長い微高地が連続していたものと推測できる。今回の調査で確認された遺構群は南北方向に走る河川跡と，その東西両側の微高地の一角に所在している。

今回の調査で出土した遺物は，縄文土器片14,725点，弥生土器片１点，石器688点，土製品８点である。これらの大半は調査区中央の河川跡から出土しており，特に２号河川跡から出土した。縄文時代後期前葉の遺物は廃棄された状態で出土した。

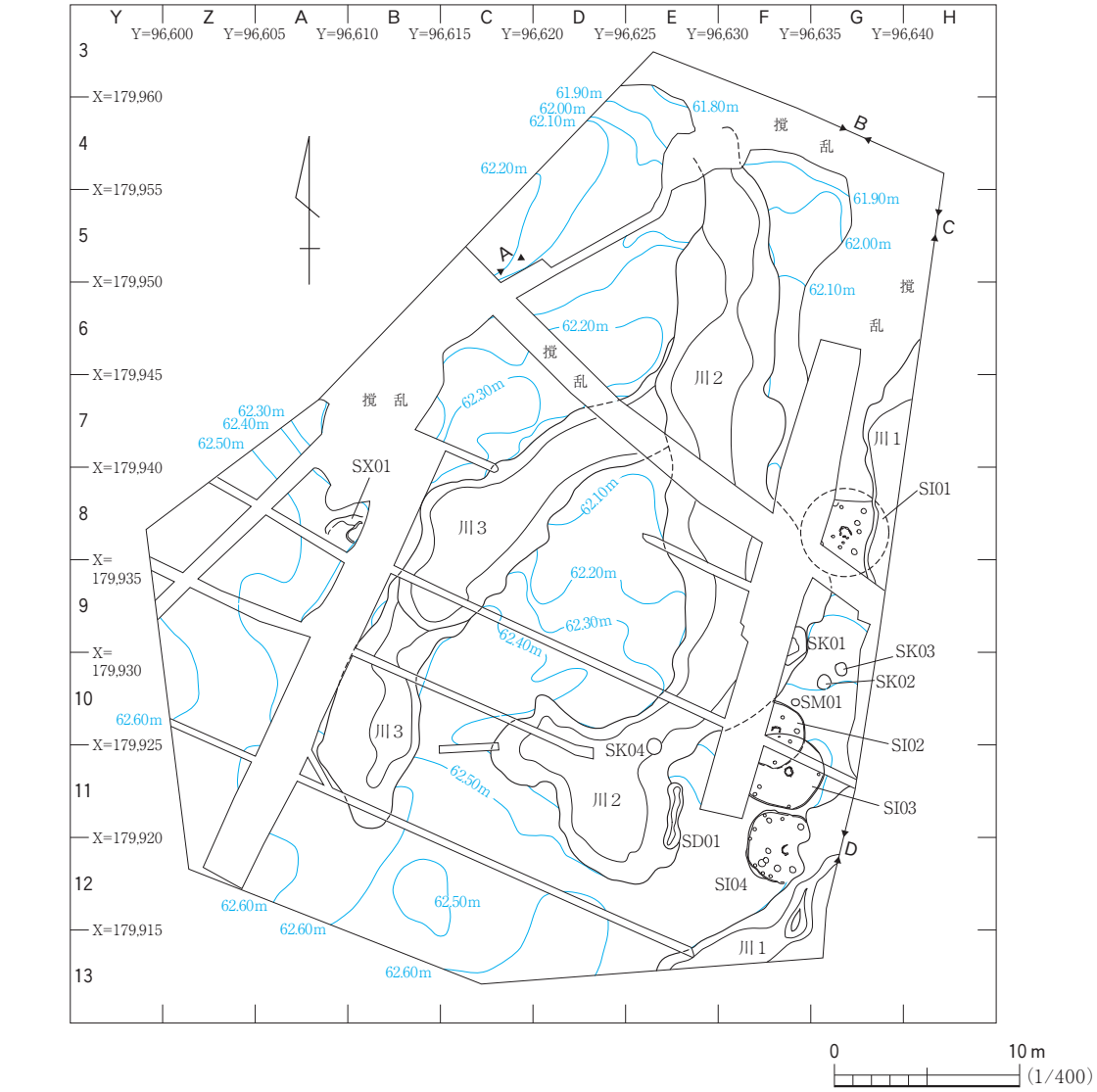
基本土層（図２，写真４）

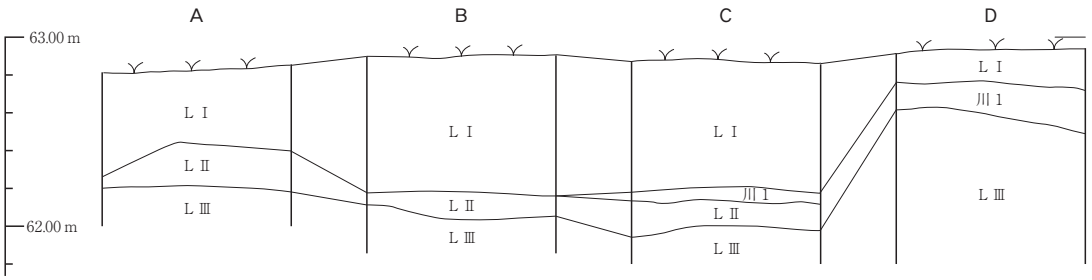
今回の調査区は，調査前は水田であった。このため，耕作や撹乱が基底層であるＬⅢにまで及んでいる部分が多く，本来の堆積状況を示す部分は極めて少ない。調査区内の土層観察にあたっては，調査区内の各地点で各層ごとの特徴や遺構の検出状況・包含遺物などから対応させ，３層に大別した。以下，各層の特徴や遺構・遺物の関係について述べていく。

ＬⅠは，表土・水田耕作土等で，調査範囲の全域に堆積する。厚さは15～70㎝前後である。調査区内はすべて水田として利用されており，大半は水田の床土と考えられる粘質土である。

ＬⅡは，水成堆積層で，調査範囲の全域に堆積する。中間にラミナ砂層を包含する。厚さは６～24㎝を測る。２・３号河川跡を含む遺構の上部に堆積していたことから，縄文時代後期以後の堆積物である。１号河川跡のみが，この層の上部で確認された。

ＬⅢは，遺跡の基盤となるにぶい黄褐色の砂層である。排水溝の一部をトレンチとして深掘りした結果，この層の下には褐色砂礫層，黒褐色砂層，泥炭化した黒色土層，黄灰色砂層が存在するが，いずれも無遺物層であり，調査対象とはしなかった。（笠　井）





基本土層

ＬⅠ　暗褐色土　10ＹＲ3/3(砂粒多量，ＬⅢ塊・炭化物粒少量，表土・水田耕作土)
ＬⅡ　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(小礫・砂粒少量，炭化物粒微量)
ＬⅢ　にぶい黄褐色砂　10ＹＲ4/3(炭化物粒微量)

0 1 m (1/40)

図２　遺構配置図・基本土層

第２節　竪穴住居跡

荒井遺跡では縄文時代後期前葉～中葉の所産と考えられる住居跡４軒を検出した。住居跡は，すべて調査区東部の１・２号河川跡に挟まれた微高地上に立地し，一部重複関係をもちながら近接した位置に営まれていた。以下番号順に説明する。

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（図３，写真５・６）

本遺構は，調査区東部のＧ８・９グリッドに位置し，川１・２に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。周辺には，南西４ｍの位置にＳＫ01，南６ｍにＳＫ02・03が所在する。重複する遺構は認められない。

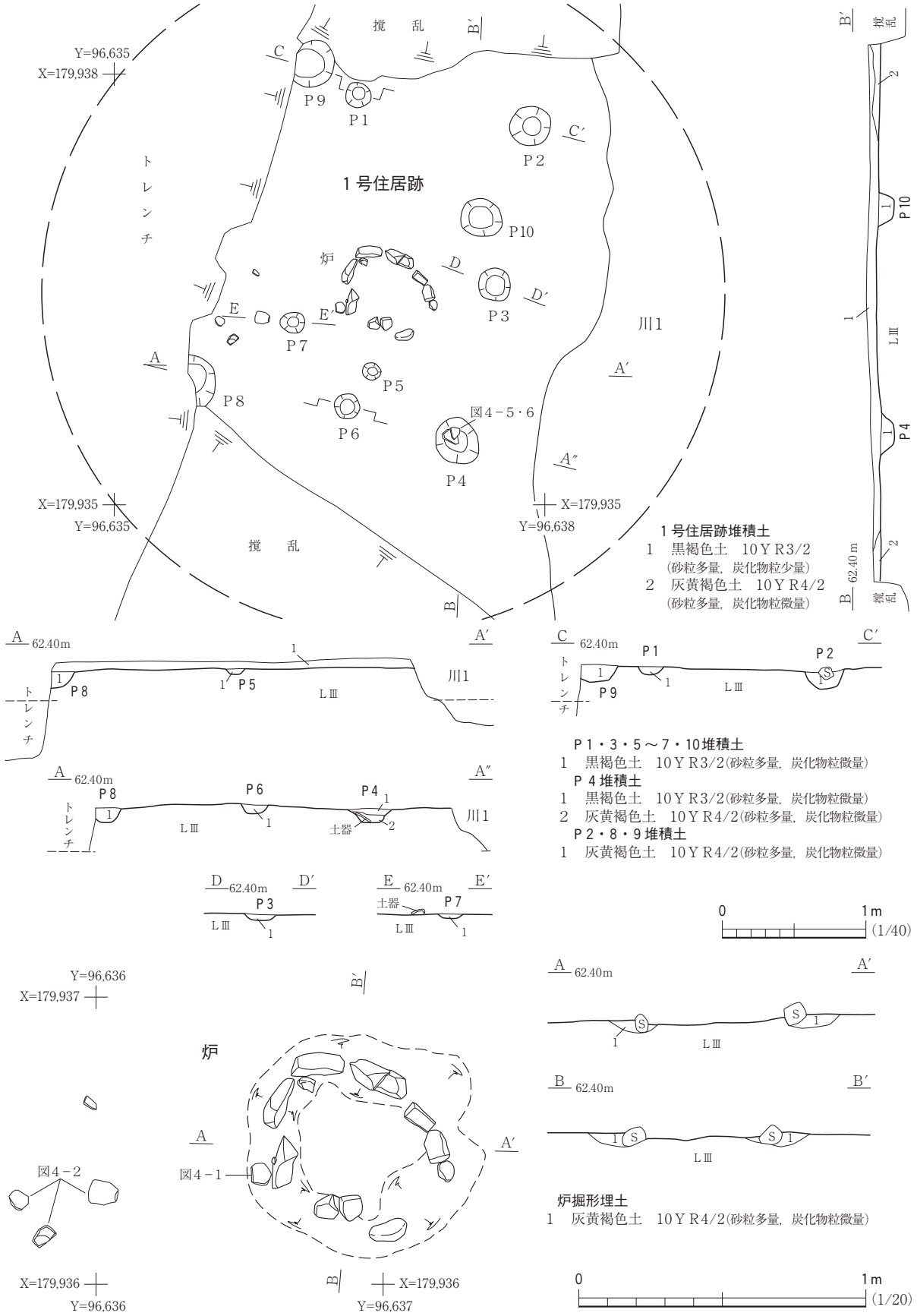
本遺構は，周囲が川１および用水路等の撹乱により壊されていたため，明瞭な範囲を確認できなかったが，基本土層であるＬⅡ・Ⅲと明瞭に異なる堆積土の広がりを確認した。遺構である可能性もあることから，堆積土範囲内に十字の土層観察用ベルトを設定し掘り下げを開始したところ，石囲炉の上面が露出したため住居跡と認識した。

遺構内堆積土は上面が後世の削平により失われており，不明な点が多いが，遺存する部分に限れば，２層に分けられた。ℓ１は遺構全域で確認した堆積土である。炉の周辺付近では床面直上に堆積する砂質土で，洪水等で遺構内に流れ込んだ自然堆積土と判断した。ℓ２はＬⅡに非常に近い堆積土で，遺構の中央へ向かって三角形状の堆積を示している。周囲からの流入土と判断した。

本遺構は周壁が失われているため，遺構の平面形および規模は不明であるが，遺構の時期・堆積土の範囲・柱穴の位置関係から，直径５ｍ弱の円形か円形に近い隅丸方形をしていたものと推定される。遺構の方位は主柱穴と考えられるＰ９－２間とＰ４－８間の中点を結んだ線を基準にするとＮ11°Ｅを示す。床面はＬⅢに形成され，硬く締まり，概ね平坦である。

本遺構の遺構内施設としては，石囲炉と柱穴を含む小穴10基を確認した。石囲炉は，遺存する床面のほぼ中央に位置する。炉の規模は，縁石間の外寸で長軸長69㎝，短軸長60㎝を測り，長さ７～24㎝の自然礫11個を楕円形に並べて縁石としている。炉の南東側で一部縁石が認められない部分がある。炉の掘形は，幅11～26㎝，深さ４㎝の浅い溝状をしている。炉の燃焼面と考えられる中央部を掘り残して環状に掘り込まれており，掘形の内側寄りに縁石を設置している。縁石で囲まれた燃焼面は，縁石の一部が被熱して割れていることから，本来焼土化して赤色に変化しているはずであるが，そのような明確な熱変化の痕跡は認められなかった。

小穴は，概ね平面円形で，検出順にＰ１～10とした。主柱穴は位置関係・規模・堆積土からＰ２・４・８・９と考えられる。主柱穴の配置は遺存する部分に限れば長方形で，長辺にあたる南北方向のＰ８－９間・Ｐ２－４間が約２ｍ，短辺にあたる東西方向のＰ９－２間・Ｐ４－８間が約1.3～1.6ｍ



1号住居跡
撹　乱
トレンチ
炉
川1
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
図4－5・6
Y=96,635
X=179,938
X=179,935
Y=96,635
X=179,935
Y=96,638
1号住居跡堆積土
1　黒褐色土　10ＹR3/2
(砂粒多量，炭化物粒少量)
2　灰黄褐色土　10ＹR4/2
(砂粒多量，炭化物粒微量)
62.40m
P1・3・5～7・10堆積土
1　黒褐色土　10ＹR3/2(砂粒多量，炭化物粒微量)
P4堆積土
1　黒褐色土　10ＹR3/2(砂粒多量，炭化物粒微量)
2　灰黄褐色土　10ＹR4/2(砂粒多量，炭化物粒微量)
P2・8・9堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹR4/2(砂粒多量，炭化物粒微量)
土器
0　1m
(1/40)
炉
図4－1
図4－2
Y=96,636
X=179,937
X=179,936
Y=96,636
X=179,936
Y=96,637
炉掘形埋土
1　灰黄褐色土　10ＹR4/2(砂粒多量，炭化物粒微量)
0　1m
(1/20)

図３　１号住居跡

である。主柱穴の規模は直径26～32㎝で，床面からの深さは10～12㎝を測る。小穴内堆積土はＰ２・８・９が灰黄褐色土であり，Ｐ４の下層も灰黄褐色土である。主柱穴以外の小穴Ｐ１・３・５～７・10は，いずれも黒褐色土が堆積している。主柱穴と考えられるＰ４の上層も近似した堆積土であることから，主柱穴よりも後に埋没したものと考えられる。炉を中心に西側に分布するＰ１・５～７が，直径13～18㎝，床面からの深さ３～６㎝を測り，やや規模が小さく，東側のＰ３が，直径21㎝，床面からの深さ４㎝，Ｐ10が直径28㎝，床面からの深さ10㎝と主柱穴並の大きさである。

遺　　物（図４，写真21）

本遺構からは，縄文土器片114点，石器71点が出土した。縄文土器は，後期中葉の加曾利Ｂ式に比定される。石器は剥片が多く，石材は珪質頁岩，珪化流紋岩，変質流紋岩，頁岩，砂岩等が認められ，珪化流紋岩が多い。出土遺物のうち，特徴的な土器９点と石器６点を図４に示した。

１は，精製深鉢か鉢の口縁部付近で，石囲炉の西の縁石際から出土した。内湾する器形である。口唇部は水平に面取りされており，端部外面に粘土紐を貼り付けて肥厚させ，キザミ目を施しているほか，山形の突起を付している。文様は，横位と斜位のＬＲ単節縄文を施文した後，弧線文を対向させてモチーフを描き，部分的に縄文をナデ消している。

２は小型の鉢形土器で，石囲炉の西側で出土した。コップ形の器形で，内外面ともに丁寧なナデ調整を加え，口縁部近くでは指頭圧痕が薄く認められる。

３・４は底部資料である。両資料に内外面にナデ調整がみられる。３は２と同様に小型品の底部で，底面が上げ底状を呈する。

５・６は粗製深鉢の口縁部および胴部資料である。ともにＰ４から出土したもので，同一個体と考えられる。直線的に開き，口縁部付近で垂直に立ち上がる器形で，口唇部は水平に面取りされている。文様は12本１単位の櫛状工具で，口縁部外面を横位に，胴部を波長の長い波状に引掻文を施している。

７～９は深鉢形土器の胴部資料で，７・８は精製，９は粗製土器であろう。７は２条の沈線間に刺突を施し，沈線直下に単節縄文を施している。８は幅４㎜ほどの浅い沈線を施し，胴部には単節羽状縄文を施している。９は外面に無節の縄文原体を縦位に回転施文している。

10～13は石鏃である。10・11は凸基有茎石鏃である。両側辺が直線的で，基部のえぐりが浅くダイヤ形に近い形状である。両面から丁寧な押圧剥離を加えられている。12・13は石鏃の未成品とみられる。器体が厚く，周囲からの押圧剥離が未熟である。

14は石錐である。素材剥片の一端に調整剥離を加えて先端部を形成している。先端には使用による磨滅が認められる。

15は敲石兼磨石である。楕円形で平たい円礫の表面と一方の側面に磨痕が認められ，資料下端および側面には敲打痕が認められる。

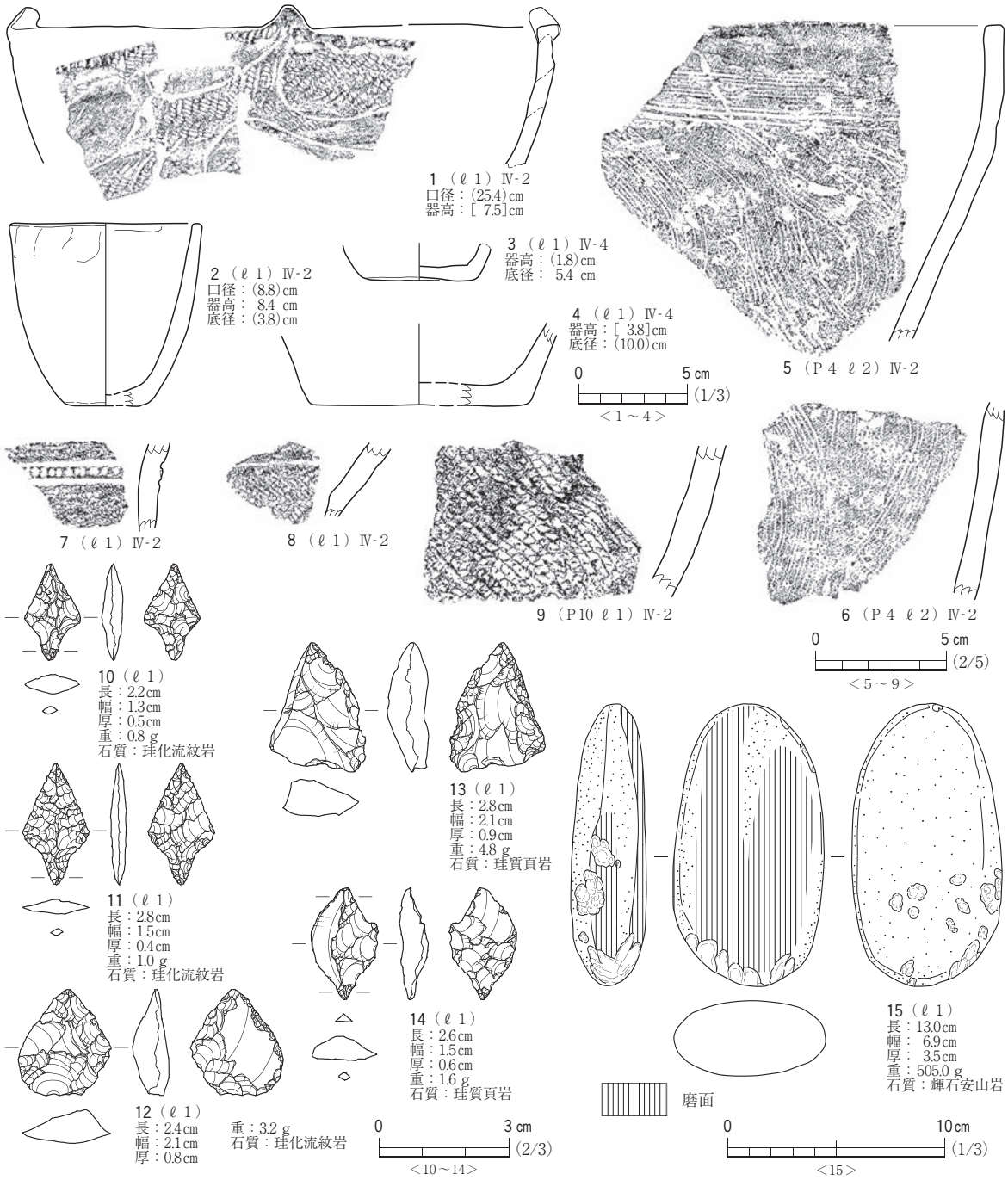


図４　１号住居跡出土遺物

ま と め

本遺構は今回検出した住居跡では最も北側に位置するものである。周壁の全てが失われており，遺構の規模や平面形をつかむことができなかったが，幸運なことに石囲炉を中心に４基の主柱穴を検出することができ，住居跡の外観を推定することができた。遺構の時期は，出土遺物の特徴から，縄文時代後期中葉の所産であると判断した。（笠　井）

２号住居跡　ＳＩ02

遺　　構(図５，写真７・８)

本遺構は，調査区東部のＦ10・11グリッドに位置し，川１・２に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。南側でＳＩ03と重複しており，新旧関係は本遺構のほうが古い。周辺には，北側に隣接してＳＭ01やＳＫ01～03が所在する。遺構の西側はトレンチにより，中央は水路により破壊され，遺構上面はＳＩ03に伴う削平をうけているため，遺構の遺存状態は悪い。

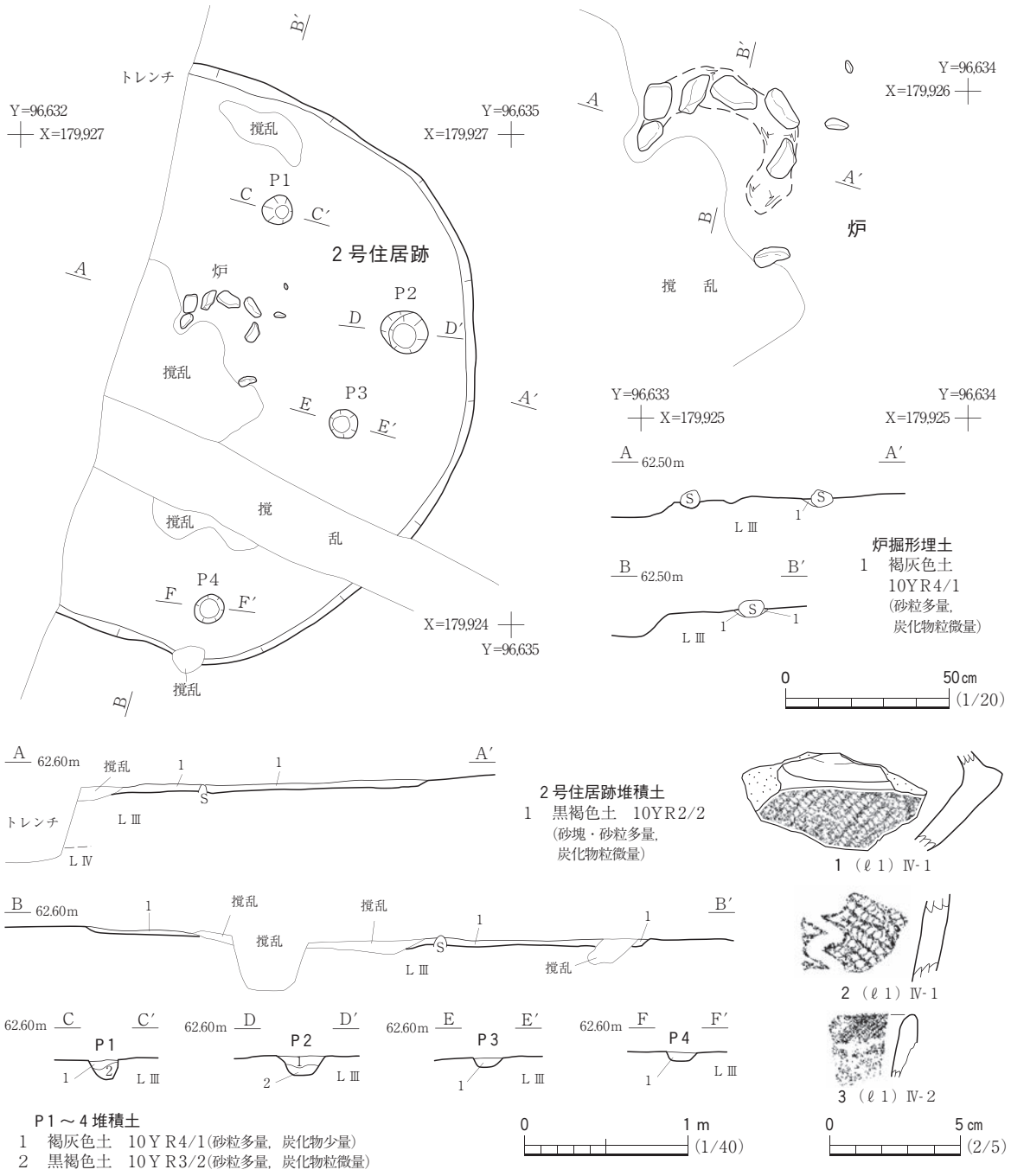


図５　２号住居跡，出土遺物

遺構検出面はＬⅢ上面で，黒褐色土の半円形の輪郭を確認し，十字に土層観察用ベルトを設定し掘り下げを開始した。掘り下げの結果，検出の段階で露出していた円礫が，石囲炉の縁石であることが判明し，住居跡と判断した。

遺構内堆積土は，黒褐色土の１層のみである。層厚が５㎝ほどしかないため，堆積状況は断定できない。

遺構の規模および平面形は，西側３分の１が失われているが，遺存する部分から直径3.5ｍほどの円形と考えられる。周壁は最も遺存している部分で床面から５㎝ほどの高さしかなく，どのように立ち上がっていたか不明である。床面はＬⅢを掘り込んで造られており，硬く締まり，概ね水平かつ平坦である。

本遺構の遺構内施設は，石囲炉と小穴４基を確認した。石囲炉は，床面の中央やや東寄りに位置する。炉は南側半分を撹乱で壊されているが，遺存部分から円形に縁石を配置していたものと考えられる。規模は，良好に遺存する東西方向の縁石間の外寸で48㎝を測る。縁石は長さ11～15㎝の自然礫で，６個が遺存しており，そのほかに１個が南側に確認された。炉の掘形は，ほぼ縁石と同様の寸法で，幅10㎝，深さ３㎝の浅い溝状をしており，炉の燃焼面と考えられる中央部を掘り残して弧状に掘り込まれている。縁石で囲まれた燃焼面とみられる部分は，縁石の一部が被熱していることから，本来焼土化して赤色に変化しているはずであるが，そのような痕跡は認められなかった。

小穴は概ね円形の平面形を呈し，遺存部分ではＬ字に配置され，北側からＰ１～４とした。小穴の規模は東端部のＰ２が最大で，直径26㎝，床面からの深さ12㎝を測る。Ｐ１・３・４はやや小ぶりで，直径18～20㎝，深さ５～12㎝を測る。堆積土は北側のＰ１・２の下層にのみ黒褐色土の堆積が見られたが，Ｐ３・４とＰ１・２の上層に同様の褐灰色土が認められることから，検出した小穴は，ほぼ同時期に埋没したものと考えられる。いずれも柱穴と判断した。

遺　　物（図５，写真21）

本遺構からは，縄文土器片６点，石器２点が出土した。縄文土器は後期前葉の綱取式に比定されるが，後期中葉の所産と考えられるものも含まれる。出土遺物のうち，特徴的な土器３点を図５に示した。

１・２は後期前葉の所産と考えられるものである。１は深鉢形土器の口縁部突起直下付近の資料である。「く」の字に強く屈曲する器形で，屈曲部に隆帯を巡らせ，胴部にはＬＲ単節縄文を横位に施文している。２は深鉢の胴部資料で，ＬＲ単節縄文を縦位に施文し，その上から断面円形の棒状工具で垂下する波状沈線を施している。

３は後期中葉の所産と考えられるもので，口縁部資料である。口縁端部付近に細かい縄文原体でＬＲ単節縄文を施している。施文部より下位は剥離している。

ま と め

本遺構は，石囲炉をもつ直径3.5ｍほどの円形と考えられるやや小型の住居跡である。縄文時代後期中葉の所産と考えられるＳＩ03と重複しており，これよりも古い。遺構の時期は，新しい時

期の出土遺物の特徴と，小さめの礫で円形に配置した石囲炉をもつことから，縄文時代後期中葉の所産としておくが，ほとんどの出土遺物が後期前葉のものであることから，より古い時期の所産である可能性もある。（笠　井）

３号住居跡　ＳＩ03

遺　　構（図６・７，写真９・10）

本遺構は，調査区東部のＦ11，Ｇ11グリッドに位置し，川１・２に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。北側でＳＩ02と重複しており，新旧関係は本遺構のほうが新しい。周辺には，南側にＳＩ04が隣接している。遺構の遺存状態は良好とは言いがたく，遺構の西側および北側が破壊されているほか，遺構上位は水田耕作に伴う削平をうけており，床面以外の残りは悪い。

遺構検出面はＬⅢ上面で，にぶい黄褐色土の円形の輪郭を確認した。掘り下げの結果，石囲炉の縁石を検出したため，住居跡であることを確認した。

遺構内堆積土は３層に分かれた。ℓ１は遺構全域，ℓ２は遺構北側，ℓ３は床面の一部に堆積するにぶい黄褐色の土層である。粘土塊の有無の違いはあるが，ともに多量の砂を含むことから洪水等により遺構内に流れ込んだものと考えられる。

遺構の平面形は西側が遺存していないが，おおよそ東西方向に長軸をもつ円形に近い隅丸方形で，長軸方向はＮ20°Ｅを示す。長軸遺存長3.6ｍ，南北遺存長4.0ｍである。周壁は，北側では後世の削平により大部分が失われており，痕跡がかろうじて残るのみである。南側では床面から８～10㎝が遺存しており，60°ほどの角度で立ち上がる。床面はＬⅢを掘り込んで形成されており，硬く締まり，水平かつ平坦である。

本遺構の遺構内施設は，石囲炉と小穴４基を確認した。石囲炉は，床面のほぼ中央に位置する。炉の規模は，縁石間の外寸で長軸長55㎝，短軸長48㎝を測り，長さ７～15㎝の自然礫11個を楕円形に並べて縁石としている。炉の掘形は，幅12～22㎝，深さ５㎝の浅い溝状で，炉の燃焼面と考えられる中央部を掘り残して環状に掘り込まれており，掘形の内側寄りに縁石を設置している。縁石で囲まれた燃焼面とみられる部分は，縁石の一部が被熱していることから，本来焼土化して赤色に変化しているはずであるが，そのような痕跡は認められなかった。

小穴は概ね平面円形で，東側から時計回りにＰ１～４とした。Ｐ１～３は壁際に位置し，Ｐ４のみ周壁から50㎝ほど内側に入っている。小穴の規模は，東側のＰ１・２が小型で直径14㎝，床面からの深さ５～６㎝を測る。西側のＰ３・４は直径20㎝，深さ11～12㎝を測る。堆積土はＰ１・４が灰黄褐色土，Ｐ２・３が黒褐色土である。Ｐ１～３が壁柱穴，Ｐ４が主柱穴と推測している。

遺　　物（図７・８，写真22）

本遺構からは，縄文土器片30点，石器７点が出土した。縄文土器は後期中葉の加曾利Ｂ式に比定されるもので，石囲炉内や床面付近から少量が出土した。また，石囲炉の南側からは石皿と敲石がセットで出土した。出土遺物のうち，特徴的な土器８点，石器５点を図示した。

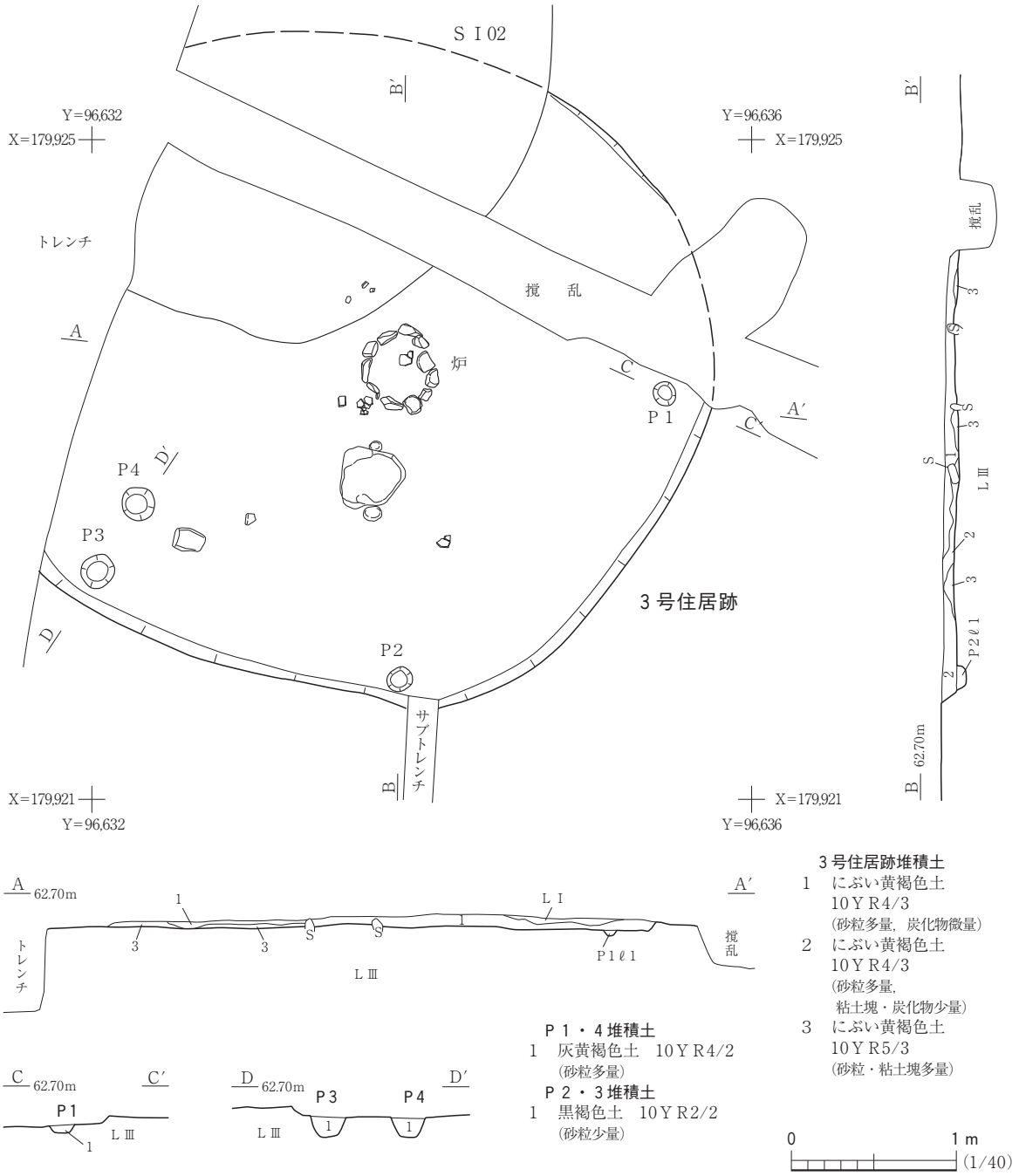


図６　３号住居跡

図７－１は，深鉢形土器の口縁部から胴部上半部資料で，炉内と炉の南東側から出土したものが接合した。弱く外傾する器形で，口唇部は水平に面取りされている。文様は口縁端部と胴部に単節縄文による縄文帯を施し，幅3.5～４㎜の沈線で区画しているほか，無文帯を挟んで胴部にも沈線区画の縄文帯が巡る。４～６の資料も文様・胎土の共通点から，本資料と同一個体の可能性がある。沈線で区画した中に縄文を充填し文様帯としているもので，４には入組文もみられ，貼瘤も形成されている。

２・３は深鉢形土器の口縁部資料である。２は波状口縁をなし，内外面ともにミガキ調整してお

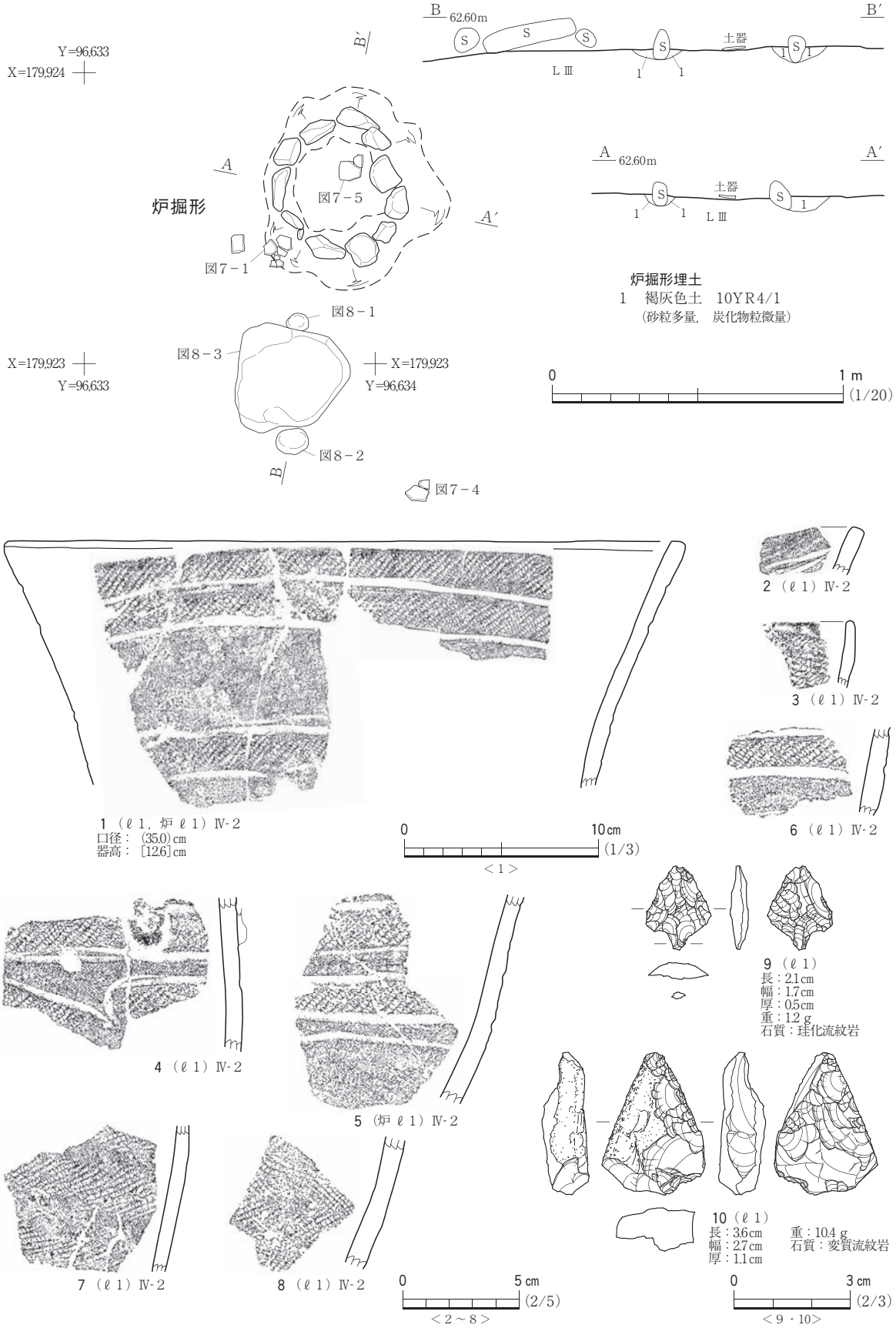


図７　３号住居跡炉，出土遺物（１）

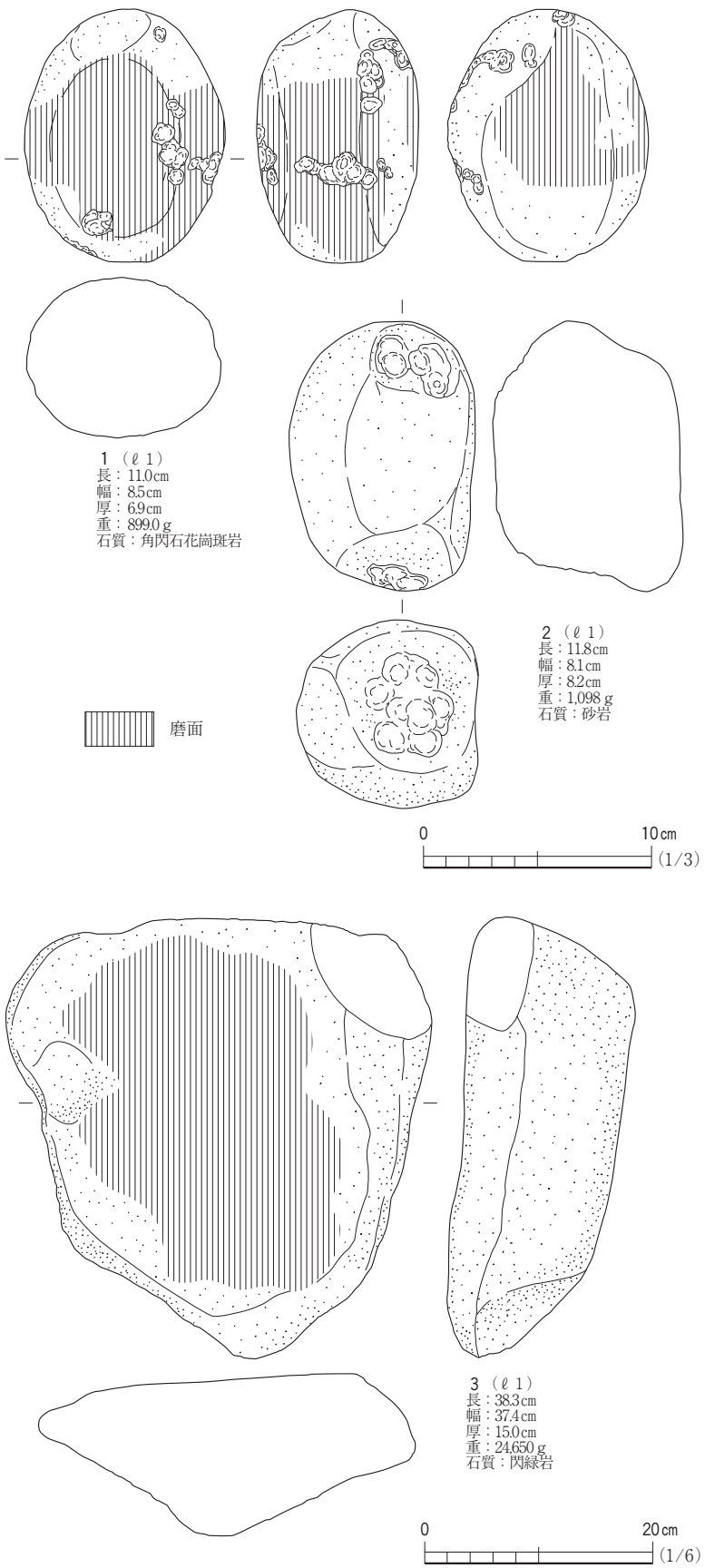


図８　３号住居跡出土遺物（２）

り，口縁端部と平行に細い沈線を描いている。３は粗製の資料と考えられ，外面に単節縄文を施している。

７・８は地文のみが施された胴部資料で，単節縄文が横位に施される。

９は石鏃である。凸基有茎石鏃と考えられるが，裏面の押圧剥離が未熟で，基部のえぐりの一方が深く，一方が浅いことから，平基有茎石鏃の未製品の可能性もある。

10は石核と判断した。側面の打面から連続して小型の剥片を剥離している。

図８－１・２は敲石である。いずれも，３とセットで出土した。１は磨石も兼ねるもので，円礫の３面に磨痕と敲打痕が認められる。２は円礫の先端部に敲打痕が認められる。３は石皿である。１・２に接して出土した。板状礫の一面を磨面としている。

ま と め

本遺構は，石囲炉をもつ一辺４ｍほどの円形に近い隅丸方形と推定される住居跡である。遺構の時期は，出土遺物の特徴と小さめの礫で円形に配置した石囲炉をもつことから，縄文時代後期中葉の所産である。

（笠　井）

４号住居跡　ＳＩ04

遺　　構（図９・10，写真11・12）

本遺構は，調査区東部のＦ11・12グリッドに位置し，川１・２に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。重複する遺構は認められないが，遺構の東側が川１により削られている。周辺には，北側に隣接してＳＩ03が所在する。遺構の遺存状態は，先述したように川１，水田耕作により削平をうけており，床面以外の残りは悪い。

本遺構の遺構検出面はＬⅢ上面で，黒褐色土の円形の輪郭を確認し，十字の土層観察用ベルトを設定し掘り下げを開始した。掘り下げの結果，石囲炉の縁石を検出したため，住居跡であることを確認した。

遺構内堆積土は３層に分かれた。ℓ１は遺構全域に堆積する黒褐色土である。ℓ２は遺構西側と床面の一部に堆積する灰黄褐色の砂質土で，南壁と西壁際で三角堆積を示す。ともに均質な土層で自然堆積土である。ℓ３は遺構北側床面に堆積する灰黄褐色の粘質土で，よく締まり平たく堆積していることから，人為堆積と考えられる。

遺構の規模は，南北3.8ｍ，東西の遺存値2.9ｍを測り，平面形は円形に近い隅丸方形である。遺構の方位は，主柱穴と考えられるＰ１－２間とＰ３－４間の中点を結んだ線を基準にするとＮ10°Ｅを示す。周壁は床面から10㎝ほどが遺存しており，約50～60°の角度で立ち上がる。床面はＬⅢに形成され，硬く締まり，平坦である。

本遺構の遺構内施設は，石囲炉と小穴14基を確認した。石囲炉は，床面の中央やや東側に位置する。炉は東側半分を川１により削りとられているが，遺存部分から円形か楕円形に縁石を配置していたものと考えられる。規模は，遺存する南北方向の縁石間の外寸で55㎝を測る。縁石は長さ５～14㎝の自然礫で，板状のものが多く９個が遺存していた。炉の掘形は，幅９～20㎝，深さ２～５㎝の浅い溝状をしており，炉の燃焼面と考えられる中央部を掘り残して弧状に掘り込まれている。縁石で囲まれた燃焼面とみられる部分は，縁石の一部が被熱していることから，本来焼土化して赤色に変化しているはずであるが，そのような痕跡は認められなかった。

小穴は概ね平面円形で，検出順にＰ１～14とした。主柱穴は位置関係・規模・堆積土からＰ１～４と考えられる。主柱穴の配置は長方形で，長辺にあたる南北方向のＰ１－４間・Ｐ２－３間が約２ｍ，短辺にあたる東西方向のＰ１－２間・Ｐ３－４間が約1.4ｍである。主柱穴の規模は，Ｐ２～４が直径34～40㎝，Ｐ１が28㎝で，床面からの深さはＰ３が28㎝と深く，そのほかは14～16㎝である。堆積土はＰ１～３のℓ１が同一の黒褐色土で，Ｐ４はやや黒味の強い黒褐色土である。Ｐ２・３については，ℓ１は柱痕跡である可能性が強く，ℓ２は埋土であろう。主柱穴以外の小穴のうちＰ８～14は壁際に巡ることから，壁柱穴と考えられる。これらの規模はいずれも小型で，直径16～18㎝，床面からの深さ５～10㎝を測る。Ｐ５～７は周壁から50～90㎝離れた位置にある小穴で，壁柱穴と考えられるものと比較すると規模が大きい。Ｐ５は直径34㎝，床面からの深さ６㎝，Ｐ６・

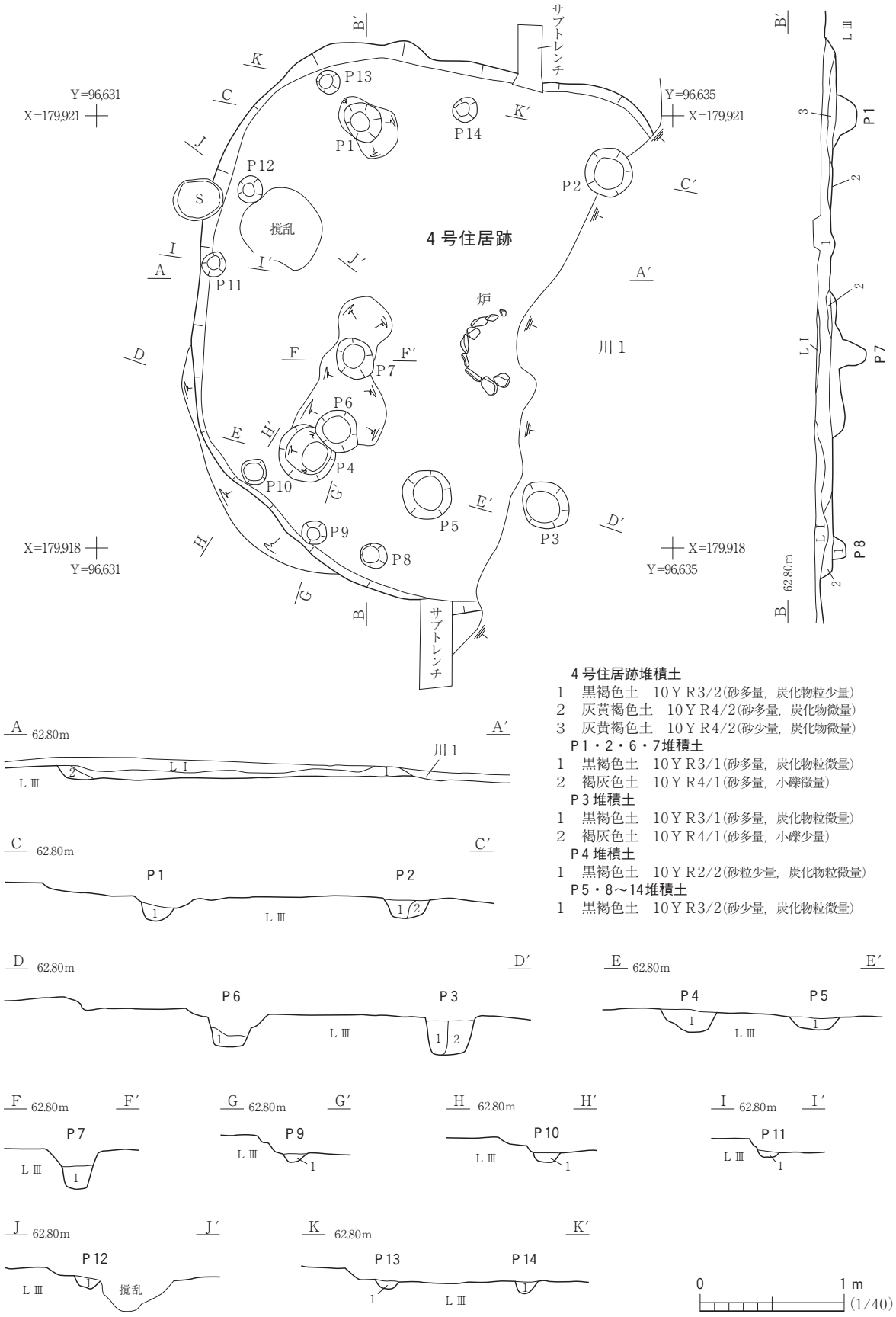

4号住居跡
サブトレンチ
Y=96,631
X=179,921
Y=96,635
X=179,921
X=179,918
Y=96,631
X=179,918
Y=96,635
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
S
搬乱
炉
川1
LⅢ
LⅠ
62.80m
4号住居跡堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2(砂多量，炭化物粒少量)
2　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(砂多量，炭化物微量)
3　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(砂少量，炭化物微量)
P1・2・6・7堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1(砂多量，炭化物粒微量)
2　褐灰色土　10ＹＲ4/1(砂多量，小礫微量)
P3堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1(砂多量，炭化物粒微量)
2　褐灰色土　10ＹＲ4/1(砂多量，小礫少量)
P4堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2(砂粒少量，炭化物粒微量)
P5・8～14堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2(砂少量，炭化物粒微量)
0
1 m
(1/40)

図９　４号住居跡

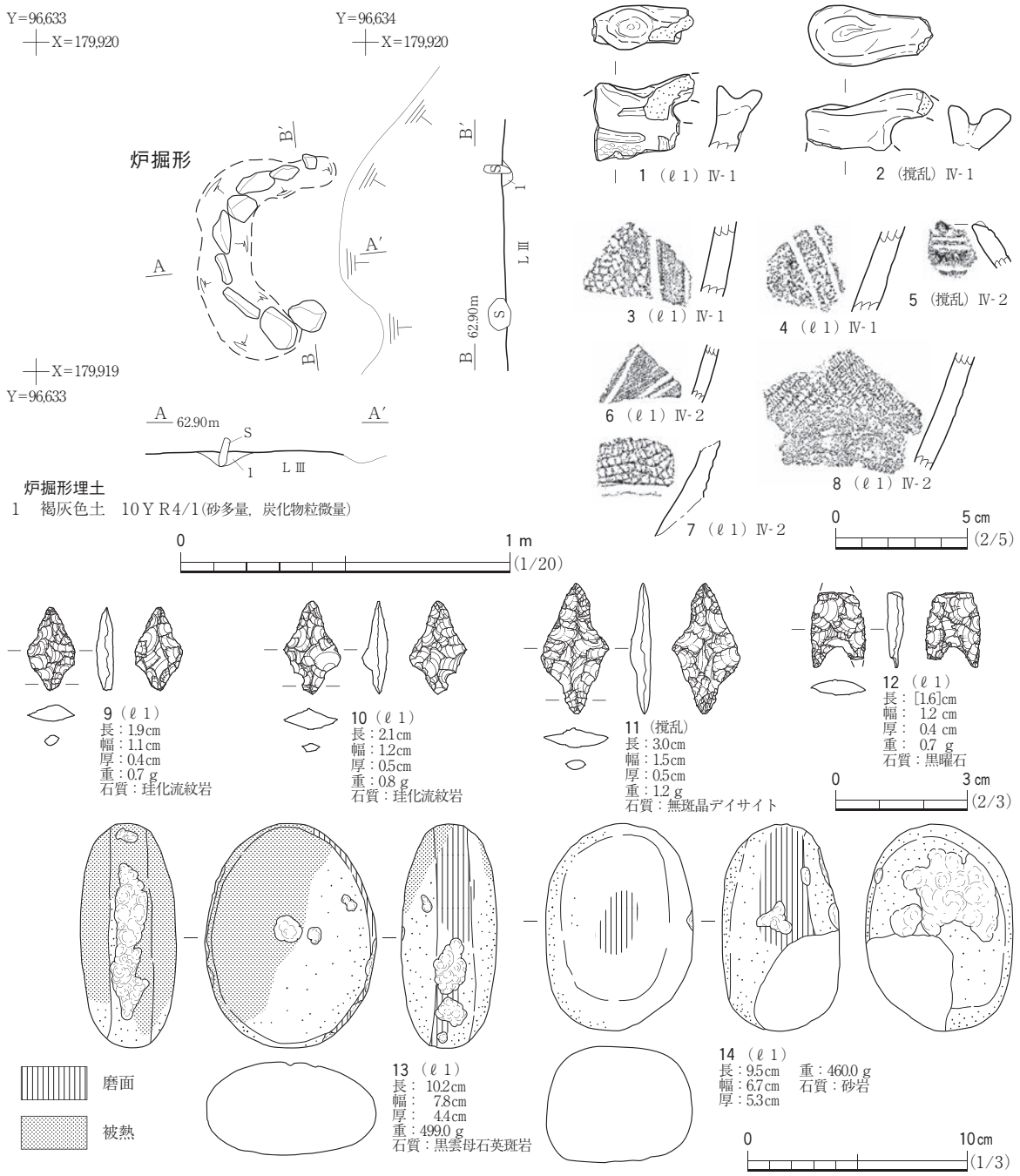


図10　４号住居跡炉，出土遺物

７は直径26㎝，床面からの深さ約25㎝を測り，主柱穴並の規模である。

遺　　物（図10，写真22）

本遺構からは，縄文土器片32点，石器24点が出土した。縄文土器は，後期前葉の綱取式と後期中葉の加曾利Ｂ式に比定されるものである。出土遺物のうち，特徴的な土器８点と石器６点を図10に示した。

１・２は，後期前葉の所産と考えられる深鉢形土器の口縁部資料である。ともに中央に円孔が貫通した突起をもち，外面から見て突起の左側に断面円錐形の盲孔を上方から施している。１には口

縁部直下の文様を区画する横位沈線と突起から垂下する沈線が認められる。

３・４は，後期前葉の所産と考えられる深鉢形土器の胴部資料である。３は横走する単節縄文を垂下する沈線で区画し，区画間を磨り消している。４は無文地に平行沈線を施す。

５は後期中葉の所産と考えられる壺か注口土器の口縁部資料である。内傾する器形で，口唇部に粒状の粘土塊を貼付している。口縁に沿って細く浅い沈線が認められる。

６は後期中葉の所産と考えられる壺か注口土器の胴部資料である。外面にはミガキが施され，５同様に細く浅い沈線が施されている。

７・８は後期中葉の所産と考えられる深鉢形土器の胴部資料である。７は沈線区画の上位に単節縄文が施されており，８は無区画に０段多条の単節縄文が羽状に施されている。

９～12は石鏃である。９～11は凸基有茎石鏃で，基部のえぐりの浅いダイヤ形の形状で，いずれも刃部の両側辺が浅くえぐれている。12は凹基無茎石鏃で，先端部を欠損している。基部のえぐりは深い。いずれの石鏃も両面から押圧剥離を加えられている。

13・14は敲石兼磨石である。13では楕円形の平たい円礫の側面に磨痕と敲打痕があり，平たい面の中央にも敲打痕が認められる。また被熱している。14は厚みのある円礫の側面と平坦な面に磨痕があり，反対側の平坦な面と側面に敲打痕が認められる。

ま と め

本遺構は，石囲炉をもつ一辺3.8ｍほどの円形に近い隅丸方形をした住居跡である。石囲炉の縁石に板状の自然礫を使用している点が，本遺跡内の他の住居跡と異なる点である。また主柱穴・壁柱穴と考えられる小穴を検出しており，本遺跡の住居跡で最も充実した内容の遺構内施設をもつ。遺構の時期は，出土遺物の特徴と，小さめの礫で円形に配置した石囲炉をもつことから，縄文時代後期中葉の所産としておく。（笠　井）

第３節　土　　坑

荒井遺跡では縄文時代後期前葉～中葉，晩期の所産と考えられる土坑４基を検出した。土坑は，住居跡同様，概ね調査区東部の１号河川跡および２号河川跡に挟まれた南北方向に延びる微高地上に立地し，４号土坑のみ，２号河川跡の中に立地する。以下番号順に説明する。

１号土坑　ＳＫ01（図11，写真13・23・24）

本遺構は，調査区東部のＦ９・10グリッドに位置し，川１・２に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。重複する遺構はないが，遺構の西側半分が撹乱により壊されているため，遺構の遺存状態は悪い。本遺構の周辺には，北東４ｍにＳＩ01，南東２ｍにＳＫ02・03，南約２ｍにＳＩ02およびＳＭ01が所在する。

本遺構は試掘時に確認されていたもので，遺構検出面はＬⅡ上面である。また調査時には，すでに

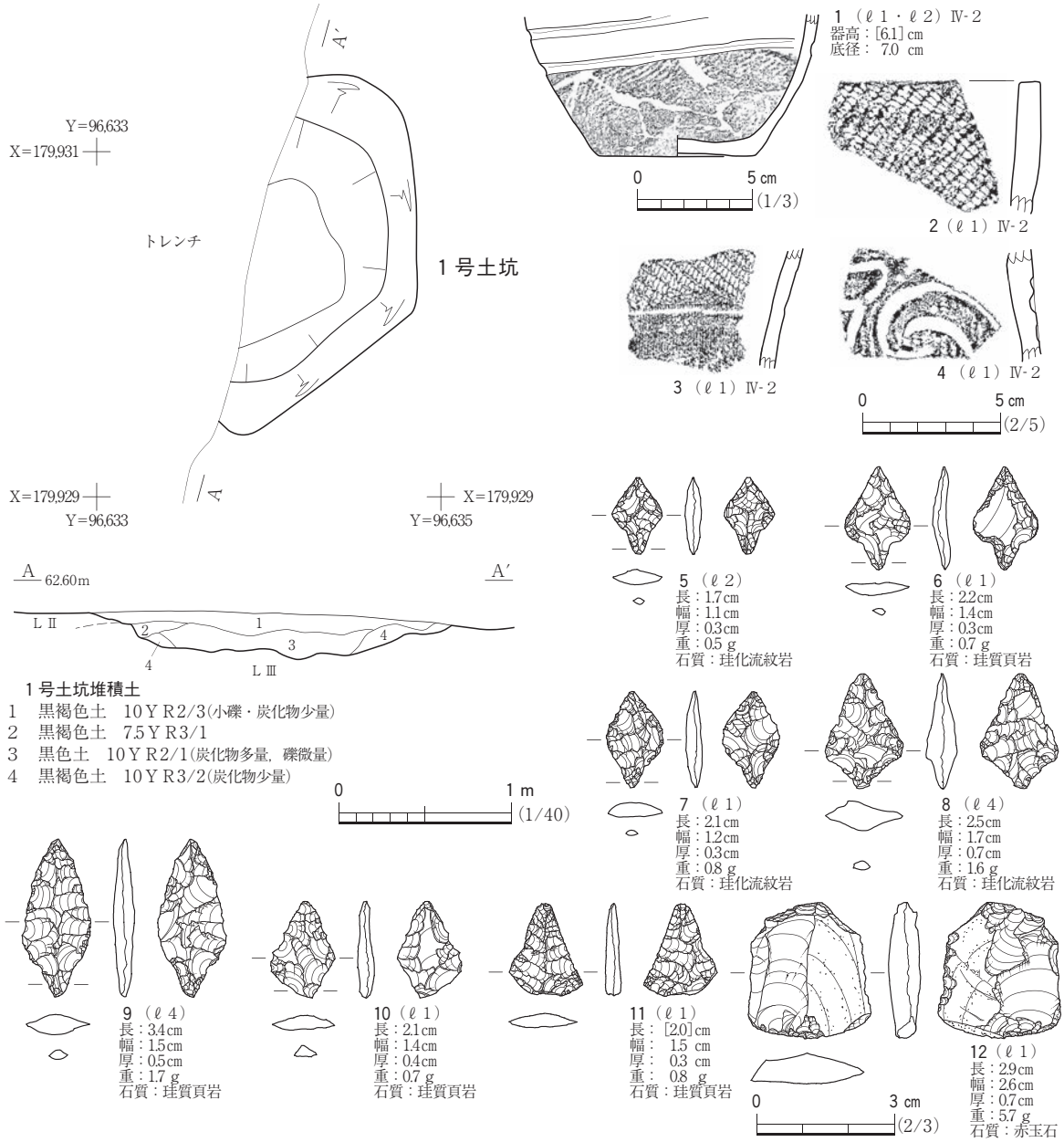


図11　１号土坑，出土遺物

半截されており，遺構内堆積土は４層に分けられた。堆積の状況から，ℓ１・４は流入土の自然堆積，ℓ２・３は堆積の不自然さと包含する炭化物の不均一性から人為的な埋土と判断した。

遺構の平面形は遺存する下端の形状から不整長方形と推定される。遺構の長軸方位は，直線的な南東壁を基準にするとＮ67°Ｅを示す。遺構の規模は崩れ部分を含めない上端遺存値で150㎝，遺構検出面からの深さ24㎝を測る。周壁は上部が崩落しており，底面から20～30°の角度で緩やかに立ち上がる。底面はＬⅢに形成され，凹凸があり一定していない。

本遺構からは，縄文土器片78点，石器８点が出土したほか，珪化流紋岩・珪質頁岩等の細剥片が多量に出土した。縄文土器は後期中葉の所産と考えられるものが主体である。出土遺物のうち，特徴的な土器４点と石器８点を図11に示した。

１は深鉢形土器の底部資料である。内湾気味に立ち上がる器形で，幅４㎜の２条の沈線で区画された緩やかに上下する無文帯を形成し，その直下に単節縄文を施している。

２は深鉢形土器の口縁部資料で，ほぼ垂直に立ち，口唇部を水平に面取りしている。外面には単節縄文を施している。

３は深鉢形土器の胴部資料で，横位の縄文帯の下を浅い沈線で区画している。

４は後期前葉の所産と考えられる深鉢形土器で，単節縄文施文後，盲孔を基点に幅５㎜の太めの沈線で渦巻き状のモチーフを描き，部分的に磨り消している。

５～11は石鏃である。いずれも凸基有茎石鏃で，６が基部のえぐりが深く，そのほかは基部のえぐりが浅い。５・７は茎部が長く，８～10は刃部が長い。11は茎部を欠損している。

12は２次加工剥片と判断した。方形に薄い両極石核を加工しているようで，三辺に調整剥離が認められる。

本遺構は，住居跡群に隣接して造られた浅めの土坑である。堆積土中から多くの細かい剥片が出土することから，打製石器制作場の剥片を寄せて廃棄したものと考えられる。遺構の時期は出土遺物の特徴から，縄文時代後期中葉の所産と判断した。（笠　井）

２号土坑　ＳＫ02（図12，写真13・23）

本遺構は，調査区東部のＧ10グリッドに位置し，川１・２に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。重複する遺構はなく，遺構の遺存状況は比較的良好である。周辺には，北東0.5ｍにＳＫ03，南西1.2ｍにＳＭ01，北西1.5ｍにＳＫ01が所在する。

遺構検出面はＬⅢ上面で，黒褐色土の円形の輪郭を確認した。遺構内堆積土は２層に分けられた。堆積の状況から，ℓ１は壁の崩落土，ℓ２は流入土の自然堆積と判断した。

遺構の平面形は円形である。遺構の規模は直径約73㎝，検出面からの深さ50㎝を測る。周壁は，底面からほぼ垂直，南壁の一部で内傾しつつ立ち上がり，底面から35㎝付近で傾斜が変換して40°ほどの緩やかな角度で外傾する。周壁の傾斜変換は上部の崩落によるものと考えられる。底面はＬⅢを掘り込んで形成されており，半球状にくぼむ。

本遺構からは，縄文土器片４点が出土した。縄文土器は後期中葉と晩期の所産と考えられるものである。出土遺物のうち，特徴的な土器３点を図12に示した。

１・２は後期中葉の所産と考えられる粗製深鉢の胴部資料である。引掻文で弧状のモチーフをランダムに施している。

３は晩期の所産と考えられる粗製深鉢の胴部資料で，撚糸文が施されている。

本遺構は，微高地上に造られた平面円形でやや深めの土坑である。ほぼ垂直に掘り込まれており，常に底から水が涌く状態であった。遺構の時期は，新しい時期の出土遺物の特徴から晩期の所産としておく。（笠　井）

３号土坑　ＳＫ03（図12，写真14・23）

本遺構は，調査区東部のＧ10グリッドに位置し，川１・２に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。重複する遺構はないが，遺構上部が削平されており，底面を除いて遺構の遺存状況は比較的悪い。周辺には，南西0.5ｍにＳＫ02，同2.5ｍにＳＭ01，北西２ｍにＳＫ01が所在する。

遺構の検出面はＬⅢ上面で，にぶい黄褐色土の楕円形の輪郭を確認した。遺構内堆積土は黄褐色土の１層のみであった。層厚が薄く，また単層であることから断定できないが，均質な土で川砂を多く含むことから，流入土の自然堆積と判断した。

遺構の平面形は隅丸長方形をしており，長軸長71㎝，短軸長60㎝，検出面からの深さ８㎝を測る。遺構の方位は短辺の中点を結んだ線を基準とするとＮ17°Ｗを示す。周壁は最も遺存している部分で床面から６㎝ほどの高さしかなく，どのように立ち上がっていたか不明である。底面はＬⅢを掘り込んで形成されており，概ね平坦である。

本遺構からは，縄文土器片１点が出土したのみである。図12－４は後期中葉の所産と考えられる胴部資料で，非結束の単節縄文を羽状に施している。

本遺構は，住居跡群に隣接して造られた隅丸長方形の浅めの土坑である。遺構の時期は，出土遺物の特徴から縄文時代後期中葉の所産としておく。（笠　井）

４号土坑　ＳＫ04（図12，写真14・23）

本遺構は，調査区東部のＥ10・11グリッドに位置する。川２の河床に立地し，遺構の上を川２の堆積土ℓ１′が覆っていた。重複する遺構はなく，遺構の遺存状態は良好である。周辺には，東５～６ｍにＳＩ02・03，南東1.6ｍにＳＤ01が所在する。

遺構の検出面はＬⅢ上面で，川２の土層観察断面で存在を確認した。土層観察用断面が，ちょうど遺構の中央にかかっていたため，南側をさらに掘り下げて遺構を半截した。遺構内堆積土は２層に分かれた。ℓ１・２ともに西側から堆積土が流入している状況が観察できるため，自然堆積と判断した。

遺構の平面形は楕円形である。遺構の長軸長は下端で97㎝，短軸長80㎝，検出面からの深さ32㎝を測る。遺構の方位は長軸線を基準とするとＮ３°Ｅを示す。周壁は全体的に垂直か内傾しつつ立ち上がる。底面はＬⅢに形成されており，概ね平坦である。

本遺構からは，縄文土器片13点が出土した。縄文土器は大半が後期前葉の堀ノ内１式に比定される。これらのうち，特徴的な５点を図12に示した。

５～９は深鉢の胴部資料で，地文地に集合沈線で文様が描かれている。５・７は縦に並んだ盲孔をもつもので，５では盲孔の回りに斜位の集合沈線と重弧状沈線が，７では盲孔を基点に重弧状の集合沈線が施される。６・８は集合沈線のみが施されたもので，６は斜位，８は斜位と縦位に施されている。９は縦位に平行沈線が認められる。

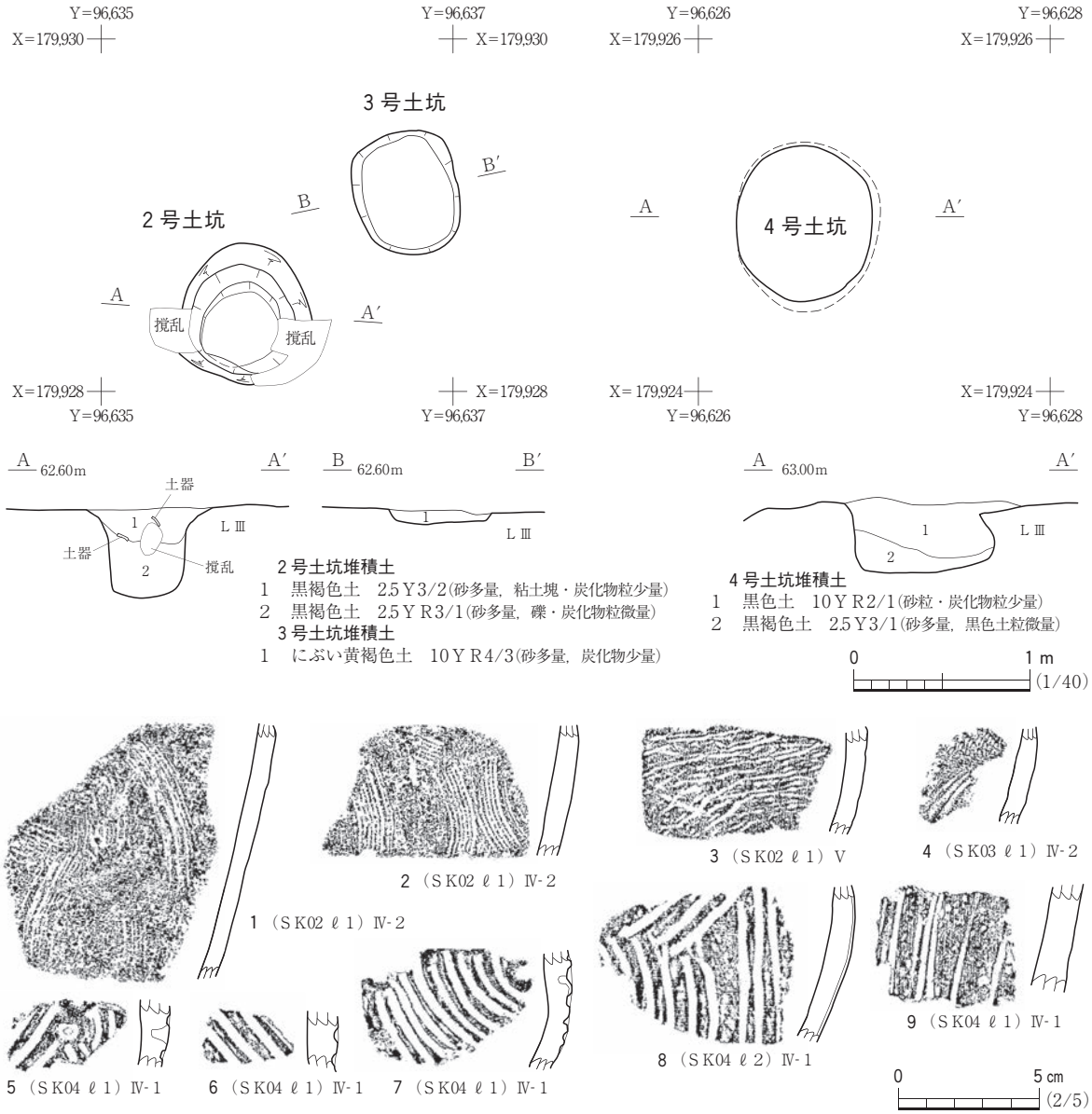


図12　２～４号土坑，出土遺物

本遺構は，周壁がオーバーハングするフラスコ状土坑のような形態をした土坑で，荒井遺跡で唯一微高地上に立地せず川２の河床に造られた遺構である。遺構の調査中から常に水が涌く状況であったが，遺構の使用時の状況は地下水位の状況も含めて不明である。遺構の時期は，縄文時代後期中葉の遺物を包含する川２ℓ１′に覆われていることから少なくとも後期中葉以前の所産であり，出土遺物の特徴から縄文時代後期前葉の所産と考えられる。　（笠　井）

第４節　土器埋設遺構・溝跡・性格不明遺構

荒井遺跡では，土器埋設遺構，溝跡，性格不明遺構が各１基ずつ検出された。土器埋設遺構および溝跡は住居跡，土坑と同じ１・２号河川跡に挟まれた南北に細長い微高地上に立地しており，先の遺構と有機的な関係をもっていたと推定される。性格不明遺構のみは，３号河川跡西側の微高地上に位置している。以下，土器埋設遺構，溝跡，性格不明遺構の順に説明する。

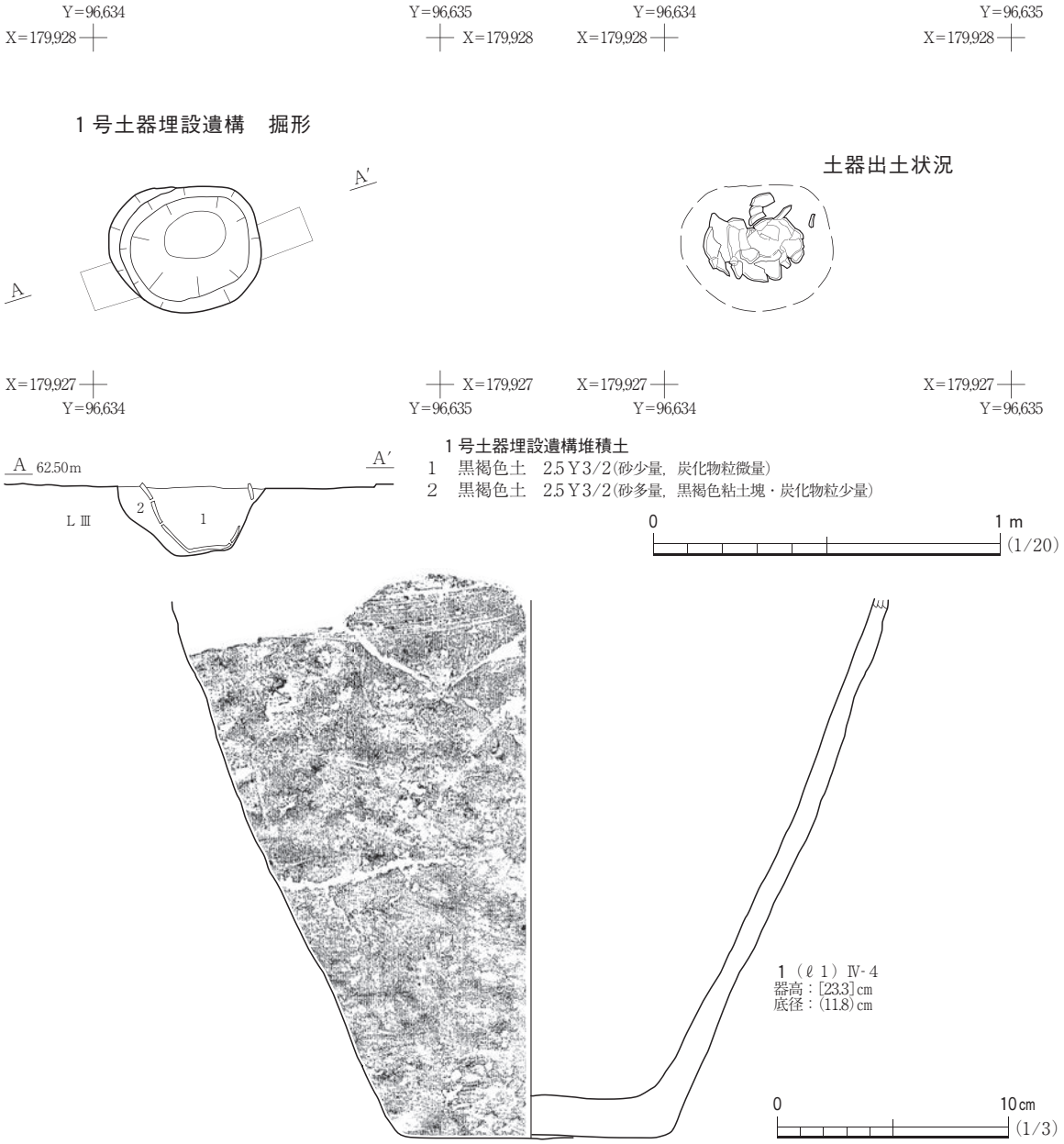


図13　１号土器埋設遺構，出土遺物

１号土器埋設遺構　ＳＭ01（図13，写真15・25）

本遺構は，調査区東部のＦ10グリッドに位置し，川１・２に挟まれた南北に細長い微高地上に立地する。重複する遺構はないが，南側にＳＩ02が隣接し，北1.8ｍにＳＫ01，北東1.2ｍにＳＫ02が所在する。

遺構の検出面はＬⅢ上面で，土器の輪郭とそれより一回り大きい黒褐色土の輪郭を確認した。土層断面の観察から土器内の堆積土ℓ１と掘形埋土ℓ２が異なることが判明した。埋設されていた土器は，縄文時代後期中葉の深鉢で，胴下部～底部部分が遺存していた。埋設土器は掘形の東寄りにほぼ正位に埋設されていた。

掘形は平面形が楕円形で，長軸長43㎝，短軸長37㎝，検出面からの深さ20㎝を測る。遺構の方位は短辺の中点を結んだ線を基準とするとＮ73°Ｅを示す。周壁は底面から50～70°の角度で円錐状に立ち上がっている。底面はＬⅢを掘り込んで形成されており，概ね平坦である。

本遺構からは，埋設土器である縄文土器１点が出土したのみである。図13－１は後期中葉～後葉の粗製深鉢と考えられる。底部から直線的に外傾する器形で，横位の引掻文が認められる。

本遺構は，住居跡群に隣接して造られた土器埋設遺構で，遺構の時期は，出土遺物の特徴から縄文時代後期中葉～後葉の所産としておく。（笠　井）

１号溝跡　ＳＤ01（図14，写真16・23）

本遺構は，調査区東部のＥ11・12グリッドに位置し，川１・２に挟まれた南北に細長い微高地の川２側の縁に立地する。重複する遺構はなく，北西1.6ｍにＳＫ04，東約４ｍにＳＩ03・04が所在する。溝の南東側の肩に石皿と考えられる平石が置かれており，少なくともこの面までは削平を受けていないと考えられるため，浅い遺構であるが，遺存状態は比較的良好である。

遺構の検出面は川２ℓ１上面およびＬⅡ上面で，黒褐色土の細長い輪郭を確認した。南北２カ所に土層観察用ベルトを設定して掘り下げ，堆積土を調べた。堆積土は２層に分かれた。堆積状況から，ℓ１は流入土の自然堆積，ℓ２はＬⅡに近いことから壁の崩落土と判断した。

遺構はほぼ南北方向に延びており，長さ3.56ｍ，幅87㎝，検出面からの深さ16㎝を測る。遺構の方位は両端の中央を結んだ線を基準とするとＮ５°Ｅを示す。両肩は底面から30～35°の角度で緩やかに立ち上がっている。底面はＬⅢに形成されており，北側は断面が台形で，南側は断面がＵ字形である。全体的に北側へ緩やかに下っている。

本遺構からは，縄文土器片１点と石器１点が出土した。縄文土器は後期中葉の加曾利Ｂ式土器に比定される。図14－１は深鉢形土器の胴部資料と考えられる。横位の単節縄文帯を細く浅い沈線で区画している。２は石皿である。板状礫の一面を磨面としている。

本遺構は，川２東岸の縁に掘り込まれた浅い溝状の遺構である。遺構の時期は，出土遺物の特徴から縄文時代後期中葉の所産としておく。（笠　井）

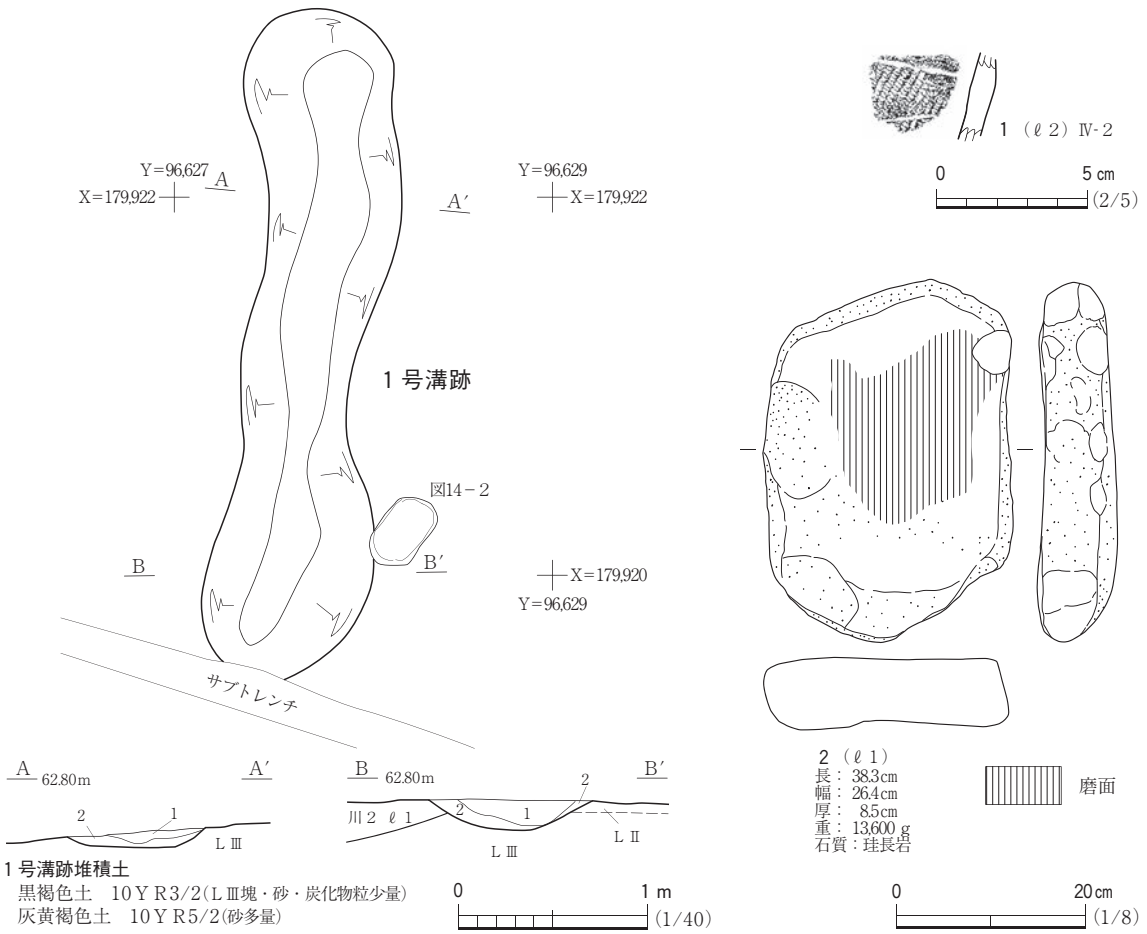


図14　１号溝跡，出土遺物

１号性格不明遺構　ＳＸ01（図15，写真17・23・24）

本遺構は，調査区東部のＡ８，Ｂ８グリッドに位置し，川３西岸の微高地上に立地する。遺構の西側は調査区外となるが，25ｍほどの距離に赤柴遺跡の川４が所在する。重複する遺構はないが，遺構東側および南側に後世の水路等による撹乱を受けているほか，遺構上面が水田耕作に伴い削平されているため，遺構の遺存状態は悪い。

遺構の検出面はＬⅢ上面で，黒褐色土の半円形の輪郭を確認した。遺構の遺存状況に合わせＴ字に土層観察用ベルトを設定し，掘り下げを行った。堆積土は２層に分かれた。堆積状況から，ℓ１・２ともに流入土の自然堆積と判断した。

本遺構は中央部分が弱くくぼみ，その上に堆積土が遺存していたもので，明瞭な掘り込みや周壁の立ち上がりが認められない。このため平面形および規模は不明である。遺構の規模は遺存値で，南北1.8ｍ，東西２ｍ，検出面からの深さ10㎝を測る。底面はＬⅢに形成されており，底面の東寄りには，平面形が隅丸長方形と推測される窪地がある。窪地の規模は長軸長120㎝，短軸遺存長63㎝，検出面からの深さ15㎝を測る。

本遺構からは，縄文土器片14点と石器１点が出土した。縄文土器は，いずれも後期中葉の加曾

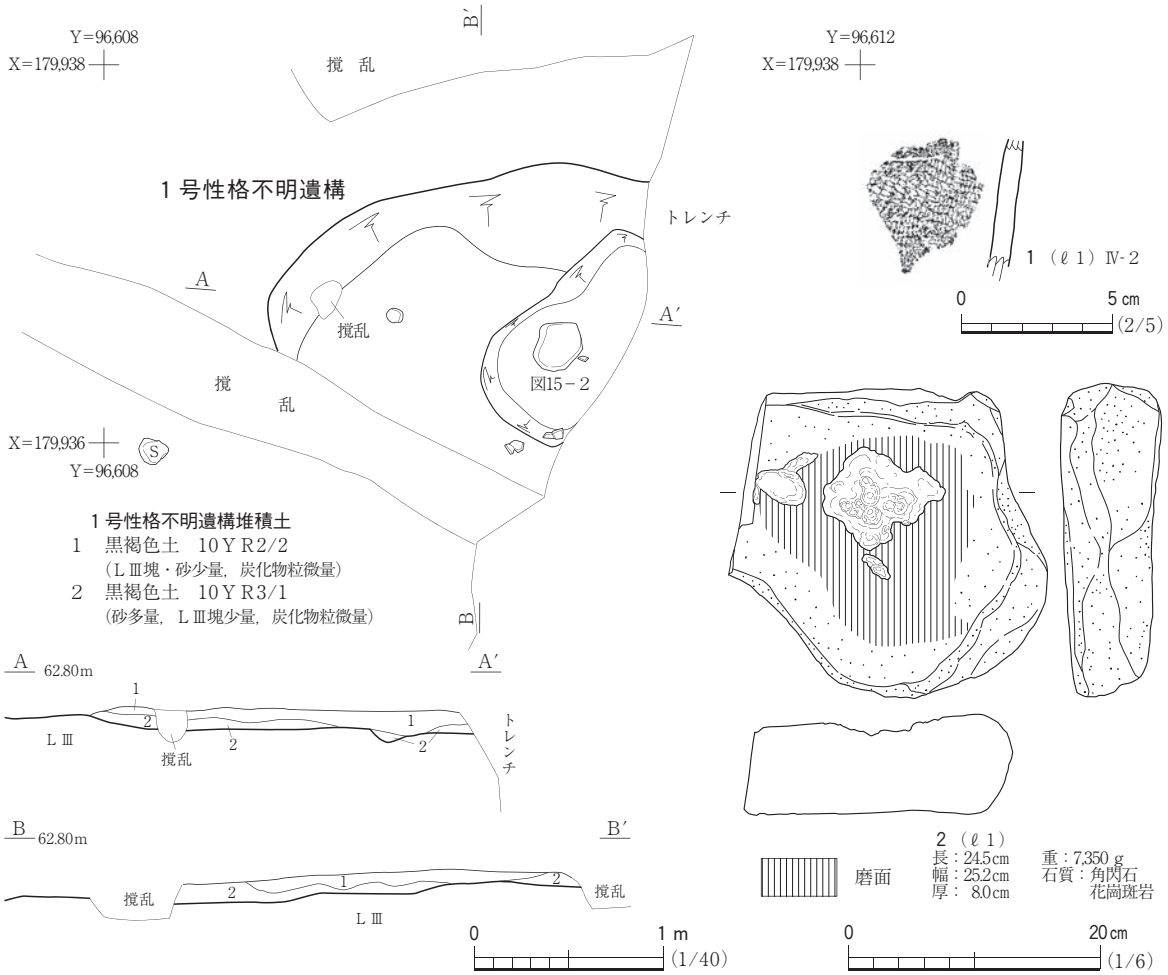


図15　１号性格不明遺構，出土遺物

利Ｂ式に比定される。細片が多く，図示し得た１点を掲載した。図15－１は深鉢形土器の胴部資料と考えられる。単節縄文帯を細く浅い沈線で区画している。２は石皿である。板状礫の一面を磨面としている。磨面中央には敲打痕が認められる。

本遺構は，他の遺構から離れて川３のさらに西側に位置する遺構である。明瞭な掘り込みは観察できなかったが，周囲とは異なる堆積土が堆積することから遺構と判断した。遺構の時期は，出土遺物の特徴から縄文時代後期中葉の所産としておく。　（笠　井）

第５節　河　川　跡

本遺跡では，調査区内の３カ所で河川跡を検出した。いずれの河川跡からも縄文時代の遺物が出土しており，本遺跡で確認した当該期の遺構群と関わりが深いと考えられる。人為的な遺構ではないが，本遺跡を理解する上で欠くことができない痕跡であることから，１節を設けて報告する。河川跡は検出順に１～３号河川跡とし，略号をそれぞれ川１・川２・川３とした。

１号河川跡　川１

痕　　跡（図16，写真20）

本河川跡は調査区境のＥ13，Ｆ12・13，Ｇ６～９・11～13，Ｈ６～７グリッドに位置し，調査区の東境を蛇行しながら概ね南から北へ延びている。河川跡の東側が調査区外となっているため，調査区内では西側の一部を確認したにすぎない。北側でＳＩ01と，南側ではＳＩ04と重複し，いずれの遺構も壊している。

検出面はＬⅡおよびＬⅢ上面で，砂を多量に含む黒褐色土の輪郭を確認した。河川跡内の堆積土は３層に分層でき，堆積状況からいずれも自然の水性堆積土と判断した。堆積土上層は有機質を多く含む土層で，北部では暗褐色のℓ１，南部では黒褐色のℓ１′が堆積していた。両土層の上下関係は調査区内では重なる部分が認められないため不明である。下層のℓ２は砂礫と黒褐色土の互層で，河川跡の全域に堆積していた。

調査区内における本河川跡の規模は北側で長さ18.6ｍ，南側で14.5ｍを確認した。河川幅は東側が調査区外であることから不明であるが，遺存値では北側で2.3ｍ，南側で4.0ｍを測る。断面形は確認できる部分では北側が逆台形，南側がＵ字形である。底面は起伏があり，南側では中央に高まりが認められる部分がある。底面の標高は南側で62.3ｍ，北側で61.6ｍあり，南側が70㎝ほど高いため，川の水は北流していたと考えられる。

遺　　物（図16，写真26）

本河川跡からは，縄文土器片86点，石器54点が出土した。縄文土器は，後期前葉～中葉にかけての所産が出土しており，いずれも小破片で互いに接合するものが認められない。これらのうち４点を掲載した。

図16－１～３は縄文時代後期前葉の深鉢形土器の口縁部資料である。１は口縁部が屈曲して内傾する器形で，口縁端部と屈曲部外面に粘土紐を貼付けて隆帯状に肥厚させている。波状口縁の波頂部には半捻りした漏斗状の突起がついており，この突起と屈曲部外面が橋状把手で結ばれている。橋状把手の接合部には盲孔が施され，両脇には弧状の貼付文を添付している。貼付文と屈曲部の隆帯に沿って沈線が施されている。２は外反する器形で，口縁端部が垂直につまみ上げられている。これも波状口縁の波頂部と考えられ，横方向からの盲孔を施された小突起が付加されている。３は漏斗状の突起をもつ波状口縁の波頂部付近の資料で，突起外面から口縁端部に沿って「ハ」の字形に深く，太い沈線が巡る。４は後期後葉の所産と考えられる粗製深鉢の胴部資料で，外面に引掻文が横位に施されている。

ま と め

本遺構は，調査区の最も東側を流れる河川跡で，調査区境に位置することから，全貌をつかむことができなかった。河川跡の時期は，縄文時代後期中葉の住居跡を壊していることから，少なくともこの時期以降の所産と考えられる。本遺跡では最も新しい河川跡である。（笠　井）

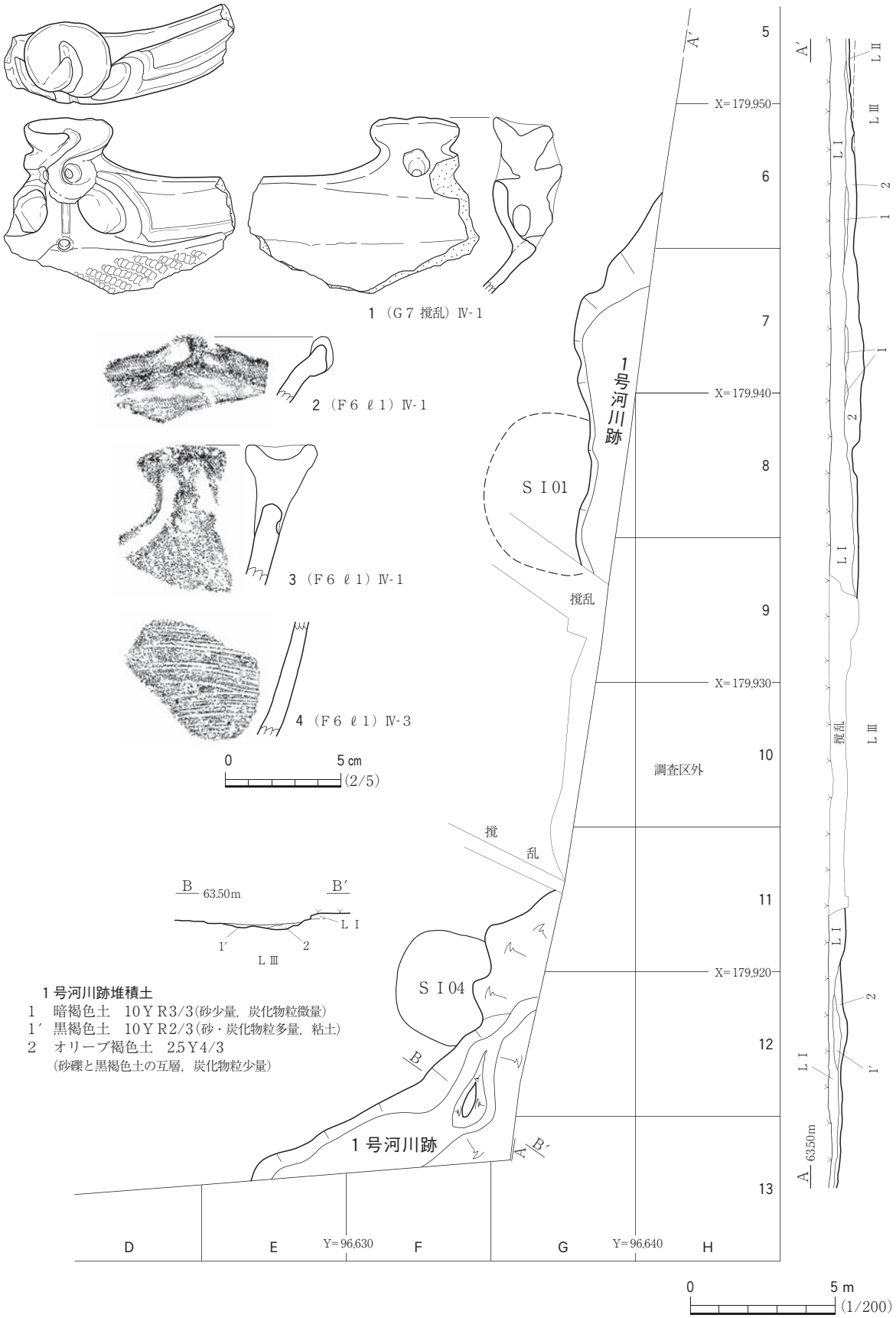


図16　１号河川跡，出土遺物

２号河川跡　川２

痕　　跡（図17，写真18～20）

本河川跡は，調査区東部のＣ10・11，Ｄ10～12，Ｅ４～12，Ｆ４～10，Ｇ９グリッドに位置する。調査区南部のＤ12，Ｅ12グリッド付近とＣ10・11グリッドの境界付近の２カ所から始まり，北東方向へ延びて，Ｅ10グリッドの辺りで北へ方向を変え，そこからはほぼ一直線に北方へ向かって調査区外へ延びている。ＳＫ01・04，ＳＤ01と重複し，これらよりも古い。また，西側から北東方向へ延びてくる３号河川跡とＥ７グリッドで合流しており，堆積土の観察では本河川跡が新しい。河川跡の検出面はＬⅢ上面で，遺物を多量に含む黒褐色土の長大な帯状範囲を確認し，適宜土層観察用ベルトを設定して掘り下げと記録を行った。

堆積土は３層に分層でき，堆積状況からいずれも自然の水成堆積土と判断した。ℓ１′は河川跡の南側にのみ堆積する黒褐色土層で，主に縄文時代後期中葉以降の遺物を包含している。ℓ１は河川跡全域に堆積する黒褐色土層でℓ１′よりも黒味が強く，砂粒をあまり含んでいない。縄文時代後期前葉～中葉の遺物を含むが，後期前葉の遺物が圧倒的に多い。ℓ２は最下層の暗褐色土で，砂粒を多量に含む。河川跡のほぼ全域で検出されたが，層厚は薄く，遺物の出土量も少ない。縄文時代後期前葉の遺物が出土する。

調査区内における本河川跡の規模は長さ43ｍ，幅3.5～7.8ｍ，深さは最深部で40㎝を測る。断面形は幅の広いＵ字形である。底面は平坦で起伏は少ないが，南端のみ二股に分かれこの部分のみ深くなっている。現在でもこの部分から水が涌いてくることから，湧水点であった可能性が高い。底面の標高は概ね南側が高く，北側が低いことから，川の水は北流していたものと考えられる。

遺　　物（図18～38）

本遺構からは，縄文土器片10,857点，土製品６点，石器263点が出土した。土器は，縄文時代後期前葉～中葉にかけてのもので，特に後期前葉の土器はＥ９，Ｆ９グリッド以北でおびただしい量が出土した。これらのうち，縄文土器168点，土製品６点，石器20点を掲載した。

Ⅳ群１類土器（図21～34，写真27～33）

図21，図22－１～８・11・12は，綱取Ｉ式に比定できる深鉢形土器で，口縁部無文帯の下端を隆帯のみで区画するものである。図21－１～３は器形復元したもので，１・２は胴上部から口縁部にかけて内湾気味に直立する器形であり，３は胴部最大径を上位にもち，口縁部無文帯で弱くくびれて口縁端部が外反する器形である。１は平縁で，区画隆帯上には盲孔をもつ円形貼付文と刺突列が加えられている。口縁部無文帯を縦位に分割する貼付文は直線的で，無文帯の区画隆帯から枝分かれしたように斜めに延びており，貼付文上端には上方からの盲孔と沈線が付加されている。なお，本資料は地文を含む胴部文様が施されていない。２・３は波状口縁で，波頂部直下には，盲孔と沈線を付加されたＣ字状貼付文が認められる。胴部文様は，２では波頂部に対応する位置に２本の縦位沈線を垂下させた同心円文が施され，この間に，蕨手状文が施されている。なお，同心円文

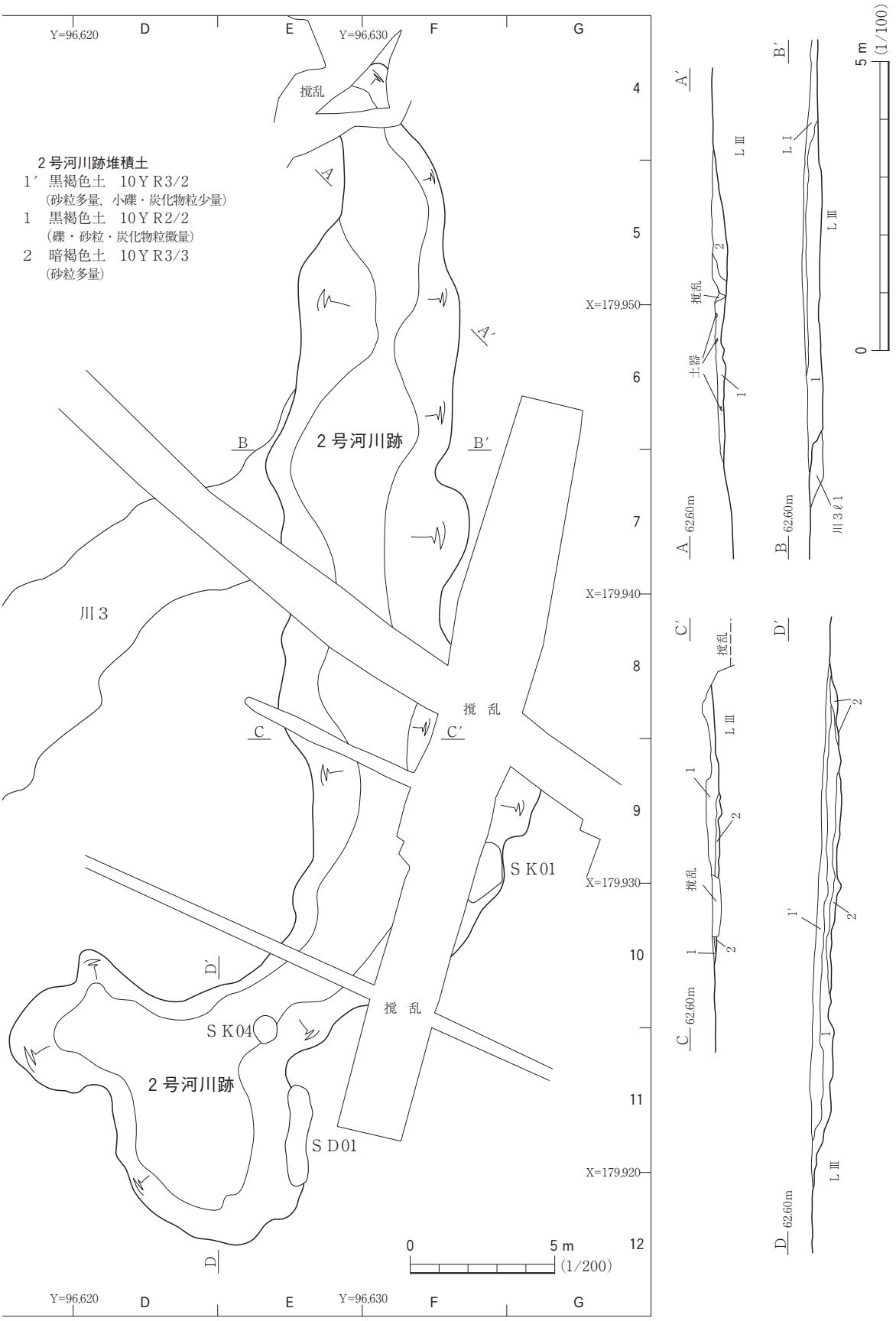

Y=96,620
D
E
Y=96,630
F
G
4
5
6
7
8
9
10
11
12
X=179,950
X=179,940
X=179,930
X=179,920
撹乱
２号河川跡堆積土
1′ 黒褐色土　10ＹＲ3/2
(砂粒多量，小礫・炭化物粒少量)
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2
(礫・砂粒・炭化物粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3
(砂粒多量)
A
A′
B
B′
２号河川跡
川３
撹　乱
C
C′
ＳＫ01
D′
ＳＫ04
２号河川跡
ＳＤ01
D
0
5 m
(1/200)
A′
ＬⅢ
撹乱
土器
A
62.60m
B′
ＬⅠ
ＬⅢ
B
62.60m
川３ℓ1
5 m
(1/100)
C′
撹乱
ＬⅢ
撹乱
C
62.60m
D′
ＬⅢ
D
62.60m

図17　２号河川跡

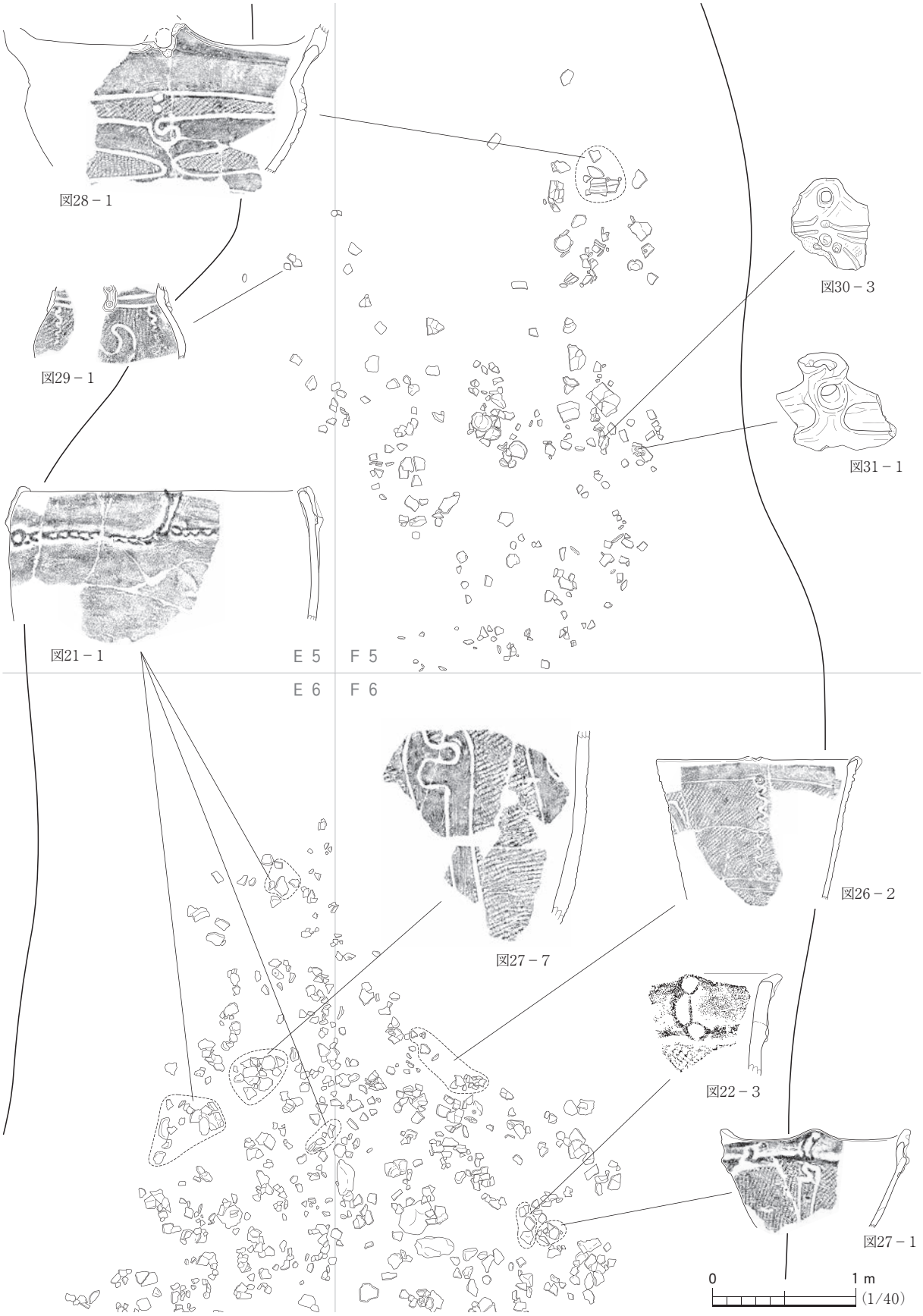


図18　２号河川跡遺物出土状況（１）

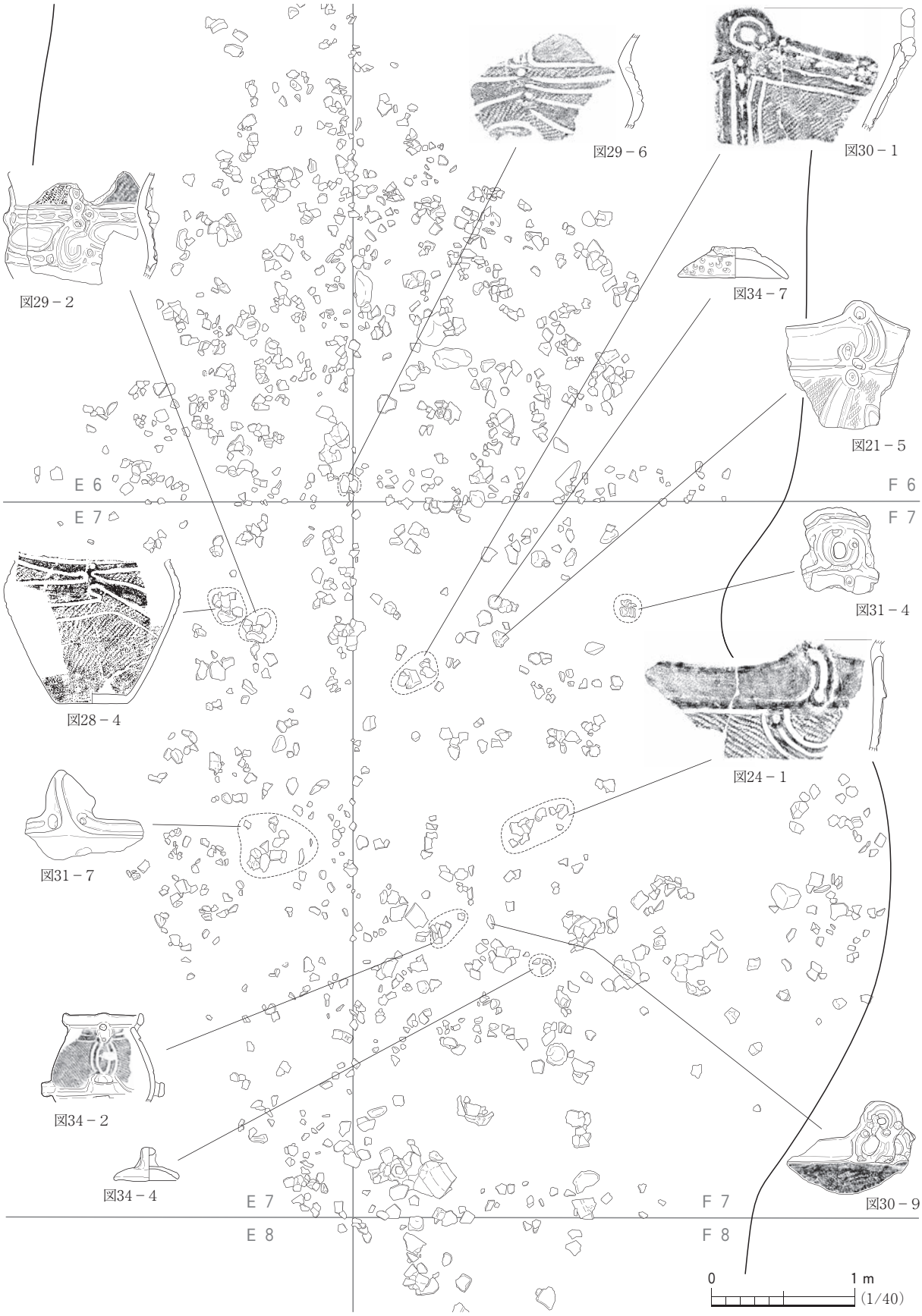


図19　２号河川跡遺物出土状況（２）

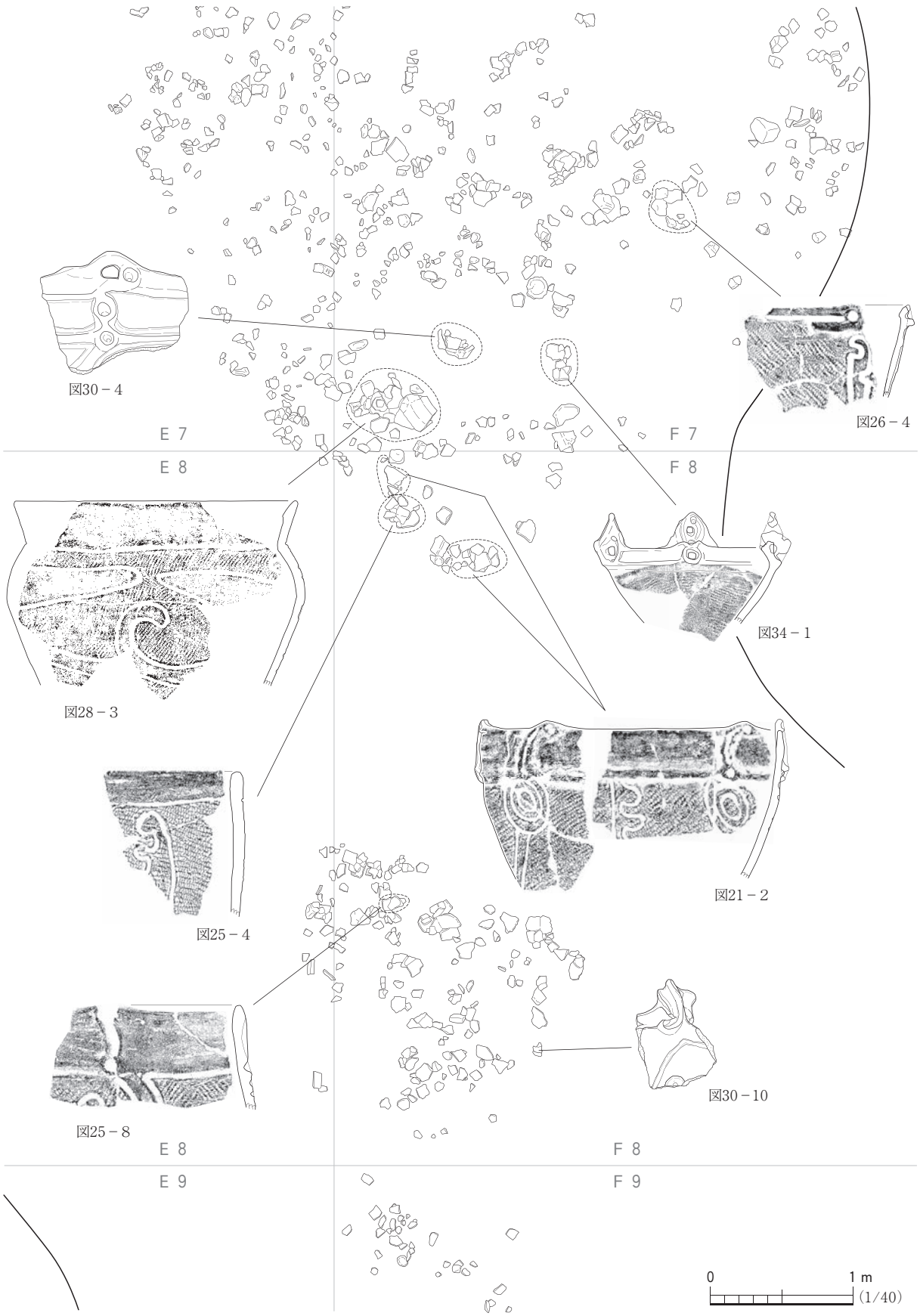


図20　２号河川跡遺物出土状況（３）

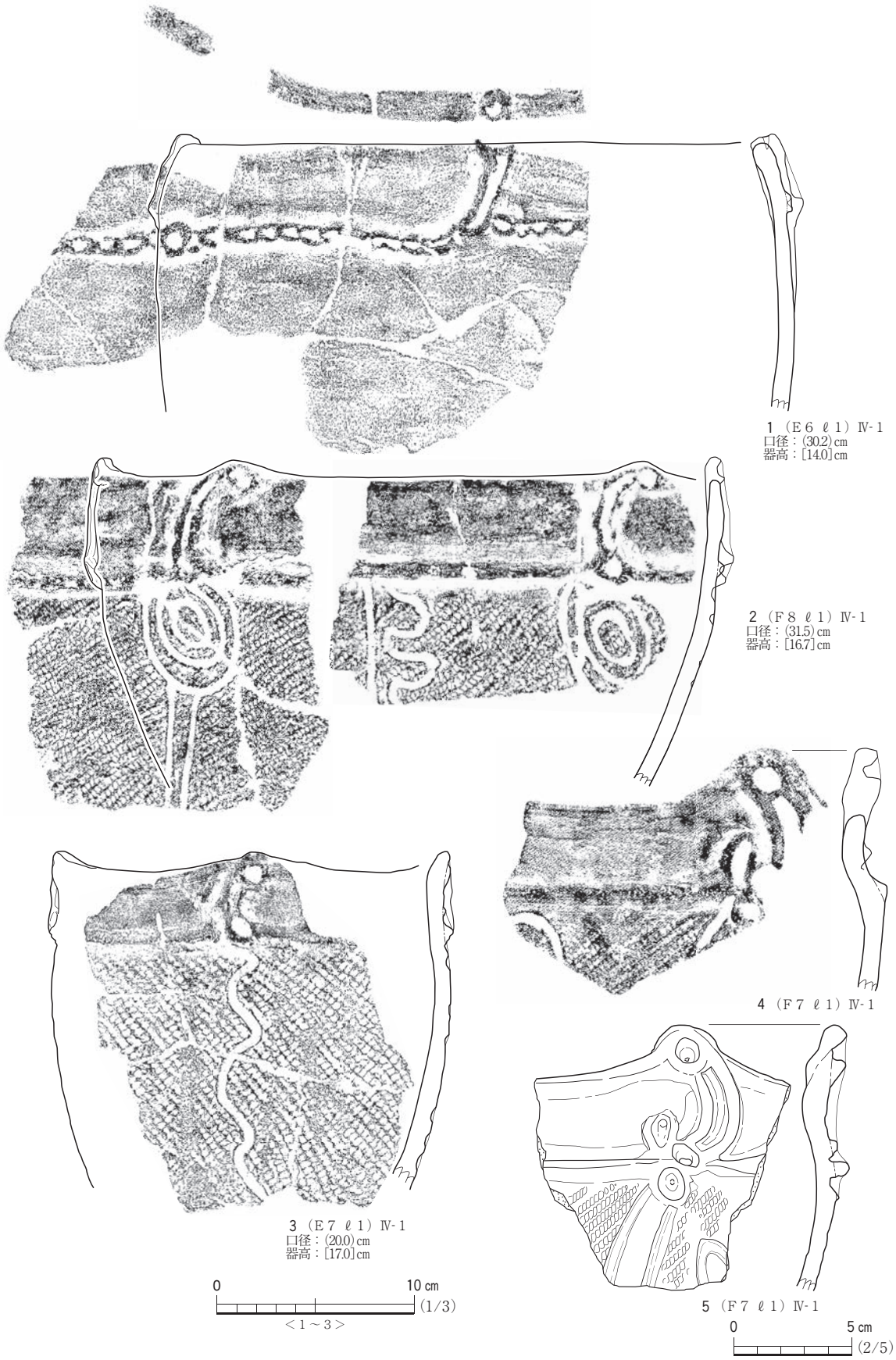


図21　２号河川跡出土縄文土器（１）

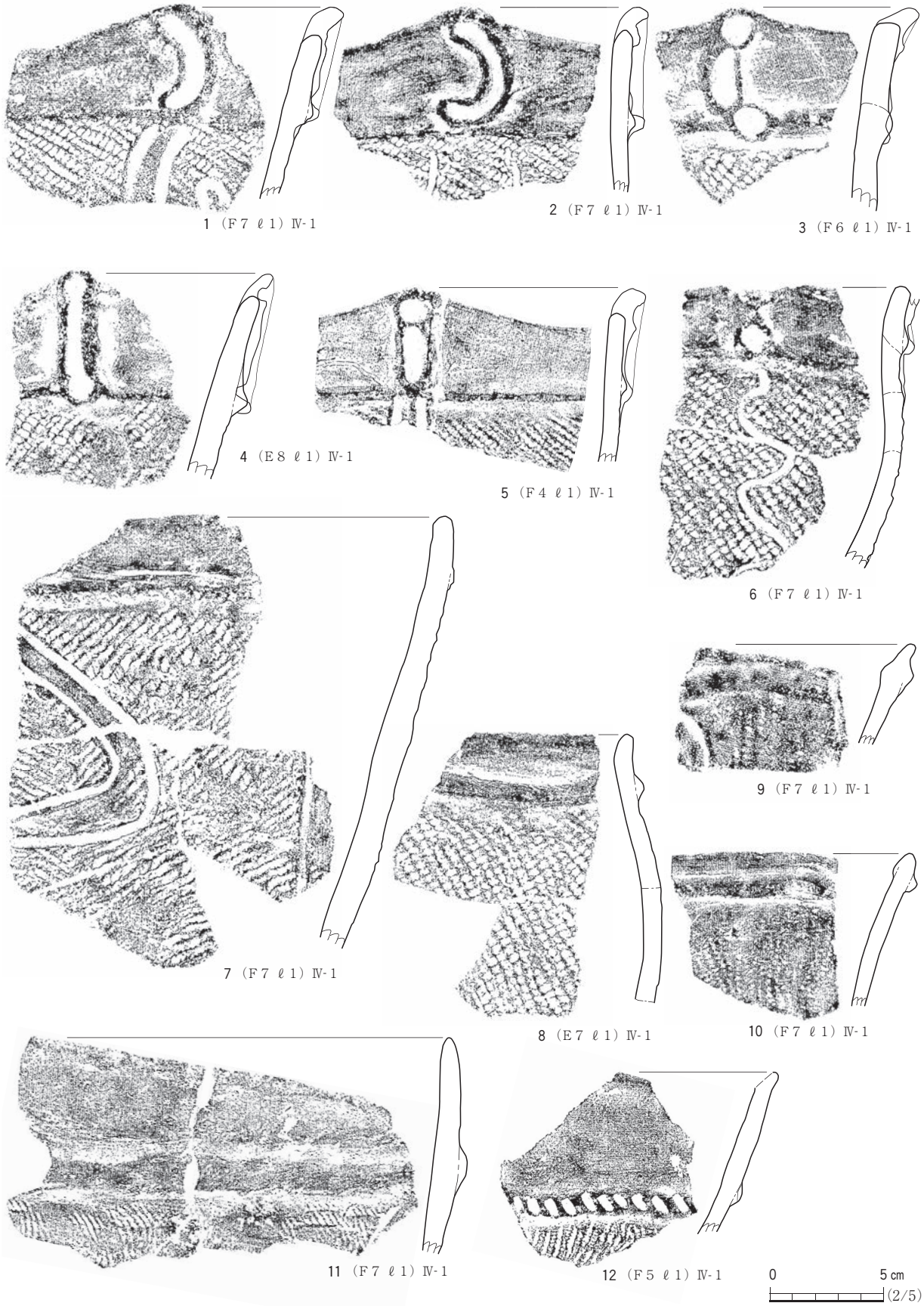


図22　２号河川跡出土縄文土器（２）

と蕨手状文の地文は磨り消されていない。３では，波頂部に対応する位置には波長の長い蛇行状沈線が施され，図22－６も同様の構成である。

図21－４・５，図22－１～６は口縁部資料で，波状口縁の波頂部外面に貼付文が認められる資料である。Ｃ字状貼付文下端の盲孔から，さらに弧状の貼付文が付加され，釣針状になっているもの(図21－４・５)，Ｃ字状貼付文で，両端に盲孔があり，盲孔間を沈線が結ぶもの(図22－１～３)，貼付文が直線的なもの(図22－４～６)が認められる。図22－３は盲孔が大きめで，弧の湾曲が弱い。また同図５では下端の盲孔が省略されている。

図22－７・８・11・12は口縁部無文帯に貼付文が認められない部分の資料で，７・８は無文帯の幅が狭く，12は区画隆帯上にキザミ目が施される。

胴部文様は，図22－１ではＪ字状文，同図５では垂下する平行沈線，同図７では弧状の平行沈線が認められ，沈線内は地文が磨り消されている。同図９・10は，無文帯下端の区画隆帯ではなく，口縁部外面直下の隆帯で，図26掲載資料のような，直線的に開く器形の深鉢形土器に伴うものであろう。

図23・24は，綱取Ⅰ式に比定される深鉢形土器で，口縁部無文帯下端を隆帯と，隆帯に沿うように施された沈線で区画するものである。隆帯を縁取る沈線は，隆帯の下端のみに引かれるもの(図23－１～３・７，図24－１～４・６～10)と，隆帯の上下に引かれるもの(図23－４～６，図24－５)が認められる。また，図24－８では隆帯上に横位の沈線が付加される。

図23－１は器形復元したもので，口縁部を欠く。内湾気味に立ち上がる器形で，資料上端に区画隆帯と隆帯の下を縁取る沈線が認められる。隆帯下の沈線からは，舌状部を垂下させた磨消縄文によるＵ字状文と蛇行状沈線が施されている。同様の構成は図24－４でも認められる。

図23－２～７，図24－１～４・６・８は無文帯に貼付文を付加された口縁部資料である。両端の盲孔を共有して対向するＣ字状貼付文が楕円状に配置され，さらに区画隆帯との境目付近に盲孔が付加されるもの(図23－２)，典型的なＣ字状貼付文で，基本的には貼付文の両端に盲孔がつけられ，盲孔間を沈線で結んでいるもの(図23－３～７，図24－１～３・６・８)，Ｃ字状貼付文両端の盲孔が省略されたもの(図23－７，図24－８)，Ｃ字状貼付文上端の盲孔の横にさらに盲孔を付加したもの(図24－６)が認められる。図24－８については，無文帯幅が狭く，貼付文がＣ字状というよりは，弧状になっている。これらの胴部文様は，隆帯下端の区画沈線が，波頂部下で直角に折れて２条の平行する蛇行状沈線となって垂下するもの(図23－２)，垂下する蛇行状沈線(図23－４，図24－10)，垂下する平行沈線(図23－３)，Ｊ字状文(図23－５・６，図24－２・３)，蕨手状文(図23－７・図24－３)，盲孔と沈線を付加された半弧状文(図24－１)，隆帯状の弧状文から派生する内部の地文を磨り消した平行沈線文(図24－９)等が認められる。

図24－５・７は口縁部無文帯に貼付文が認められない部分の資料である。５では隆帯上に盲孔を伴う円形貼付文が付され，直下に蕨手状文が認められる。

図25は綱取Ⅱ式に比定できる深鉢形土器で，口縁部無文帯の下端を沈線のみで区画するもので

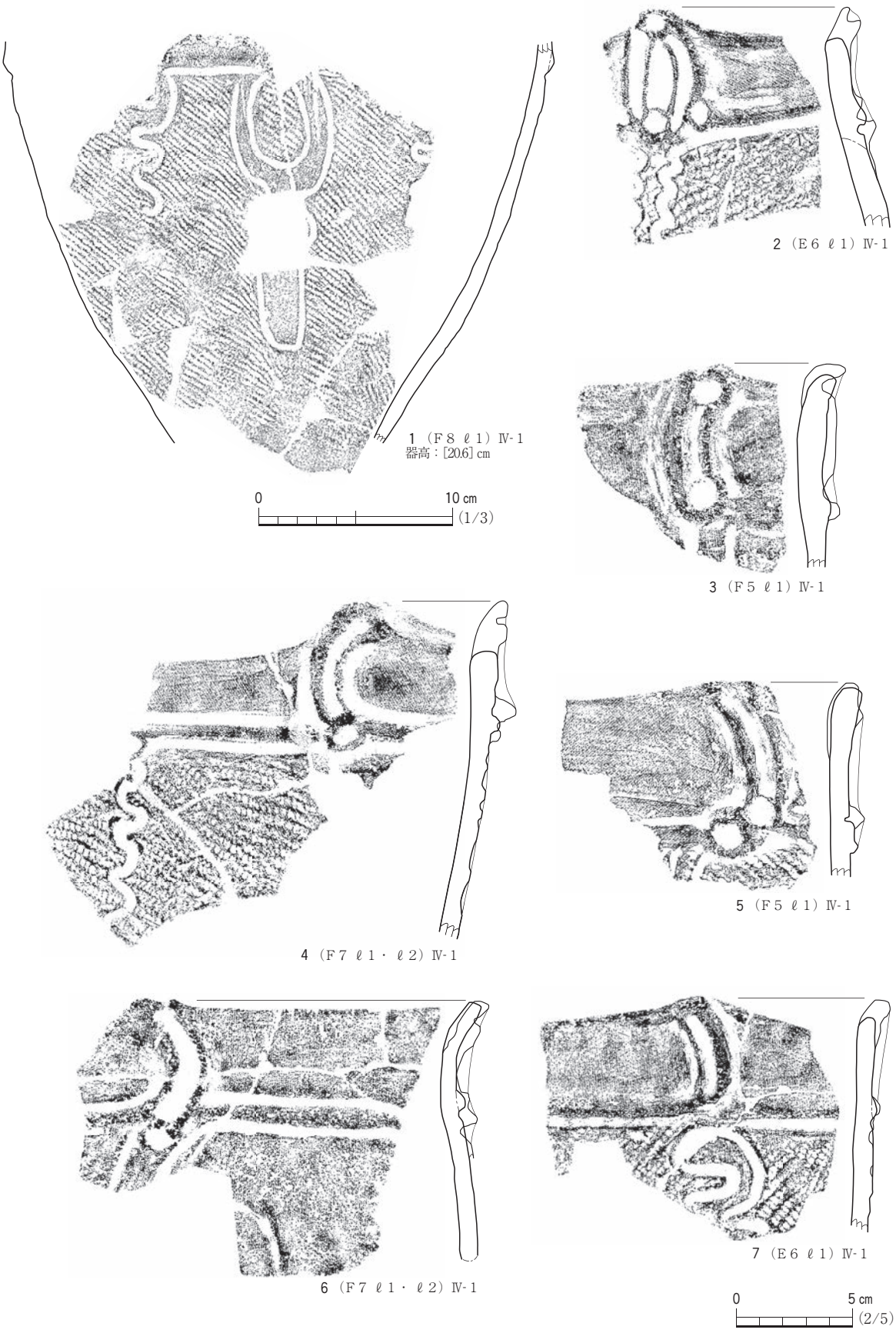


図23　２号河川跡出土縄文土器（３）

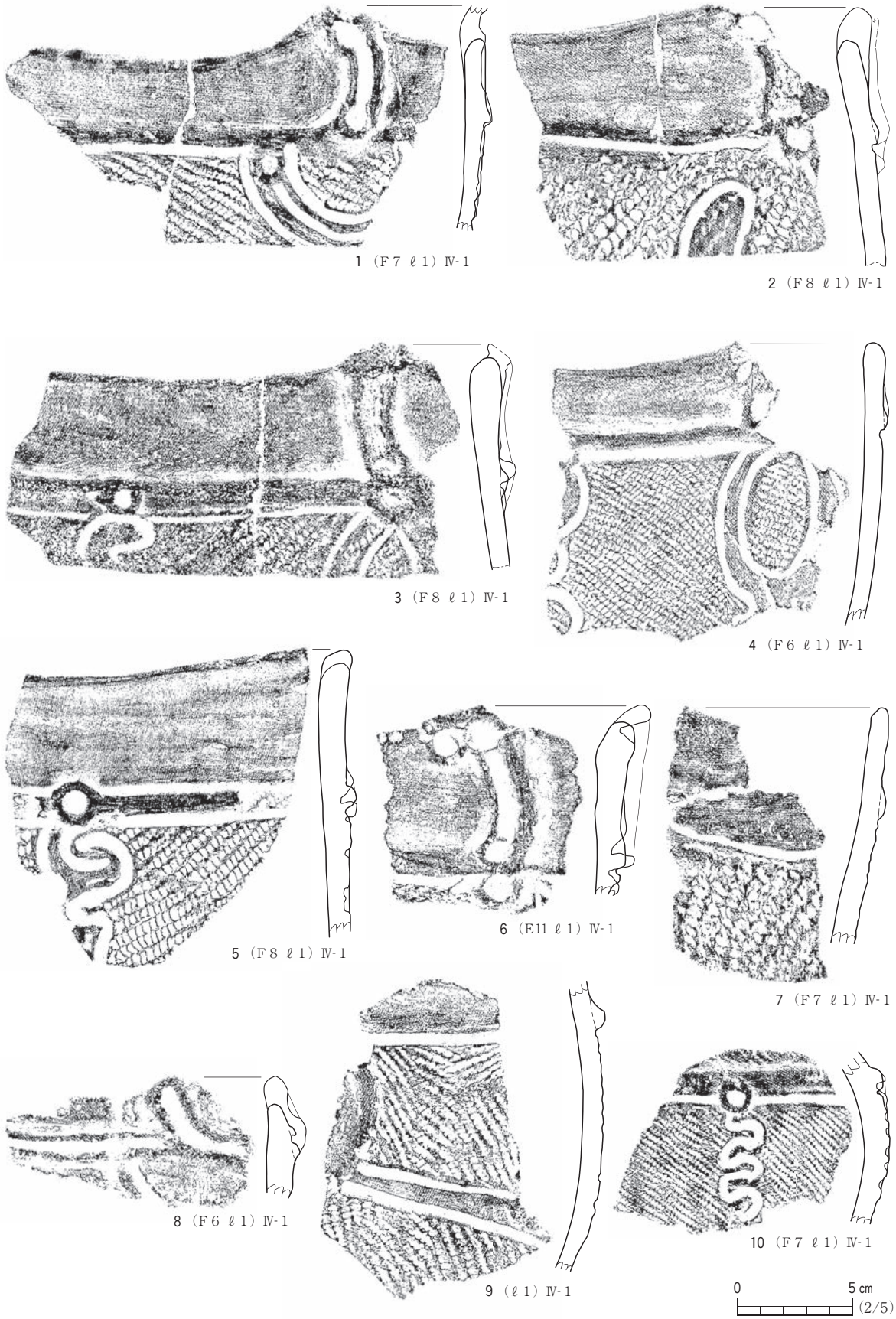


図24　２号河川跡出土縄文土器（４）

ある。１～３は器形復元したもので，胴部が弱く張り，口縁部が内湾ないし直立する器形である。１は波状口縁をなし，口縁部無文帯である部分に幅広い沈線で描かれた横位の楕円文が施される。波頂部外面の楕円文に挟まれた部分には，貼付文ではなく，３個の盲孔が縦位に並ぶ。胴部文様は，波長部に対応する部分で両脇から延びる文様帯区画が直角に折れて平行線となり垂下し，平行線間の地文が磨り消されている。２は平縁の小型品で，口縁部無文帯の区画沈線から，１列の刺突文が垂下している。３も平縁の資料で，口縁部無文帯の区画沈線から沈線間を磨り消されたＵ字状文が垂下する。

図25－４～８は口縁部資料である。４・７は平縁で，胴部文様に蕨手状文が描かれている。４では無文帯下端の区画沈線と，蕨手状文は分離しているが，７では蕨手状文が無文帯内に貫入し，入組文化している。また４では蕨手状文内に地文が残るが，７では磨り消されている。５・８は波状口縁で，直線に近いＣ字状貼付文が添付され，胴部には磨り消しのＪ字状文が施される。５ではＪ字状文と区画沈線が別に描かれているが，８では一体の文様として描かれている。６は無文帯下端の区画沈線が波状になるもので，大型の盲孔が付加されている。

図26も綱取Ⅱ式に比定できる深鉢形土器で，底部から口縁部へ直線的に開く器形のものである。１～３は器形復元したものである。１は平縁で，口縁部が強く開く器形である。口縁部外面に粘土帯を貼り付け，折返し口縁状に成形し，横位沈線を付加している。口縁端部には突起の痕跡があり，盲孔の一部とみられるくぼみが観察できるが，突起本体は欠損している。胴部には内部の地文を磨り消した４条の平行沈線と，蛇行状沈線が垂下する。２は平縁の資料である。口縁の端部形状は内削ぎ状で，端部に三角形状の小突起をもつ。口縁部と胴部に無文帯をもち，沈線で区画している。口縁部無文帯下端の沈線上には盲孔が付加され，そこから胴部無文帯まで垂下する蛇行状沈線と地文が磨り消されたＪ字状文が認められる。３は全体を復元できた資料で，平底の底部から平縁の口縁部へ直線的に開く器形である。口縁部外面には端部直下とやや下部に平行沈線が引かれ，無文帯を形成し，口縁部内面は肥厚して段をなしている。胴部文様は無文帯下端の区画沈線から３条の平行沈線が垂下し，その両脇に()状に配置された倒卵文が認められる。この倒卵文は下端が開放されており，沈線の内側の地文は磨り消されている。

図26－４～８は口縁部資料である。４・５が平縁，６～８は波状口縁をなす。４・７は口縁端部に粘土帯が付加されて，１のような横位沈線を付加された折返し口縁をなし，内面は肥厚して３のように段を形成する。４には口縁部外面に盲孔が付加され，７には口縁の波頂部下に矢印状の貼付文が付加されていた痕跡が認められる。５・８はほぼ同様の文様構成である。沈線で区画された口縁部無文帯をもち，貼付文の名残と考えられる盲孔とそれを結ぶ沈線が付加される。胴部文様は下部の盲孔を基点として，無文帯下端の区画沈線と連結した平行沈線が()状に垂下する。６では，波頂部外面と内面に盲孔が付加されている。外面の盲孔を基点に，無文帯下端の区画沈線と考えられる沈線が施されている。胴部文様は，波頂部下に逆Ｕ字形の弧状沈線に囲まれた蕨手状文が施され，弧状沈線と蕨手状文の間の地文は磨り消されている。

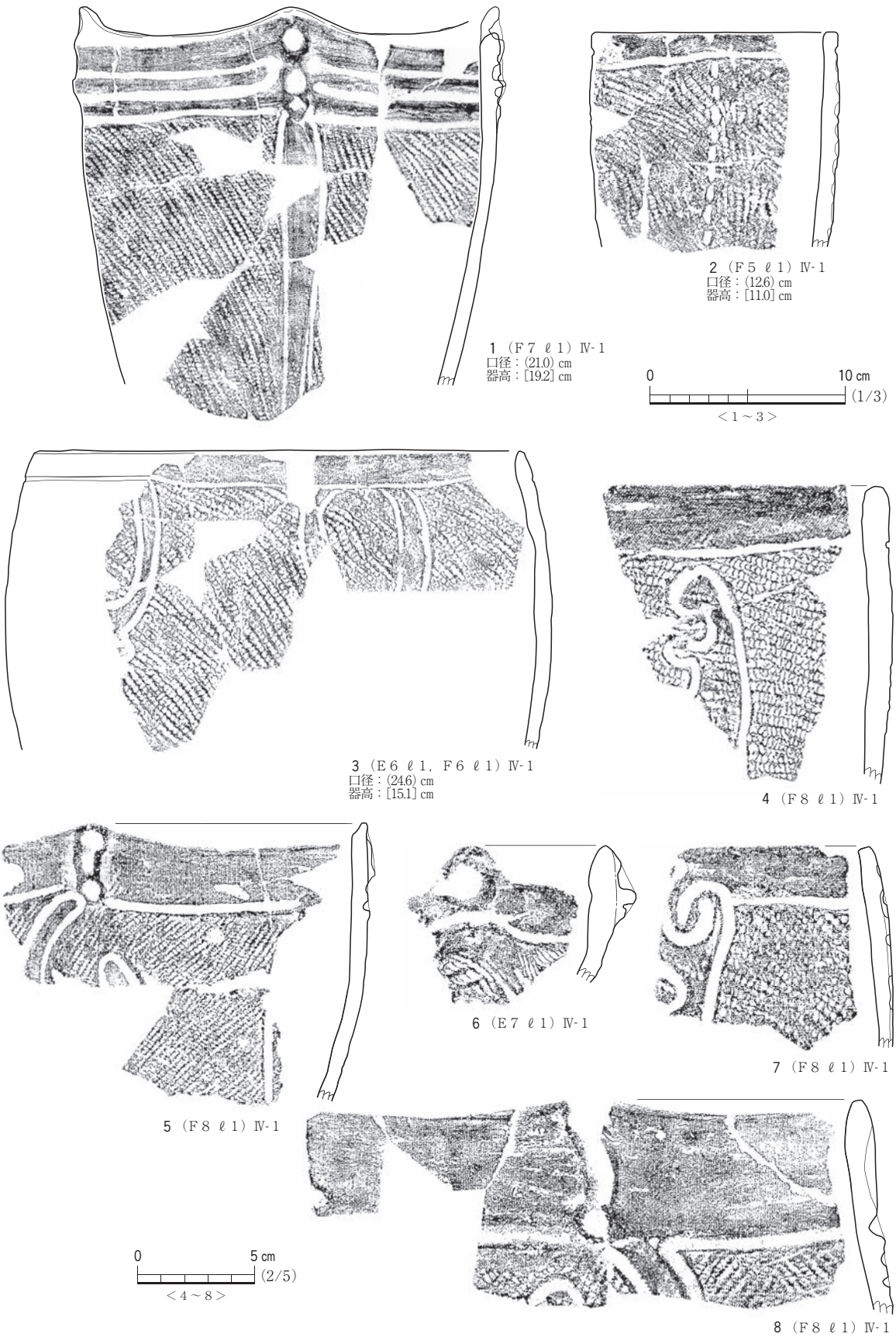


図25　２号河川跡出土縄文土器（５）

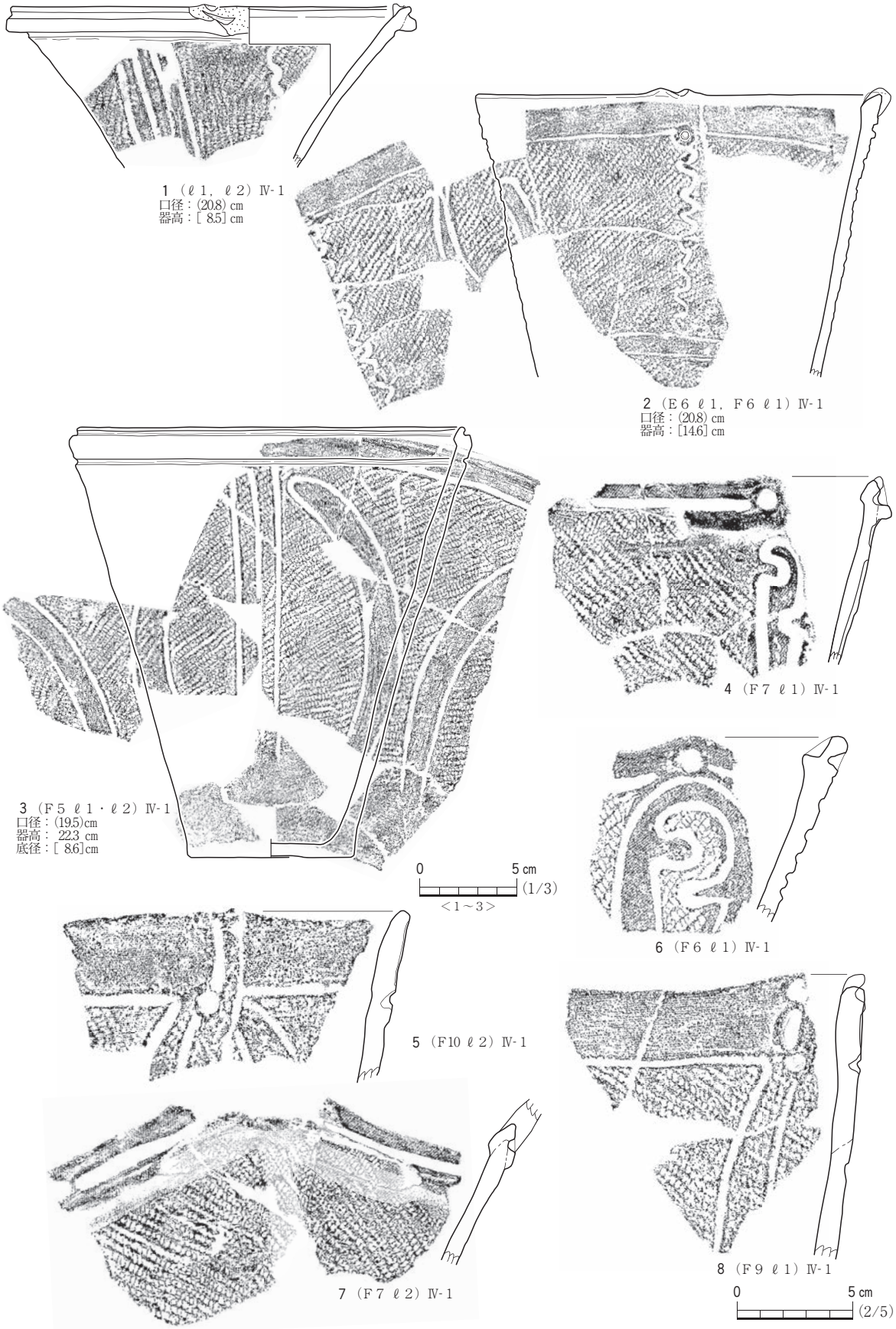


図26　２号河川跡出土縄文土器（６）

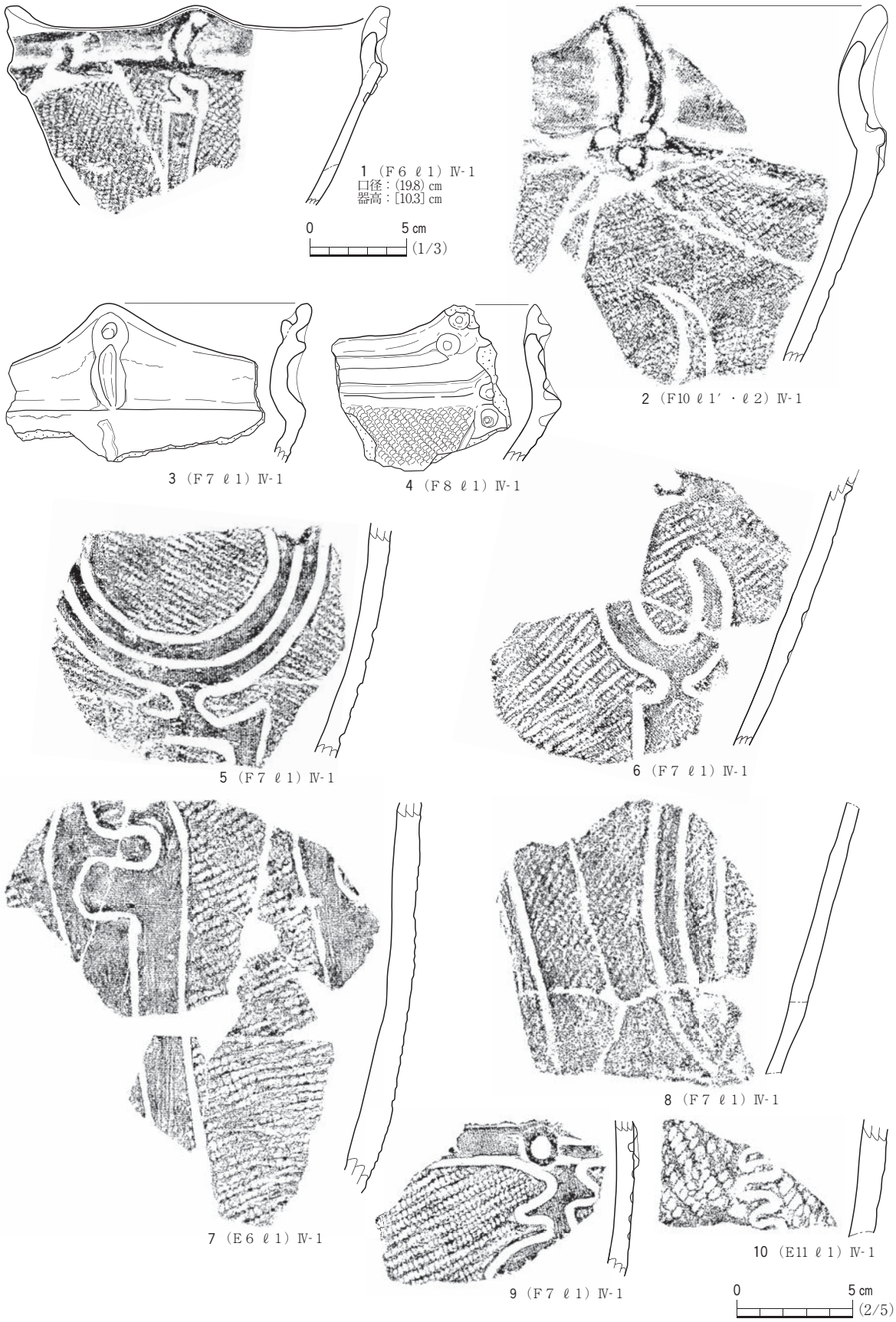


図27　２号河川跡出土縄文土器（７）

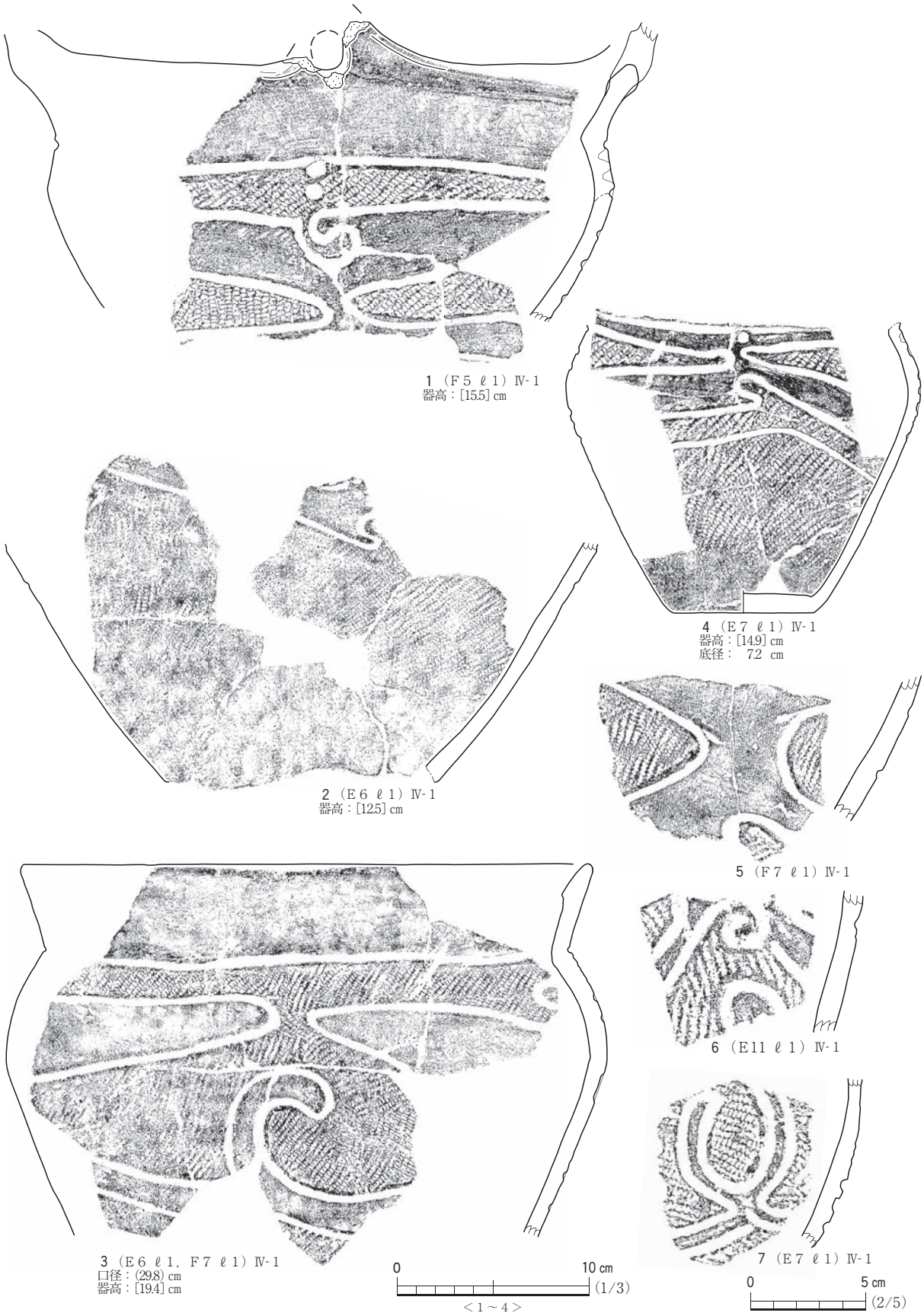


図28　２号河川跡出土縄文土器（８）

図27－１～４は，底部から直線的に開く胴部が口縁部無文帯下端で屈曲し，口縁部が「く」字状に外反する器形の深鉢形土器である。すべて波状口縁で，口縁部無文帯下端が肥厚し，無文帯側に段が認められるのが特徴である。１は器形復元したもので，波頂部直下に盲孔と沈線が付加されたＣ字状貼付文が認められ，胴部には内部の地文が磨り消された蕨手状文が施されている。２～４は口縁部資料で，２ではＣ字状貼付文の下部に３個の盲孔が付加されており，地文を磨り消されたＪ字状文が垂下する。３では，直線状の貼付文下に縦位の沈線が認められ，４ではＣ字状貼付文の一部と，その上部左と直下に付加された盲孔，口縁部外面を縁取る沈線が認められる。いずれの資料も口縁部無文帯下端に隆帯をもたないが，Ｃ字状貼付文の形状から，綱取Ⅰ式に比定される。

図27－５～10は，深鉢形土器の胴部資料と考えられるものである。５は地文が磨り消されたＵ字状文と，そこから垂下する剣先状文で，Ｕ字状文の内側には盲孔と孤状沈線が施される。６は盲孔から垂下する剣先状文の付いたＪ字状文で，文様内の地文は磨り消されている。７・８は，内側の地文が磨り消された蕨手状文で，７が文様上部の資料，８が下部の資料とみられる。９は盲孔を伴う無文帯区画沈線から派生する平行沈線が表現された蛇行状文で，やはり文様内の地文は磨り消されている。10は蛇行状沈線が垂下している。

図28は算盤玉状の胴部から，口縁部で内面に稜を形成しつつ頸部で屈曲する鉢形土器で，胴部文様が横方向に展開するのが特徴である。文様が沈線により構成されることから，綱取Ⅱ式に伴うと考えられる。１～４は器形復元したものである。１は口縁が波状を呈する。波頂部には正面からの貫通孔が認められる。口縁部は無文で，胴上部に文様帯を形成する。文様帯の上部は沈線区画の単節縄文帯で，波頂部に対応する位置には盲孔２個が縦位に付加され，Ｊ字状文が縦位に垂下する。無地文部を挟んだ文様帯下部には，三角形に近い横長の楕円文がＪ字状文の真下に隙間をあけるように横位に並んでおり，さらにその下部に無地文部を挟んで，文様帯下端の区画沈線が認められる。２は胴下部の資料で，連結部分にＳ字状のクランクをもつ横長のＮ字状沈線で胴部文様帯下端を区画しており，この沈線よりも下部には地文の単節縄文が施されている。３は平縁の資料で，口縁端部の断面形状は内削ぎ状である。胴部文様は１の文様帯の地文施文部と無地文部を反転し，さらに天地を回転したような文様構成をとる。４は底部から胴上部までの資料で，１と２の胴部文様を足した文様構成である。異なるのは文様帯上部の垂下するＪ字状文が盲孔となり，文様帯下端の区画沈線のさらに下に山形の沈線が付加されていることである。

図28－５～７は胴部資料である。５には，三角形に近い横長の楕円文の一部とみられる文様が施されており，６では頂点が渦文状になる山形沈線と，弧状文で区画した充填縄文帯が施され，７では，上部がＵ字状になるＸ字状モチーフが沈線で描かれ，沈線の内側の地文を磨り消している。

図29は胴部が球形で，頸部が屈曲して口縁部が外反する器形の深鉢形土器で，屈曲部に横位の平行沈線および沈線区画の単節縄文帯が施されることから，綱取Ⅱ式に伴うと考えられる。１・２は，屈曲部を含む胴部資料で，器形復元したものである。１は屈曲部に横位の平行沈線とＣ字状貼付文が認められ，胴部には垂下するＪ字状文と蛇行状沈線が交互に展開する。２は屈曲部に連続する短

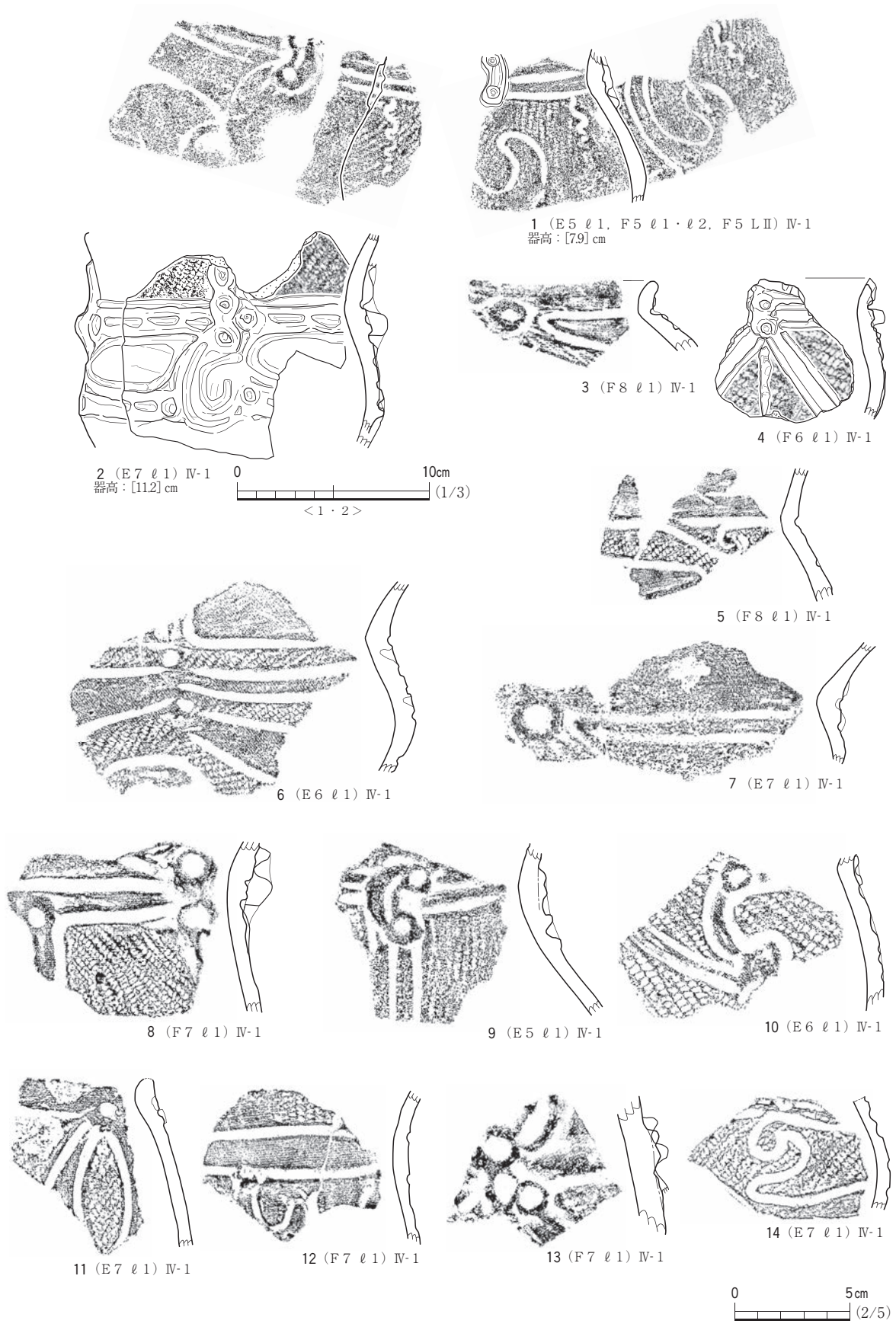


図29　２号河川跡出土縄文土器（９）

沈線を付加された隆帯が巡り，隆帯上に盲孔が並ぶ直線的な貼付文が認められる。胴部文様はＪ字状文およびＪ字状文下部を横方向に連結する隆帯で構成される。隆帯上には盲孔・短沈線・沈線が施される。

図29－３・４は口縁部資料で，ともに短い口縁部が外反する。３では屈曲部に盲孔が付され，逆三角形状に近い横長の楕円文が横位に展開し，４では屈曲部に平行沈線と盲孔２個を縦位に付加された楕円形の貼付文が付され，そこから縦位沈線と「ハ」の字状に開く平行沈線が垂下する。

図29－５～14は胴部資料で，盲孔と沈線を付加されたＣ字状貼付文をもつもの（９・13），盲孔を付加された楕円形の貼付文をもつもの（８），盲孔のみのもの（６・７・10・11）があり，屈曲部には，横位の平行沈線を引くもの（７・９），沈線区画の単節縄文帯を巡らすもの（５・６・８・12）が認められる。胴部文様は，平行沈線を縦位に垂下させるもの（８・９），「ハ」字状に垂下させるもの（７・13），()状に垂下させるもの(11)，Ｓ字状で横位に展開するもの(10)，沈線区画の単節縄文帯を横位展開するもの（６），横位沈線からＪ字文が垂下するもの(12)，退化し横位に展開する蕨手状文をもつもの(14)が認められる。

図30・31は口縁部の突起が特徴的な破片資料を集めた。このため，綱取Ⅰ・Ⅱ式が混在する。

図30－１は円盤状の突起で，中央に貫通孔があり，右下に盲孔が付され，そこから貫通孔と同心円状に沈線が巡る。口縁部無文帯は沈線区画で，突起直下で直角に折れて列点を付加された垂下する平行沈線となる。仙台湾の影響が認められる資料である。２～５はわずかに隆起した突起の中央に貫通孔があり，内面上方から盲孔が付されたものである。上方からの盲孔は２では貫通孔の右側，３では真上，４・５では左側に付加されている。４の突起部直下には盲孔を縦位に付加された楕円形の貼付文が認められる。６はより複雑になったもので，突起中央に貫通孔があり，貫通孔上部と左脇に上方から盲孔が付され，Ｓ字状の粘土帯で縁取られる。さらに外面に環状の小突起，内面に盲孔と沈線をもつ貼付文が付加される。７は円形の突起の中央に漏斗状の貫通孔があり，貫通孔の周囲を，口縁部無文帯下端の区画隆帯から派生してきた隆帯で宙返りするように取り巻いている。貫通孔を取り巻く隆帯上には刺突列が加えられている。８は貼付文が巨大化して口縁部から突出したもので，上部中央に貫通孔があり，貫通孔の上下に盲孔と()状の沈線が付加され，さらにその下に大きな盲孔が認められる。９は注口土器とみられるもので，１に似た円形の突起をもち，その下に橋状把手と()状に配置されたＣ字状貼付文が認められる。10は縦位の貼付文で，正面からみるとＳ字状をなし，横方向に貫通孔をもつものである。

図31－１は，波状口縁の波頂部に半捻りした漏斗状の突起がついており，突起正面には貫通孔が穿たれている。突起の下部には橋状把手があり，胴部上端の段と結ばれている。２は波頂部に逆三角形の突起がついており，中央には貫通孔と盲孔，両側面には盲孔と沈線が認められる。３は橋状把手上部が突出したもので，幅広の橋状把手上端に盲孔２個が付加され，正面には縦位の沈線が施されている。４は，漏斗状の突起と円盤状の突起が合体したような突起である。突起正面の中央には貫通孔があり，貫通孔の内外面は，盲孔と盲孔間を結ぶ沈線で縁取られる。突起上部は上方を

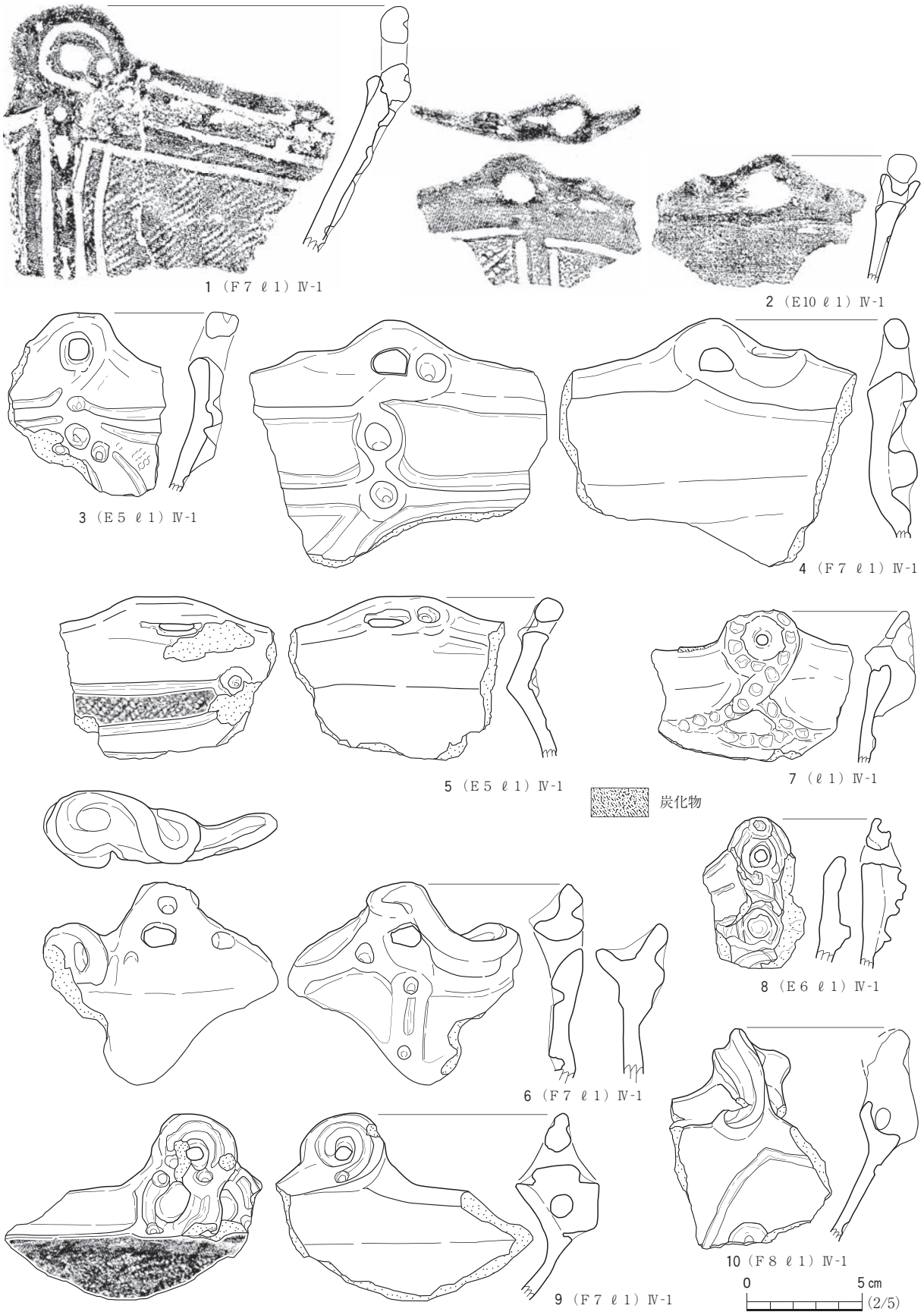


図30　２号河川跡出土縄文土器(10)

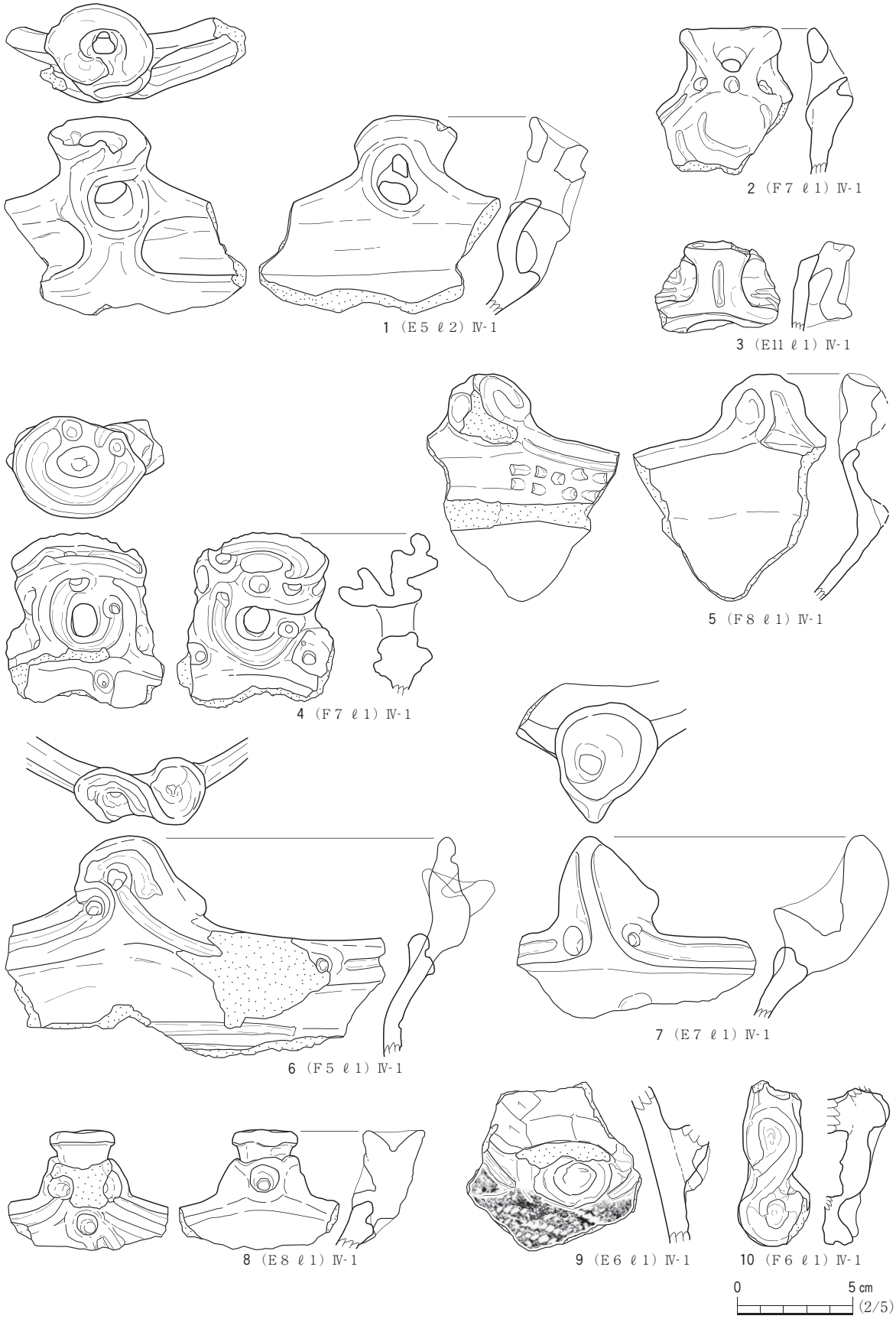


図31　２号河川跡出土縄文土器(11)

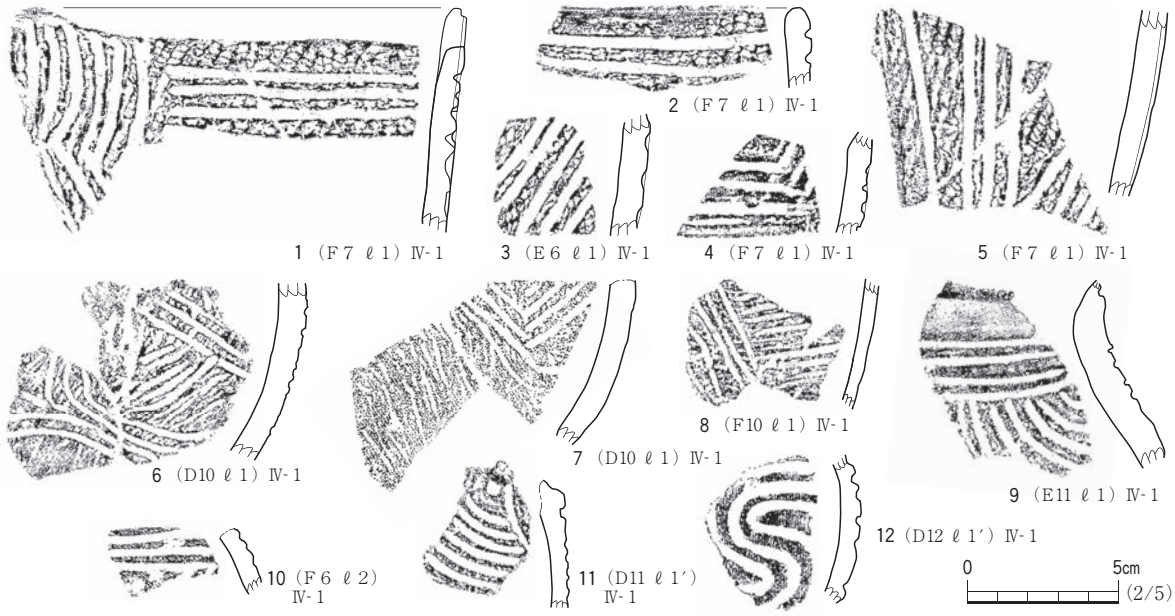


図32　２号河川跡出土縄文土器(12)

向いた漏斗状で，中央に盲孔が穿たれ，その周囲も盲孔と盲孔間を結ぶ沈線で縁取られている。５は正面に稜をなす突起で，正面の両脇と内面には浅い沈線と盲孔が付加される。正面中央と，胴部上端に剥離が認められることから，この間に橋状把手が存在した可能性がある。６は，波頂部正面に付く不整円形の突起と，その右側に並ぶ半捻りした漏斗状の突起から構成されている。正面の突起には外面やや上方から盲孔が穿たれ，漏斗状のものは真上から盲孔が穿たれる。７は正面にＣ字状貼付文に似た稜をもつ漏斗状の突起である。内面寄りの上方から逆円錐状の盲孔が穿たれ，漏斗の縁は外面側に高く尖る。８は上方へ突出する円筒状の突起で，上面に逆円錐状の盲孔があり，突起基部の外面に２個，内面に１個の盲孔が付加されている。９は両耳壺とみられる資料の把手基部であり，10はＳ字状の貼付文を付加された橋状把手である。

図32は多条の平行沈線で文様が構成される深鉢形土器で，堀ノ内１式に比定される。この類の資料は出土点数が少なく，器形復元できるものはない。１～５は単節縄文を地文とするもので，１・２は口縁部資料である。１・２の外面には横位の集合沈線が引かれ，小規模な波頂部外面に垂下する集合沈線が引かれる。３～５は胴部資料で，斜位・縦位・屈折する集合沈線が施されている。

図32－６～８は撚糸文を地文とするもので，斜位および弧状の集合沈線が認められる。

図32－９～12は無地文の資料で，９・10では横位沈線と縦位の弧状沈線，11では円孔を基点とした同心円状，12ではＳ字状の多条沈線が認められる。９～12の資料に関しては三十稲場式の影響が認められる。

図33は，地文のみの深鉢形土器および底部資料である。１・10は加曾利Ｂ式に伴う可能性もあるが，地文が羽状構成をとらないことから，本類とした。１は器形復元したもので，あまり開かずに，胴部から口縁部が直立する器形で，口縁端部に三角形の突起を有する。外面には原体を斜位に回転させた単節縄文が地文として施されている。２は胴部資料で直線的に開く器形をしており，資料上半

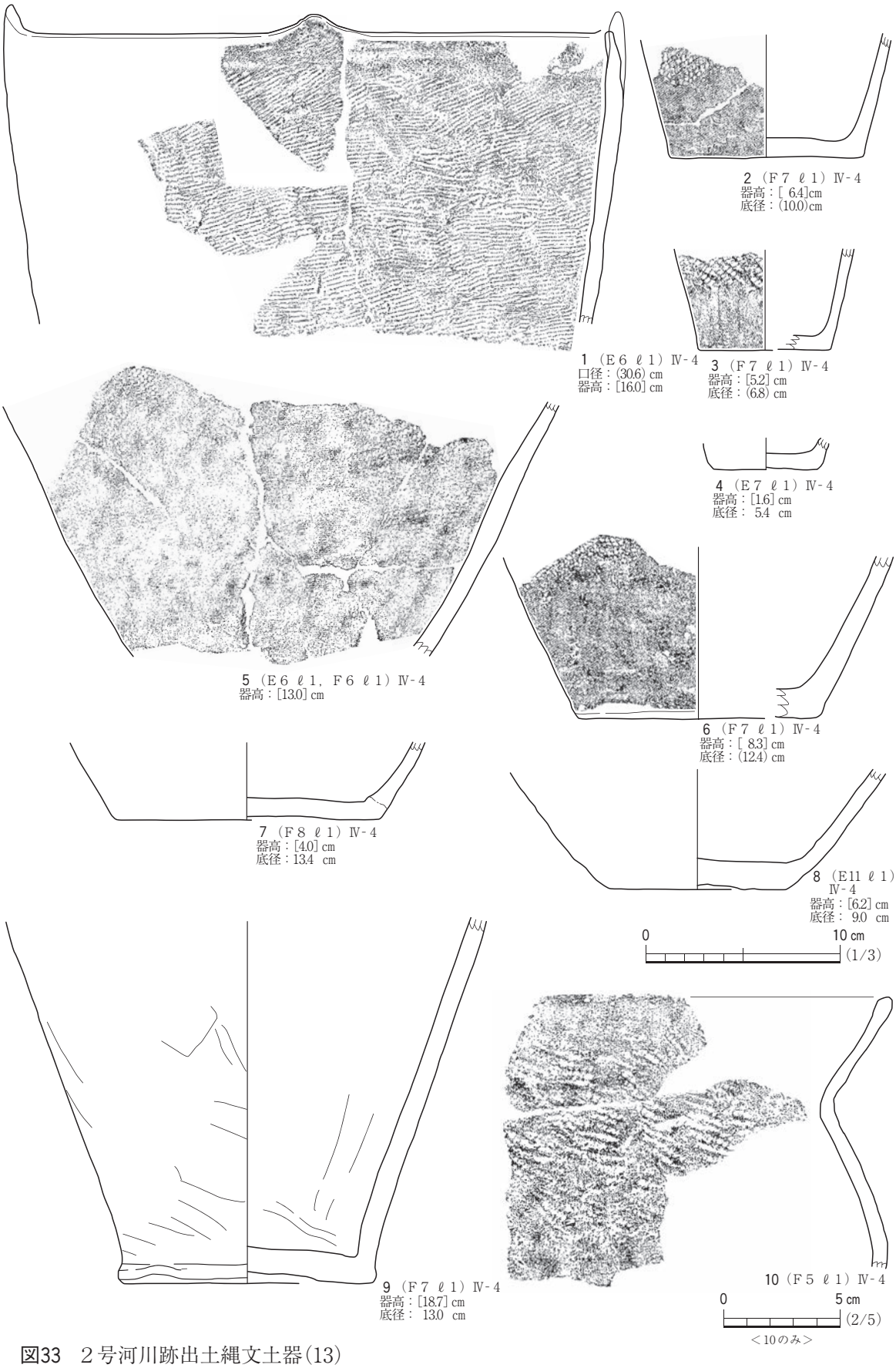


図33　２号河川跡出土縄文土器(13)

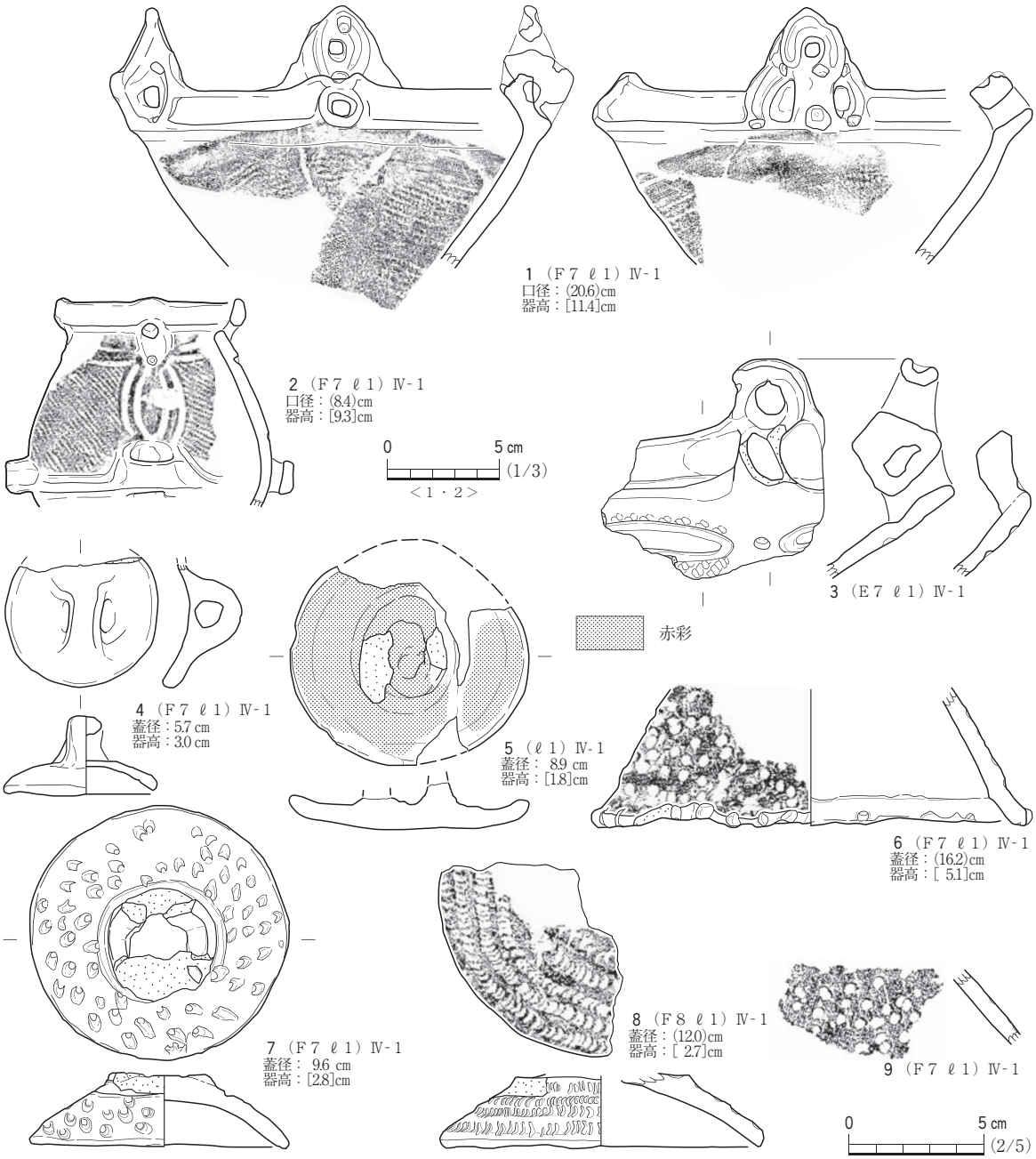


図34　２号河川跡出土縄文土器(14)

部に原体を斜位に回転させた単節縄文が地文として施されている。

図33－３～９は底部資料で，４は小型品である。基本的に平底の底部から直線的に弱く外傾する器形である。７・８はやや内湾気味で外傾の度合いが強く，加曾利Ｂ式に伴う可能性がある。３・５・６の上部には単節縄文が認められる。

図33－10は口縁部から胴上部にかけての資料で，頸部が「く」字状に屈曲する器形である。口縁部上端付近は無地文で，その下には原体縦位回転の単節縄文が施される。

図34は，注口土器，壺形土器，蓋である。１・３は注口土器である。１は器形復元したもので，強く開く体部が，上端で内側へ屈曲する器形である。屈曲部外面は肥厚して口縁部との境に明瞭な

段を形成し，口縁部外面は凹んで無文部となる。この無文部を４分割するように，注口と大型の突起が付加される。注口は短い円筒形で，やや上向きに取り付けられており，上部に剥離痕が認められることから，他の３カ所と同様の突起がついていたと推定される。突起は，Ｃ字状貼付文を両端に付加した半円形の板状突起の上に円盤状の貼付文が乗る形状である。円盤状の貼付文は中央に貫通孔があり，貫通孔の周囲を盲孔と沈線が縁取る。円盤状の貼付文の下部は橋状把手となり，胴部上端の肥厚部と連結されている。体部には単節縄文が縦位に施されている。３は破片資料であるが器形は１と同様と考えられる。注口上部には貫通孔を伴う突起があり，注口との間を橋状把手で結んでいる。突起上部には，逆円錐の盲孔が施される。体部文様は沈線区画した磨り消しの楕円文で，注口直下の両脇に配置されている。

図34－２は壺形土器である。洋ナシ形の胴部に受口状の口縁部が付く器形である。口縁部端部には小さな山形突起が付加されており，口縁部内面から外面へ貫通孔が開いている。胴部最大径の部分には隆帯が巡り，口縁部の突起に対応して，上下方向に開口する環状突起が付加されている。胴部文様は横走する平行沈線の上端を区画し，口縁部の突起直下の盲孔を基点に，地文を磨り消した平行沈線による傾卵文を施している。

図34－４～９は蓋である。概ね円形で，内湾気味に開くもの（４・６～８）と外反するもの（５）があり，内湾気味に開く６は，端部の内面に稜を形成しつつさらに外方へ開く器形である。つまみは，遺存する４と不完全ながら痕跡の残る５・７から類推して，円環状であった可能性が高い。文様は，４・５は無文であるが，５には赤彩が認められ，６・７・９には断面円形の工具で刺突が施され，８では半截竹管で刺突列が施されている。６では端部を指でつまんで，内側から刺突が加えられている。６～９に関しては三十稲場式に比定される。

Ⅳ群２類土器（図35・36，写真33）

図35，図36－１～９は加曾利Ｂ式に比定される深鉢形土器である。図35－１～５は波状口縁をなすものである。１は口縁部外面を沈線区画の羽状縄文帯で縁取り，その下部に沈線区画の磨消羽状縄文帯によって肉彫り状に盛り上がった入組文が展開する。２では口縁部外面にキザミ目が付加され，無文部を挟んで横位の羽状縄文帯が施される。３は波頂部に沿って羽状縄文を施し，沈線を付加している。４では口縁部に横位の羽状縄文帯が施され，無文部との境を沈線で区画する。５では口縁部に沿って幅の狭い無文帯があり，沈線区画を境に羽状縄文が施される。

図35－６～13は平縁の口縁部資料である。６は内削ぎ状の内面が肥厚し，外面には沈線区画の細い縄文帯が平行して施される。11は口縁端部が無文帯で，沈線区画された直下に羽状縄文が施される。12では口縁端部を羽状縄文帯が縁取り，文様帯には肉彫り状の縄文帯が施される。７～10・13は粗製深鉢で，７～10には羽状縄文，13には単節縄文が施される。

図35－14～16は胴部資料である。沈線区画の羽状縄文帯で，14は入組文，15はクランク状文が施され，16は羽状縄文帯が幅広である。

図36－１～９は引掻文が施された粗製深鉢である。１～３が口縁部資料，４～９は胴部資料で

図35　2号河川跡出土縄文土器(15)

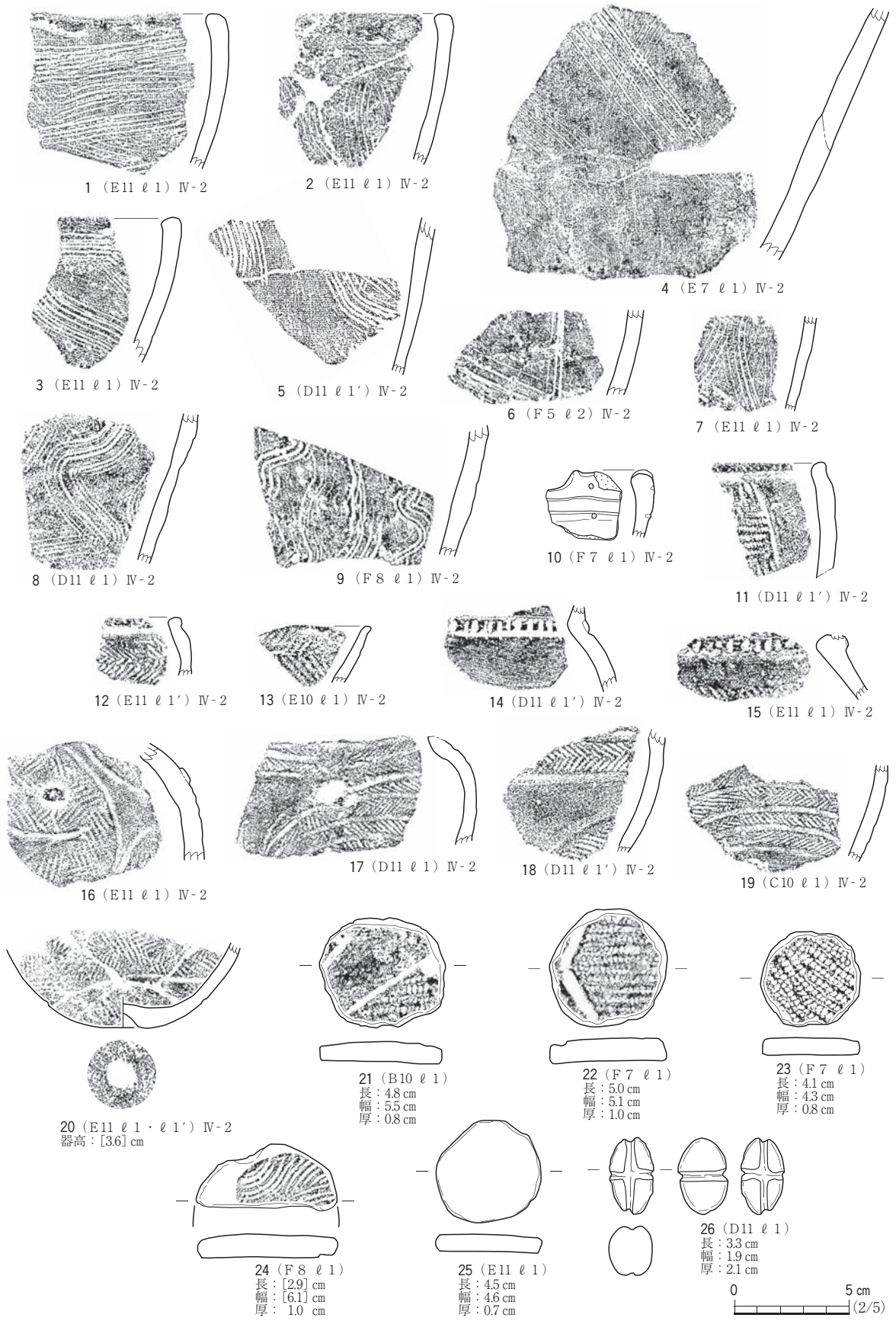


図36　2号河川跡出土縄文土器(16)

ある。平行沈線は横位（１），垂下する弧状（２・５・７），横位および斜位（３），斜位および縦位（４・６），垂下する波状（８・９）のモチーフが認められる。１は後期後葉の所産である可能性もある。

図36－10～20は加曾利Ｂ式に比定される壺形および注口土器である。10～12は内湾する口縁部資料で，10には中央がくぼむ小突起が付加され，外面には小さな円孔と横位の平行沈線が引かれる。11は沈線区画の羽状縄文で弧状モチーフを描き，12では横位の羽状縄文が施される。13は直線的に開く器形で外面に羽状縄文が施される。14・15は屈曲部付近の胴部資料である。14は屈曲部に平行沈線が引かれ，間にキザミ目が施される。15では隆帯状に盛り上がった部分にキザミ目が施される。16～19は胴部資料で，16は沈線区画の磨消羽状縄文で弧状モチーフを描き，貼瘤状の突起が付加される。17では羽状縄文帯の上から平行沈線を付加しており，18では沈線区画の羽状縄文帯で横位区画と弧状モチーフが施されている。20は底部資料で，球形の器形をなし，底面中央が凹む丸底である。外面には沈線区画の羽状縄文帯が施される。

土 製 品（図36，写真34）

図36－21～26は土製品である。21～25は土器片を加工した土製円盤である。土器片の周囲を研磨し円形の形状を作りだしている。26は長球形の有溝土錘である。長軸方向と短軸方向に溝が一周する。

石　　器（図37・38，写真35）

図37－１～12は石鏃である。１～４は凹基無茎石鏃である。１・２は基部のえぐりが深く，３・４は浅い。１は長さが幅の３倍近い細長いもので，２は基部付近の側辺が内湾気味で先端に向かい直線的になる器形である。３・４は内湾気味の側辺で，４は小型の資料である。５は平基無茎石鏃で，基部の端を欠損し，器形はやや傾いている。６～８は凸基有茎石鏃である。３点ともに小型で，８は茎部が相対的に長い。石鏃の完成品は素材剥片の両面から丁寧な押圧剥離を施されている。９～12は未成品とみられるもので，器体が厚く，縁辺の調整剥離は未熟である。

図37－13は石錐である。つまみは楕円形とみられるが，欠損している。基部に調整剥離を加え先端部を作り出している。先端部には使用による磨滅が認められる。

図37－14・15は削器と考えられる。横長の三角形に近い剥片の長辺部分に両面から押圧剥離を加え，刃部を作り出している。また，短辺の一部にも調整剥離が認められる。

図37－16・17は石核で，ともに自然面が残る。16は打面の移動を繰り返しながら，剥離が施されている。17は平たい素材の縁辺から求心的に剥離が施される。

図38－１は打製石斧の未成品と考えられる。楕円形の自然礫の一端に調整剥離を加え刃部を形成しているが，中途で放棄されたようである。

図38－２は敲石である。円盤状の円礫の側縁を中心に敲打痕が認められる。

図38－３は石剣の未成品と考えられる。薄板状の剥片に調整剥離を加えて器体を成形した後に，一方の面に研磨が加えられている。

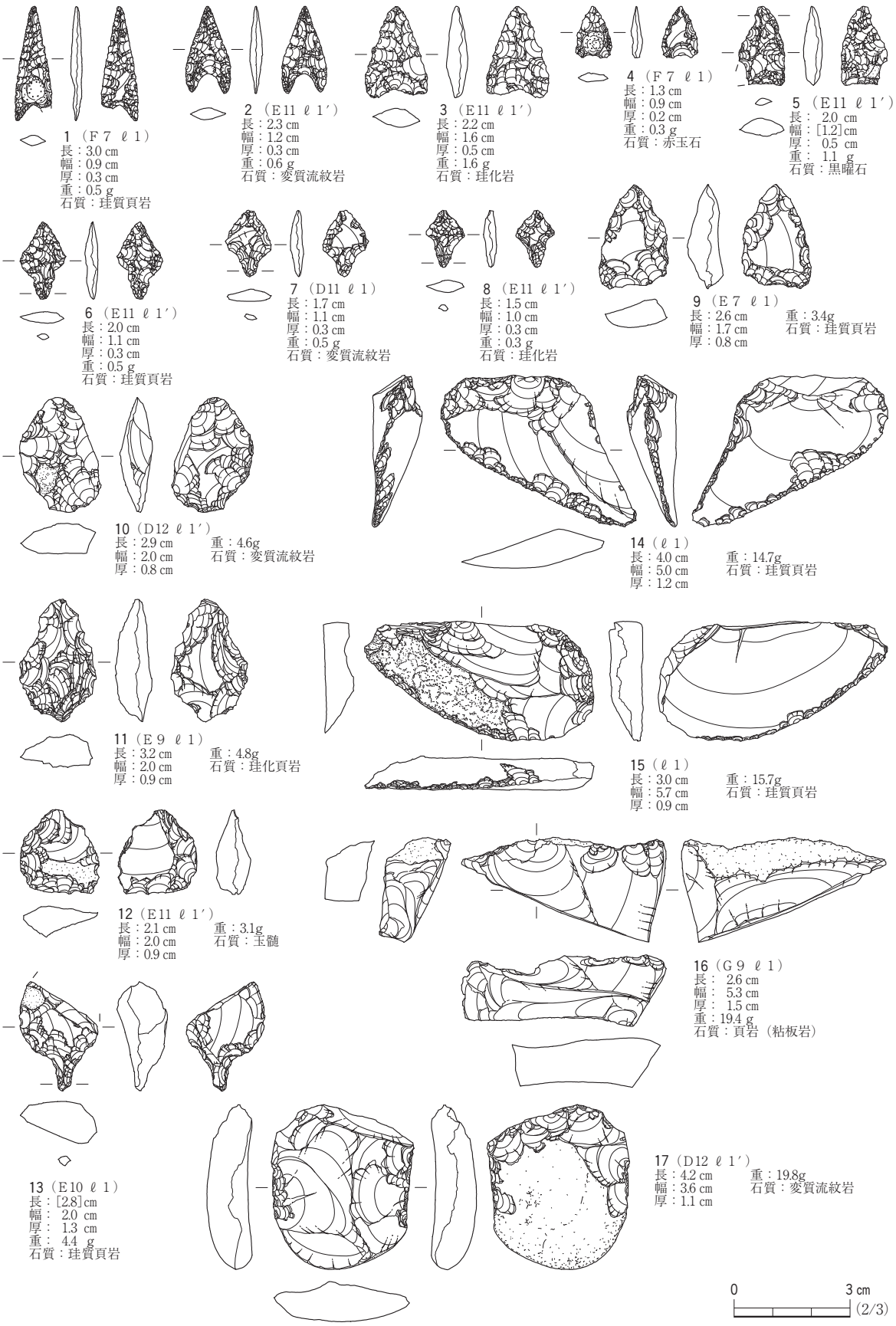


図37　２号河川跡出土石器（１）

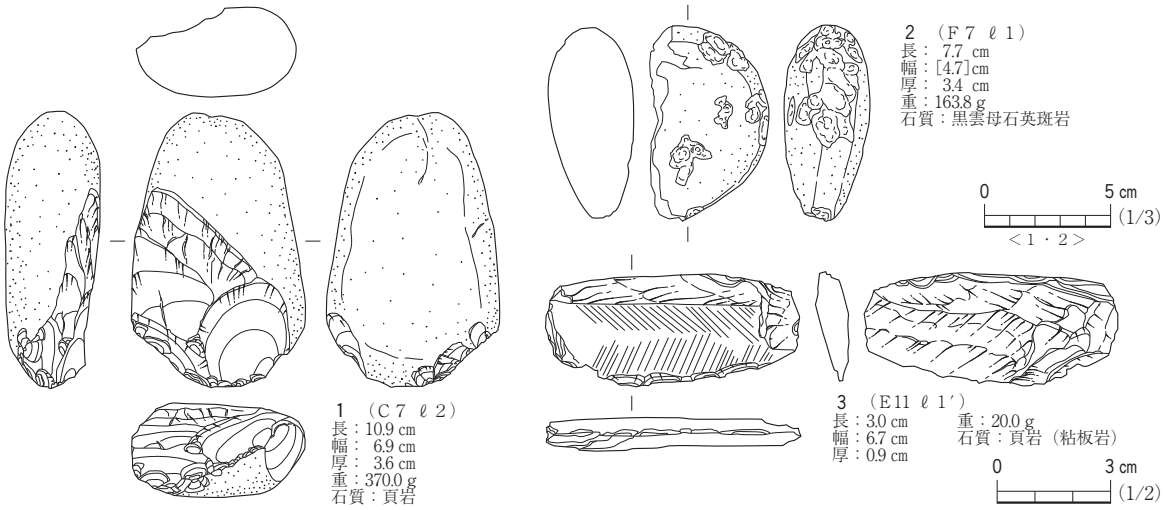


図38　２号河川跡出土石器（２）

ま と め

本河川跡は，調査区の東側をほぼ南北に縦断し，南端に湧水点をもっていた可能性がある。本遺跡の出土遺物の大半は本河川跡に伴うもので，特に縄文時代後期前葉の土器群は廃棄された状態で出土した。流路は北流して調査区外に延びており，赤柴遺跡検出の川４・５と合流することが推定できるが，合流部分が調査範囲外であるため，前後関係等の状況は不明である。河川跡の時期は，出土遺物の状況から縄文時代後期前葉から埋没が始まるようであるが，後期中葉でも埋まりきらず，水が流れていたものと考えられる。　（笠　井）

３号河川跡　川３

痕　　跡（図39，写真20）

本河川跡は，調査区西部～中央部のＡ10・11，Ｂ８～11，Ｃ７～９，Ｄ７・８，Ｅ６・７グリッドに位置する。調査区南西部のＢ11グリッド付近から始まり，北東方向へ曲線を描きながら延び，Ｅ７グリッド付近で川２と合流する。川２との前後関係は堆積土の観察から本河川跡が古い。河川跡の検出面はＬⅢ上面で，黒褐色土の帯状範囲を確認し，適宜土層観察用ベルトを設定して掘り下げと記録を行った。

堆積土は３層に分層でき，堆積状況からいずれも自然の水成堆積土と判断した。ℓ１は河川跡の南側に堆積する黒色土層で，主に縄文時代後期前葉～中葉以降の遺物を包含している。砂粒をあまり含んでおらず，川２のℓ１に対応する可能性がある。ℓ２は遺構北側に堆積する黒褐色土層で縄文時代早期末葉の遺物が少量出土した。ℓ３は最下層の黒褐色土で，白色粘土塊を含まないことから分層したが，ℓ２の一部である可能性がある。遺物は出土していない。

調査区内における本河川跡の規模は長さ34ｍ，幅3.6～6.2ｍ，深さは最深部で40㎝を測る。断面形は幅の広いＵ字形である。底面は起伏が多く，中央付近で急激に深くなる。底面の標高は，概ね南側が高く，北側が低いことから，川の水は北流していたものと考えられる。

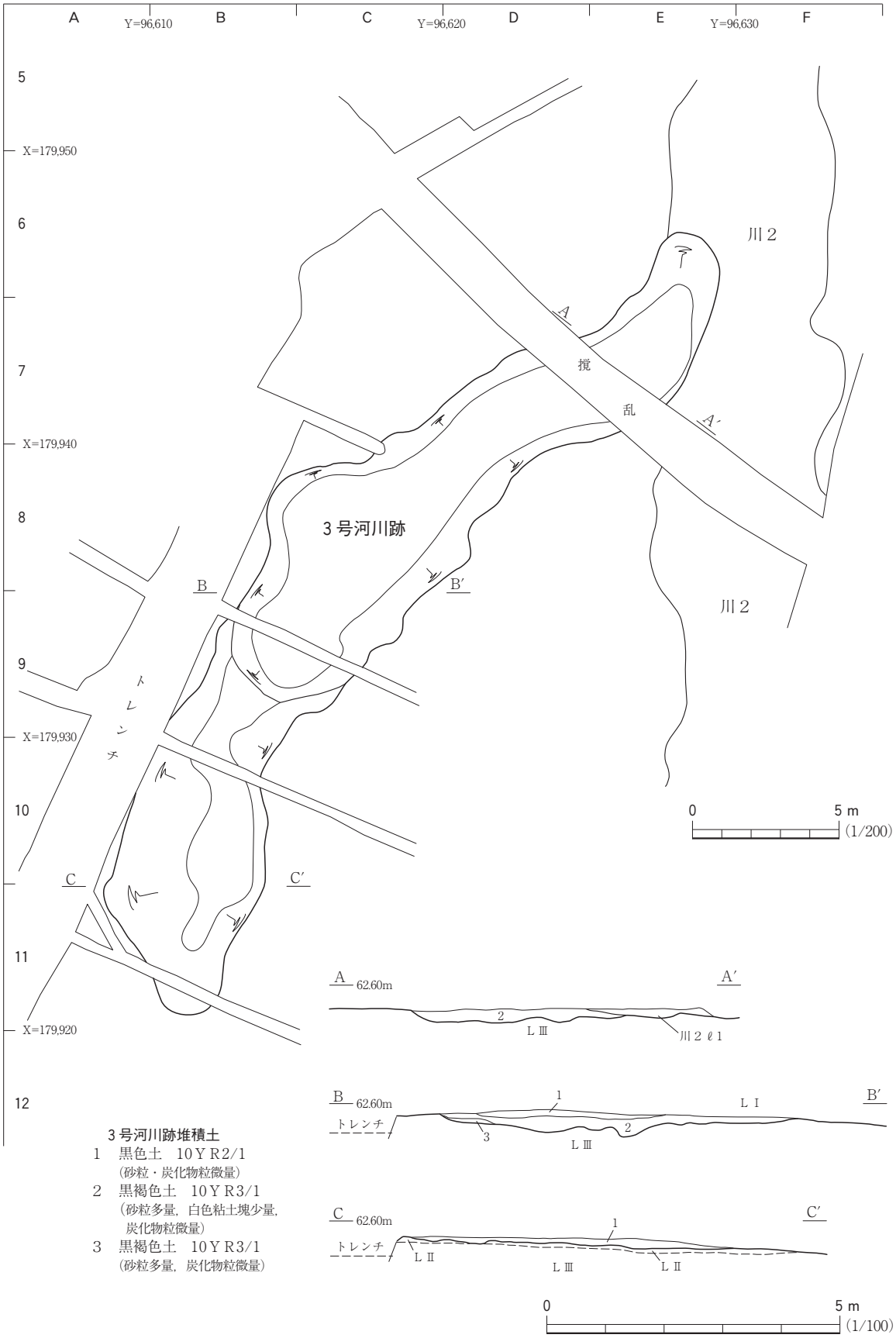

A
Y=96,610
B
C
Y=96,620
D
E
Y=96,630
F
5
X=179,950
6
7
X=179,940
8
9
X=179,930
10
11
X=179,920
12
川２
A
A′
撹
乱
3号河川跡
B
B′
川２
トレンチ
C
C′
0
5 m
(1/200)
A
62.60m
A′
2
ＬⅢ
川２ℓ1
B
62.60m
1
ＬⅠ
B′
トレンチ
3
2
ＬⅢ
C
62.60m
1
C′
トレンチ
ＬⅡ
ＬⅢ
ＬⅡ
0
5 m
(1/100)
3号河川跡堆積土
1　黒色土　10ＹＲ2/1
(砂粒・炭化物粒微量)
2　黒褐色土　10ＹＲ3/1
(砂粒多量，白色粘土塊少量，
炭化物粒微量)
3　黒褐色土　10ＹＲ3/1
(砂粒多量，炭化物粒微量)

図39　３号河川跡

図40　３号河川跡出土縄文土器

遺　　物（図40・41，写真35・36）

本河川跡からは，縄文土器片440点，石器11点が出土した。縄文土器は，早期末葉と後期前葉～中葉にかけてのものである。これらのうち縄文土器13点，石器１点を掲載した。

図40は縄文土器である。１・５・６が後期前葉の綱取式，３・４が早期末葉の日向前Ｂ式，２・７～13が加曽利Ｂ式に比定される。

１は，綱取Ⅱ式の深鉢形土器の器形復元したものである。胴部から口縁部にかけて外反気味に直立する平縁の器形である。口縁端部に半円形を中心に三角形の小突起を両脇に付加した突起があり，突起外面には盲孔が３個横位に穿たれる。この盲孔を基点に横位に展開する弧状モチーフに区画された磨消縄文が施されている。２は加曽利Ｂ式の底部資料で，内湾気味に立ち上がる器形で，外面に沈線，底面に網代痕が認められる。

３・４は胴部資料で，胎土に繊維混和痕が認められ，風化して不明瞭であるが地文に単節縄文が施され，文様帯に多条の平行沈線による菱形のモチーフが描かれている。５は堀ノ内１式に比定される深鉢形土器の胴部資料である。地文上に多条の平行沈線で弧状文と垂下する縦位・斜位の文様を描いている。６は綱取Ⅰ式に比定される深鉢形土器の口縁部資料である。口縁部無文帯が一段凹み，盲孔を付加された８字状の貼付文が認められ，その上の口縁端部に盲孔を付加された漏斗状の突起が付属する。

７・８は加曽利Ｂ式の口縁部資料である。ともに弱く開く器形で，口縁端部の断面形状は７が内削ぎ状で内面が肥厚し，８は丸状で外面側が肥厚し沈線が加えられている。文様は７が横位の羽状縄文の上から平行沈線を施しており，８では口縁部を縁取る無文帯下端に沈線を施し，その下の文様帯には沈線区画の羽状縄文で弧状モチーフを描き，無文部を磨り消している。

９～11は深鉢形土器の胴部資料で，加曽利Ｂ式に比定される。文様は９が羽状縄文の上から楕円状の区画沈線と文様内を区画する平行沈線で構成される。10は沈線区画の単節縄文で弧状モチーフが描かれる。11は屈曲部を含む資料で，屈曲部付近は沈線区画の無文帯でその上下に横位の羽状縄文が施される。12・13は加曽利Ｂ式の粗製深鉢の口縁部と胴部の資料で，引掻文で12では弧状，13では縦位の波状に文様が描かれる。12には，口縁端部に指頭押圧が観察できる。

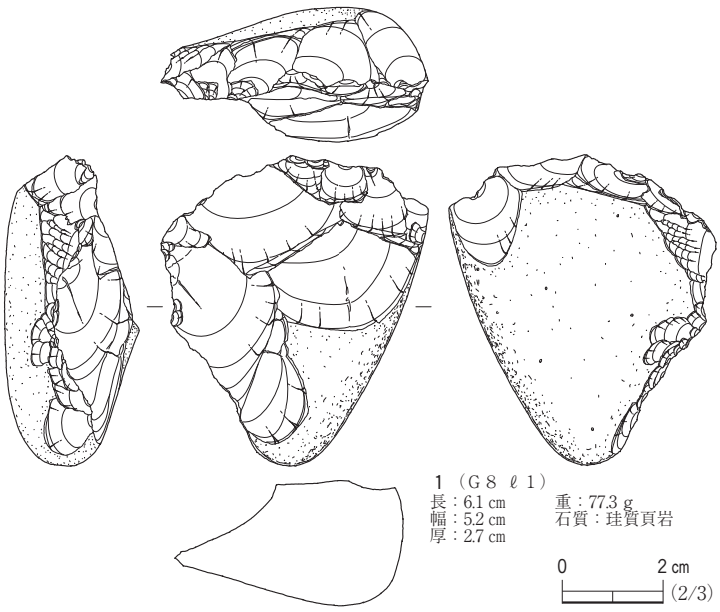


図41　３号河川跡出土石器

図41－１は石核と判断した石

器である。自然面が残り主に図の上方から加激されており，側縁には調整剥離痕が認められる。

ま と め

本河川跡は，調査区の西側から中央部にかけて延びる河川跡である。川２と合流し，本河川跡が古い。出土遺物の大半は縄文時代後期の所産であるが，堆積土下層からは縄文時代早期末葉の資料が少数ながら出土している。河川跡の時期は，出土遺物の状況から縄文時代早期末葉から埋没が始まるようで，縄文時代後期中葉でほぼ埋まりきったものと考えられる。（笠　井）

第６節　遺構外出土遺物

遺構外からは，縄文土器片3,048点，弥生土器片１点，土製品２点，石器246点が出土した。図42に示したように，遺構外出土遺物は河川跡と重なる部分に集中しており，本来河川跡に伴っていたものが，後世の耕作および調査初期の採り上げミスにより河川跡から分離され，遺構外となったものが多いと考えられる。土器は縄文土器が主体で，弥生土器がごく少量含まれる。縄文土器の時期は，前期前葉，後期前葉，後期中葉，晩期のものが認められ，後期前葉～中葉の資料が多い。

出土遺物の時期ごとの分布の傾向としては，縄文時代前期の所産がＣ７・８グリッド周辺，晩期の資料がＧ10グリッド周辺に集中し，縄文時代後期の遺物は，ほぼ河川跡に重なるように出土している。これらの遺物のうち，特徴的な土器40点，土製品２点，石器７点を図示した。以下土器については，序節第１章第２節の分類に従い記述していく。

Ⅱ群２類土器（図43，写真37）

図43－１・２は縄文時代前期前葉に比定される深鉢形土器の胴部資料である。胎土に繊維混和痕

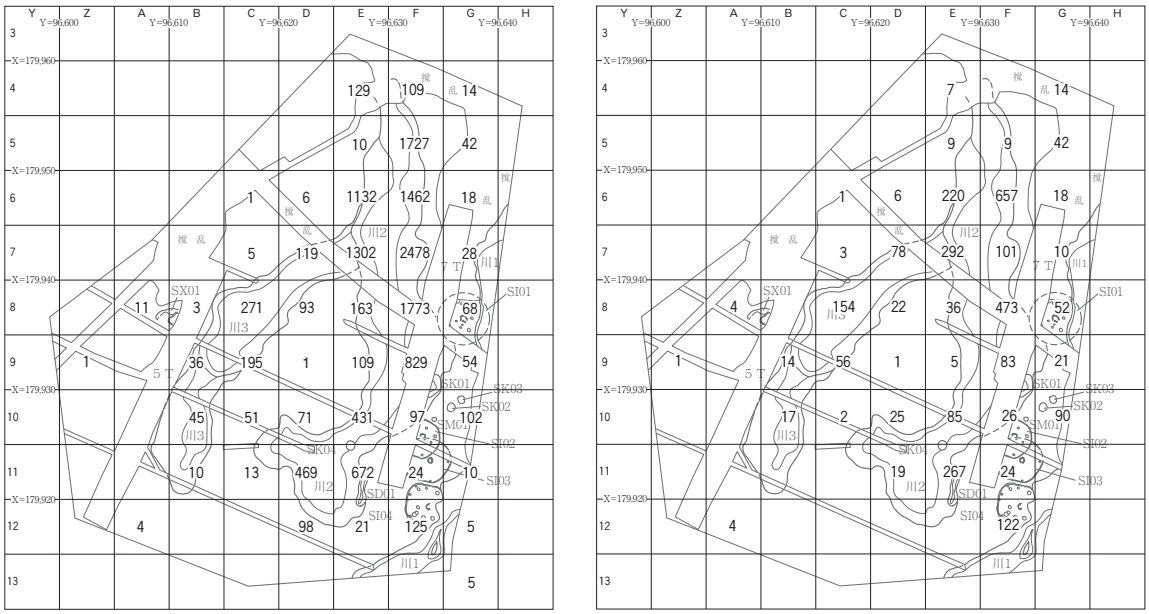


図42　遺構外出土土器分布状況

が認められ，外面に結束一種の縄文が施されている。

Ⅳ群１・４類土器（図43，写真37）

図43－３～13は綱取式に比定される資料である。３～５は口縁部に無文帯をもつ深鉢形土器の口縁部資料である。無文帯下端を隆帯で区画しており，３では隆帯の上下，５では下部に沈線を沿わせている。３・４は波状口縁の波頂部で，盲孔と沈線を伴うＣ字状貼付文が貼付けられている。いずれも綱取Ⅰ式と考えられる。

６・７は胴部文様が横方向に展開する綱取Ⅱ式に比定される深鉢形土器の胴部資料である。６では沈線区画の磨消縄文帯が横位と斜位に施され，７ではＪ字状文とそこから横方向へ連続するモチーフが，平行沈線で区画された無地文部で表現されている。

８～10は口縁部の突起資料である。８は波頂部付近で，波頂部先端に内面上方を向いた漏斗状の貼付文が付加され，中央に盲孔が認められる。突起正面にも縦に４カ所の盲孔があり，口縁部外面に沿って横位の短沈線が施される。波頂部下は弧状沈線で区画され，沈線の上部と口縁部外面の短沈線の下端に沿ってキザミ目が施されている。９は複雑な文様の横楕円形の突起で，突起下には貫通孔と橋状把手が付加されている。突起部分はＣ字状貼付文を横にしたような粘土帯の縁取りがあり，盲孔と沈線が付加される。10は半円形の突起で，貫通孔とその横の盲孔から構成される。

11は橋状把手である。両端に盲孔があり，沈線が連結する横位の弧状貼付文が認められ，その上部には単節縄文の地文に蛇行状沈線が垂下している。12は注口土器の注口である。短い円筒形で，上部に漏斗状の突起がつく。13は口縁部資料で，外面に単節縄文が施されている。

図43－14・15は堀ノ内１式に比定される胴部資料で，集合沈線で文様が描かれる。

図43－16・17は底部資料で，17は底面に縄文が施されている。

Ⅳ群２類土器（図44，写真37，38）

図44－１～15は加曾利Ｂ式に比定される資料である。１～７は深鉢形土器の口縁部資料である。１～３は波状口縁で，１・２は口縁端部外面に沿ってキザミ目を伴う２条の平行沈線が引かれる。３は口縁部外面と屈曲部下に羽状縄文帯が施され，羽状縄文帯の上から平行沈線が引かれる。４は鉢形土器の可能性もある口縁部資料で，端部に小突起をもち，端部外面に縄文帯を施し，縄文帯下端の区画沈線下を磨いて縄文帯との間に段差を形成している。細い無文帯を挟んで平行沈線を施された羽状縄文帯が巡る。５・７は口縁部外面に羽状縄文帯が巡り，５は縄文帯下端に沈線区画が認められる。６は口縁部外面と屈曲部を横位沈線で区画し，区画内に沈線区画の磨消羽状縄文で，木葉状の弧状モチーフを描いている。

８～12は深鉢形土器の胴部資料と考えられる。８～10は沈線区画の羽状縄文帯で横位の帯状モチーフが描かれている。９では縄文部以外を磨り消しており，縄文帯が肉彫り状に盛り上がる。11は屈曲部に平行沈線が引かれ，沈線の上下に弧状沈線で区画された単節縄文が認められる。12は壺形土器の可能性もあるもので，羽状縄文帯が横位から縦位へ直角に折れるように施され，その上から平行沈線が付加されている。

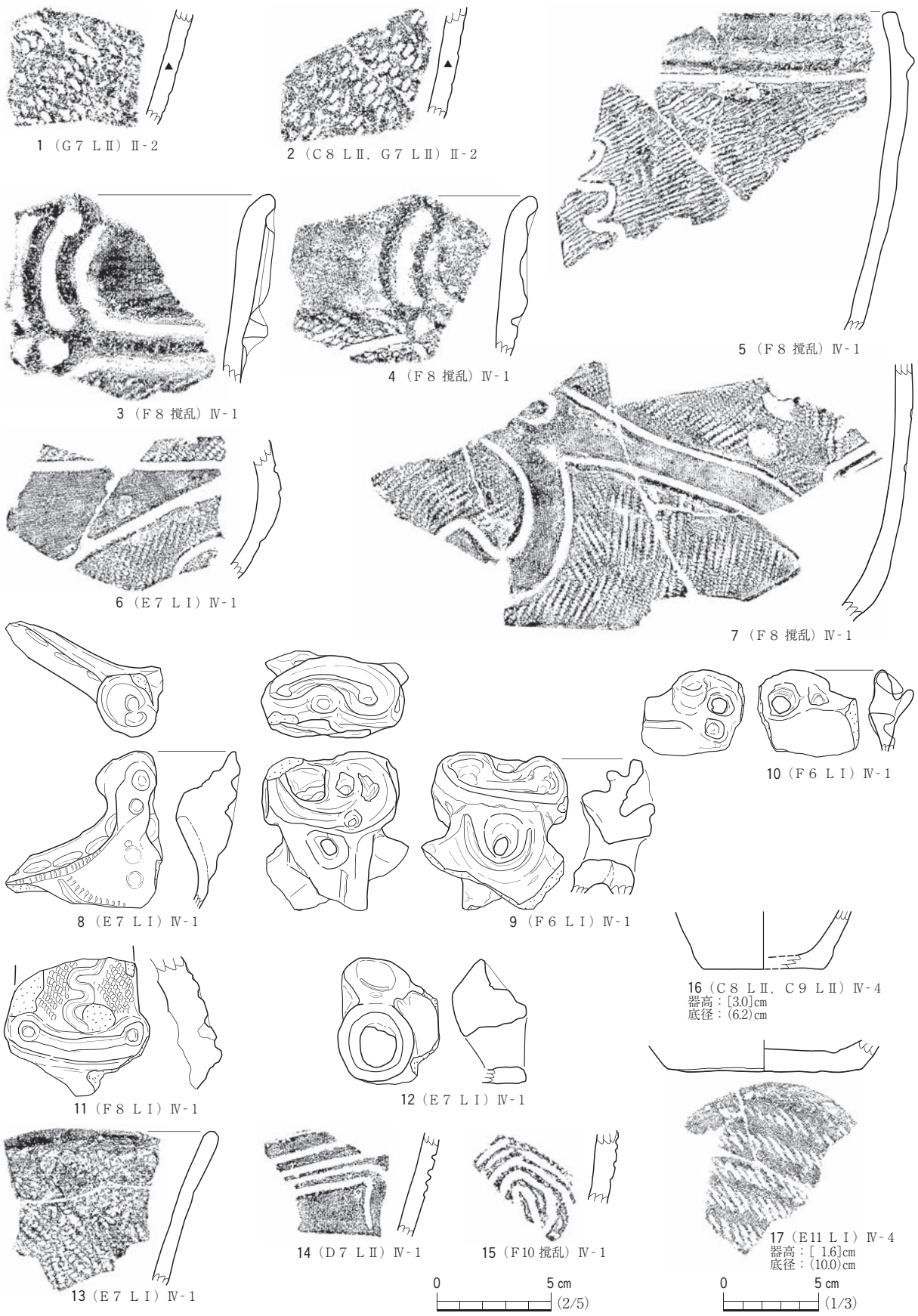


図43　遺構外出土縄文土器（１）

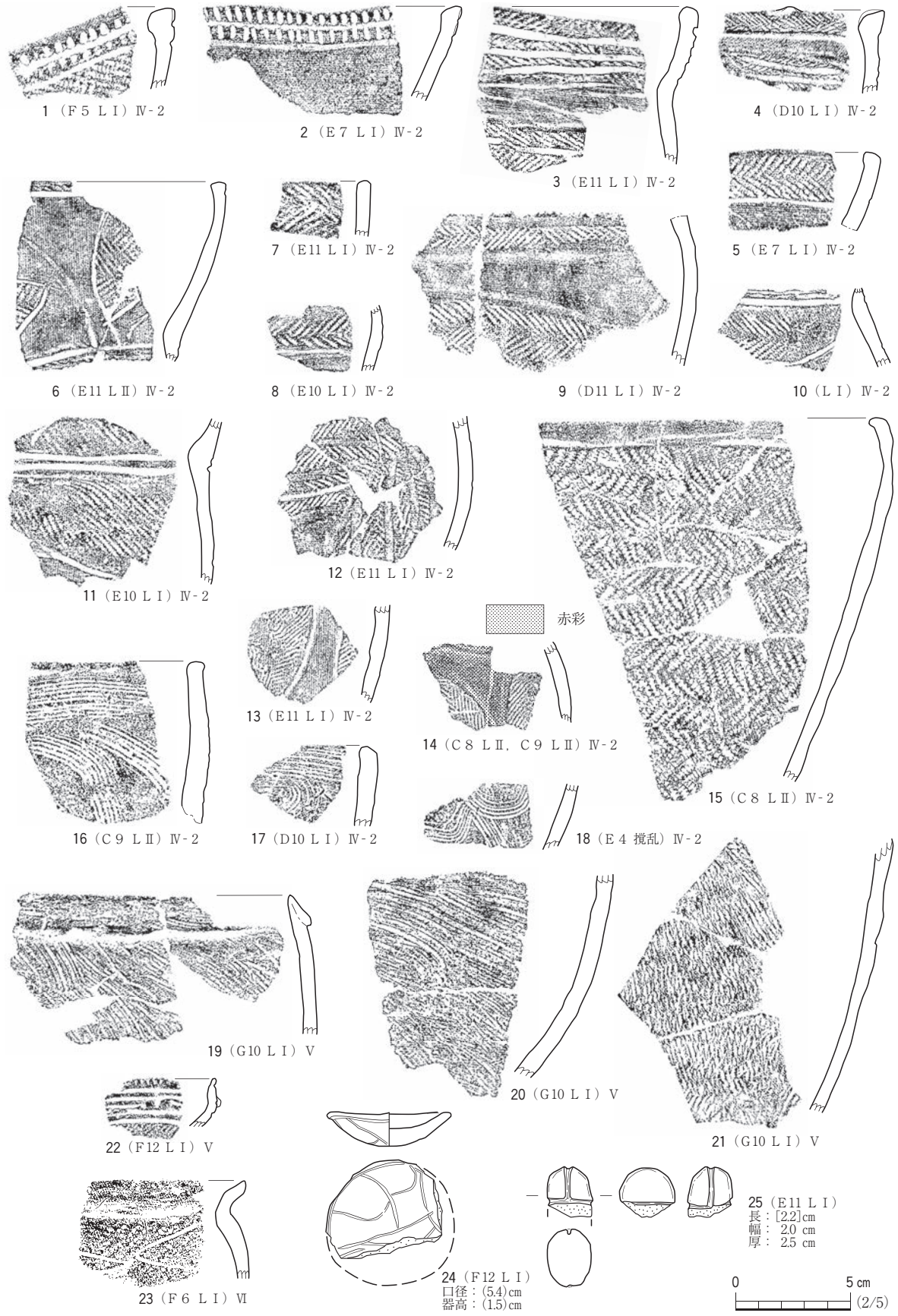


図44　遺構外出土縄文土器（２）

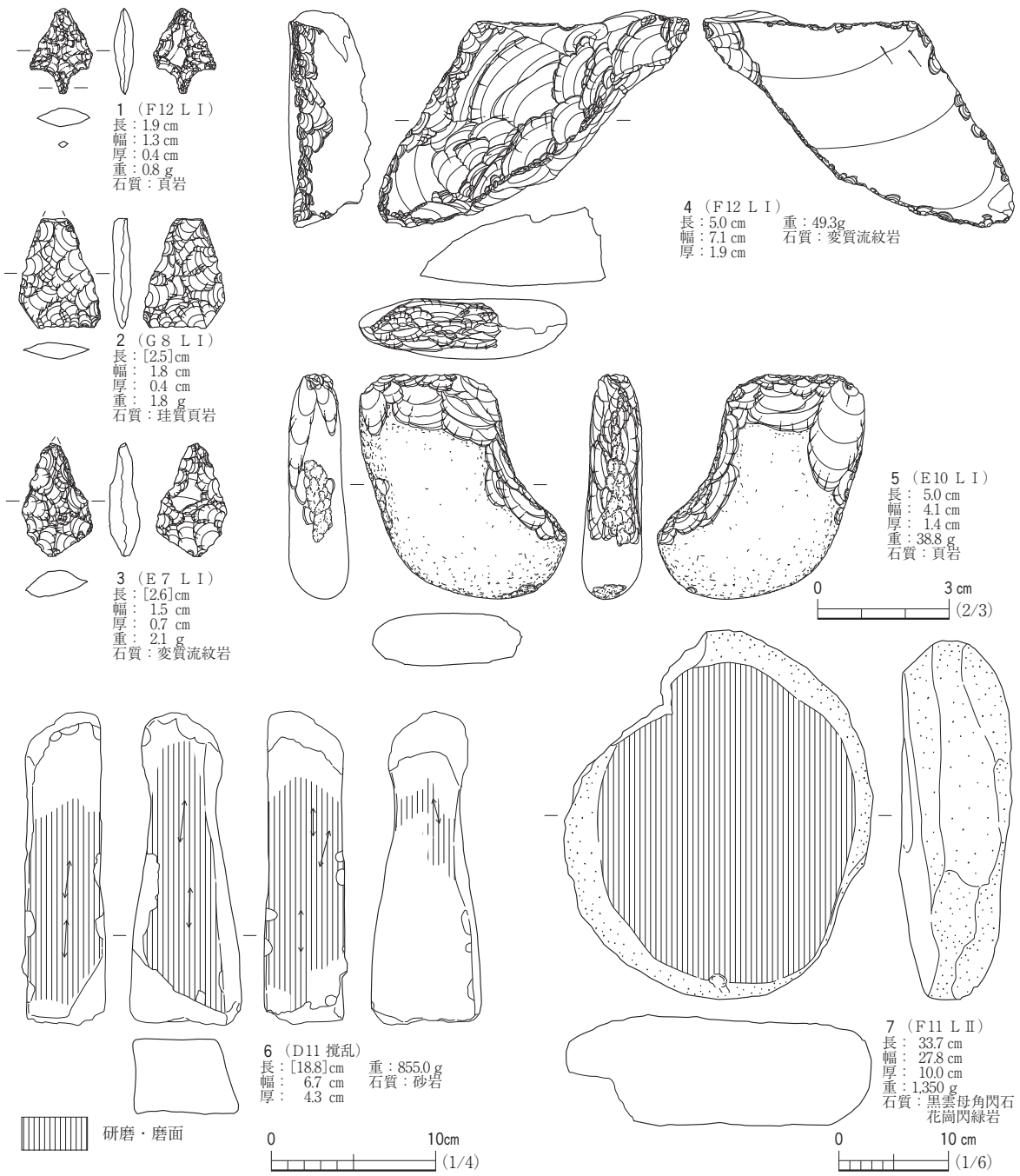


図45　遺構外出土石器

13・14は注口土器か壺形土器の胴部資料である。沈線区画の充填・磨消羽状縄文帯で縦位の弧状モチーフが描かれる。14には赤彩も認められる。15～18は粗製の深鉢形土器である。15は外面に羽状縄文が施され，口縁端部付近の細い無文帯下端に沈線区画が認められる。16～18は引掻文を施されたものである。16・17では口縁部外面に横位の引掻文と，その下の垂下する弧状の引掻文が施され，18では横位に波状の引掻文が施されている。

Ｖ群土器（図44，写真38）

図44－19～22は縄文時代晩期の資料である。19～21は粗製の深鉢形土器で，外面に撚糸文が

施されている。19は口縁部資料で，端部が折り返し状の口縁となっている。22は注口土器か壺形土器の口縁部資料と考えられ，端部にキザミ目が巡り，口縁部外面の文様帯には沈線を平行に施し，中央がくぼむ貼付文を付加している。文様帯の下位には単節縄文が施されている。

Ⅵ群土器（図44，写真38）

図44－23は弥生時代中期前葉の資料である。甕形土器の口縁部資料とみられ，頸部下に単節縄文と沈線が施されている。

土 製 品（図44，写真38）

図44－24・25は土製品である。24は浅鉢か蓋のミニチュア土器と考えられる。口縁端部外面に横位の沈線が巡り，底面に弧状沈線による格子状のモチーフを描いている。25は有溝土錘で，半分を欠損している。長球形と考えられ，短軸方向と側面に溝が一周する。

石　　器（図45，写真39）

図45－１～７は石器である。１・２は石鏃で，１が平基有茎石鏃，２が平基無茎石鏃である。３は未成品であろう。いずれも両面から押圧剥離が加えられている。４は二次加工のある剥片である。三角形の縦長剥片の周縁に調整剥離を加えている。５は石核とみられる。平たい円礫の一端の両面から剥離を行い，剥片を採られた部分は刃部状になっている。６は砥石である。直方体の側面すべてを砥面とし，使用により中央付近は細くなっている。平安時代以降の所産と考えられる。７は石皿である。板状礫の一面を磨面としている。（笠　井）

第３章　ま　と　め

荒井遺跡は，段丘の縁に細長く延びる沖積地に立地する遺跡で，今回の調査により，沖積低地に形成された微高地上に展開する縄文時代後期の集落の姿と，集落に隣接する河川跡の一端が明らかになった。今回の調査で検出した遺構は，竪穴住居跡４軒，土坑４基，土器埋設遺構１基，溝跡１条，性格不明遺構１基，河川跡３カ所で，出土遺物は縄文土器片14,725点，弥生土器片１点，石器668点，土製品８点である。以下，遺跡の変遷を概観し全体のまとめとする。

荒井遺跡で最も古い遺物は，３号河川跡から出土した縄文時代早期末葉の土器片である。胎土に繊維混和痕が認められ，縄文の地文に沈線で斜格子状文が施されており，日向前Ｂ式に比定される資料である。また，遺構外出土遺物の中に，地文に結束２種を施した縄文時代前期前葉に比定される資料も出土しているが，当該期の遺物はきわめて少なく，遺構は伴っていない。

次に確認されるのが，縄文時代後期前葉の遺構・遺物である。遺構は，２号河川跡の右岸寄りの川底で検出された４号土坑がある。４号土坑は，堀ノ内１式に比定される土器が出土している。４号土坑のすぐ東側で，２号河川跡右岸にあたる微高地上に立地する２号住居跡もこの時期の所産である可能性がある。遺物は，２号河川跡の北部を中心に多量の土器片が投棄された状態で出土している。綱取Ⅰ式の新段階～Ⅱ式の古段階に比定される資料を主体とし，堀ノ内１式・三十稲場式に比定される資料を少数含む。２号河川跡出土の縄文土器は荒井遺跡の調査で出土した土器の７割を超えており，その中でも当該期の資料が大半を占める。これらの資料の供給元であると考えられる集落跡は，今回の調査区内では確認されておらず，遺物の出土状況から，調査区外の東側に当該期の集落があった可能性がある。また，隣接する赤柴遺跡で当該期の集落跡が確認されているが，直線距離で40ｍの距離がある。

続く，縄文時代後期中葉では，２号河川跡右岸の南北方向に細長い微高地上に石囲炉をもつ３軒の住居跡（先述した２号住居跡が当該期の所産であれば４軒）と３基の土坑，１基の土器埋設遺構，１条の溝跡が立地する。また，３号河川跡左岸の微高地上には，石皿を伴う１号性格不明遺構が立地する。土坑のうち，１号土坑は比較的大型の土坑で，堆積土から，石器の微細な剥片が多量に出土した。また，出土遺物から２号土坑および１号土器埋設遺構は，より新しい時期の所産である可能性がある。この時期は，隣接する赤柴遺跡の南東向き斜面に当該期の集落跡が営まれる時期で，河川を挟んで段丘斜面と低地部の微高地上に集落が営まれる景観が推定できる。遺物は，遺構および各河川跡から加曾利Ｂ２～３式に比定される資料が出土している。

その後，縄文時代後期後葉～晩期・弥生時代と土器・石器が少量確認されるのを最後に本遺跡では遺構・遺物が見られなくなる。この頃までには完全に埋没したものと考えられる。　　（笠　井）